混ぜ合せて、敵の皮膚に密かにつける。すると、皮膚病のやうになつて腐り、ひどくなると死ぬ。

マライ人はまた龜を水で煮てどろ〳〵した液をつくり、それに毒蛇コブラを煮つめて作つた液を混ぜてかたきの頭につける。さうすると、必ず命がなくなるといふのであるがこれは少し怪しい。

マライ人は魚からも毒藥を採る。イカン・クリ又はイカン・スムピランと呼ぶナマヅのやうな魚や、鯉の一種のイカン・シャや河豚の類のイカン・ブンタル、カスペの類のイカン・パリといつたものが最も多く用ゐられるものであるが、その中でもイカン・シャのきもには非常に強い毒素があるので、最も珍重される。大抵火で炙り乾して、粉末にし、前に述べた毒樹ユーパスの樹液と混ぜて用ゐるのである。暗殺用などに悪用される。

# インドの風俗

## ヒンヅー教徒の服裝

中世紀以來、マホメット教徒やヨーロッパ人の往來が頻繁だつたので、現今のインドの服裝は舊風新俗相錯綜してゐるが、代表的の服は矢張純粹のヒンヅー教徒のそれであらう。

ヒンヅー教徒の服は實に簡單——といふよりはむしろ原始的のものである。先づ男子の衣服は「チャドル」といふ上衣と、「ドーチ」といふ下衣とに分れてゐるが、上衣といひ下衣といふも、別々に洋服や支那服それのやうにちやんと身體に合ふやうに仕立たものではない。即ち「チャドル」も「ドーチ」もす法こそ違ふが、どちらも等しく一枚の廣い布である。

「チャドル」は幅四五尺、長さ一丈ばかりの、いはゞ敷布のやうなもので、地質は綿布、毛織物絹布等種々ある。著方は恰度肩掛（シヨール）のやうに背に羽織り、前方に垂れた布の右端を左肩に、左端を右肩に廻して背後に下げて置くだけのことである。

「ドーチ」は「チャドル」よりも幅が一尺ばかり狹い代りに長さは一丈四五尺もある。地質は大抵綿布か薄手の毛織物で色合は白が普通である。これを恰度腰卷のやうに腰へ卷くのだが、何しろ莫迦々々しく丈が長いから卷き方はなか〳〵難かしい。貧民や下級勞働者は大抵この腰布を著

〔第七千圖〕南部インドの子供

最後の三尺乃至四尺を殘して、それを左の腋下から背に廻して右肩にかり、端はそのまゝ前に垂れて置くのが普通であるが、ベンゴール地方の婦人のやうに顔を見せないのを以て作法としてゐるものは、それを以て覆面する。要するに婦人は大抵の反物をそのまゝ身體

けるだけで『チャドル』は用ひない。

婦人の衣服は男子の『ドーチ』を一層長くしたやうなものである。通例、幅は四尺、長さは三十尺乃至四十尺、着方は先づ最初男子の腰布と同樣に腰に卷き、

に卷きつけてゐるのである。この婦人用の衣服を『サーリー』といふ。

『サーリー』にも一枚數百圓もする絹製の上等品から買へる木綿製の安物まで種々あるが、一般の婦人の平常着は大抵木綿物である。併し、木綿でも白木綿のものを用ひるのはベンゴール地方の婦人だけで他地方の婦人はみな色物を用ひてゐる。

田舍の婦人は現今でも大抵この『サーリー』一ッで體の上部を丸出しにしてゐるが、都會の婦人は近來殆んどみな胸當を着けてゐるやうである。上流の婦人の胸當は西洋風に做つて種々の飾りを附したものが多く、なか〳〵慢裁よく出來てゐる。

履物は奇妙な形の木履とスリッパーとがヒンヅー教徒固有のものであるが、近來上流社會や都會では靴も相當に用ひられてゐる。併し、下級社會のものは餘所行きの時でもなければめつたに履物は用ひない。平常は男女とも素足のまゝである。勞働者の裸足は別に珍らしいこともないけれども、巡査や兵隊が裸足で闊歩してゐるのはいさゝか滑稽に見える。

被り物としては例の『ターバン』がある。これをインドではフェンタとかパグリーとか呼んでゐる。幅五尺、長さ五六十尺の薄手の布で、色合は白色が最も多く、淡紅色、淡綠色等がこれに

次ぐ、巻き方は一寸口ではうまく云ひあらはせないが、要するに頭の鉢全體が隠れるやうにぐるぐる巻きつけるのである。

ターバンは現今では婆羅門の學者、ベンゴール・バブー及びマラバル地方の或者以外のインド人は殆んどみな常用してゐるが、これは本來マホメット教徒から傳つたものであつて、ヒンヅー教徒固有の服裝ではない。

**男女の裝身具**

服裝は前述の通り極めて簡單であるが、裝身具は驚くほど多種多樣で、殆んど四肢五體飾られざるところなしと云つていゝくらゐである。

先づ男について云へば、耳には耳環があり、頸には頸飾りがあり、腕環があり手足の指には指環がある。このうち足の指環は銀製だが、その他のものは大抵金製で、上等の品には種々の寶石が用ひられてゐる。けれども近來耳飾りや頸飾りを使用する者はめつきり少くなつた。

婦人の裝身具としては前記のもの〻外に、鼻飾り、足輪、腰帶等がある。鼻飾りはぶら下げる道具で主に小型の金環である、中には寶石を用ひたものもある。足輪は足首に嵌める環で主として



銀製、腰帶は大抵金の細い鎖である。何れの國でも婦人は裝身具を好むものゝ相場が極つてゐるけれども、インド婦人のやうに多種多樣の貴金屬を身につけるものは珍らしい。それでも中流以上の婦人は概して量よりも質に重きを置くからまだいゝが、下級の婦人は何でも數さへ多ければいゝといつた調子で、無暗矢鱈と安物を飾り立てる。見られたものではない。

**諸神信徒の記號**

インド人の中には間々、前額部に奇怪な記號をつけてゐるものがある。一見文身のやうたがあれは自己の屬する宗派を示すための記號であつて刺青ではない。

ヴィシヌ神の信徒は、額に三本の縦線を引いてゐる。中央の線は赤色、兩側の二線は白色で、恰度三鉛の形を呈してゐるが、その中央の赤線はラキシミー天女、兩側の白線はヴィシヌ神の兩足を表はし、三線が眉間に於て相合してゐるのは、蓮花を象徴してゐるのである。この記號を俗に『ナーマム』といふ。

シヴァ神の信徒は、同じく前額部に白色の太い横線を三本引いてゐる。これはシヴァ神の破壞建設、維持の三力、及び過去、現在、未來に通ぜる神力を表象したもので、俗に『トリプンダ』と稱する。

ヴイシヌ、シヴア兩神信徒の熱心者には、前記の記號を額ばかりでなく、肩、腕、胸、腹、及び背部にまでも附してゐるものも珍らしくない。が、婦人は大抵『ボツトウ』といふ赤色、黄色或ひは黑色の小さな星か、又は一本の細い線を前額部に附してゐるだけで、男子のそれのやうな大袈裟の記號を附してゐるものは極めて稀である。

## 刺青

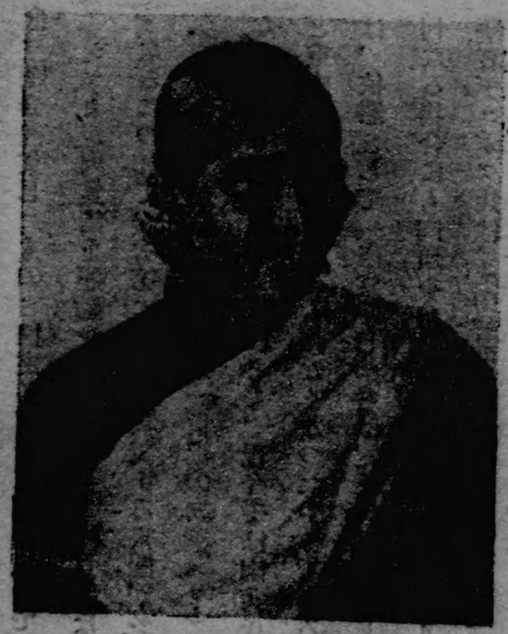
身體に刺青をするものは、男子よりも女子に多い。一寸珍らしい現象であるが『刺青は女子の魔除けになる』と信じてゐるからである。これは、ヴイシヌ神が惡魔退治に出懲けた時、その配偶ラキシミー女神の腕に、留守中の御守として、日、月、武器及びトラウシーの形を彫したといふ神話から來た迷信だが、現今でも無智の連中は眞に『惡魔除け』の効力があると信じてゐるのである。然し、之を行ふものは、上流社會よりも下層社會に多く、都會よりも田舍に多いやうである。

この魔除けのためにする刺青の模樣は通常前記の日、月、武器及びトウラシーの形だが、南部インドのトダ族などは草木鳥獸等の形を好んで點する。また、タミール人には、模樣よりも自己の姓名を點する者が多いやうである。

## 肉食とインド人

古代に出來た『ヴエダ』といふ書には、水牛や牛を犧牲に供したことや、それらのものを料つたことなどが記載されてゐるさうだし、有名なチヤラ經典といふ數千年前の醫書には、『牛肉は胎兒を强健ならしむるに偉効あるを以て、姙婦は盛んにこれを食すべし』といつた記事があるこのことであるから、上古のインド人は、隨分肉食したものと推定して差支へはないであらう。

シヤカが肉食禁止運動を始めて後も、肉食はなか〳〵止まなかつたらしい。が、その教が盛んになるにつれて、次第に野菜を賞美する人間が多くなつて、遂に肉食は罪惡なりと考へらるゝやうになつた。かくて、西暦第一世紀の初葉（?）から最近まで、純粹のインド人は全く肉食をしなかつたものである。けれども、現今では肉食民族の影響を受けて――であらう、肉食は以前ほど重大な罪惡とは考へられなくなつたやうである。しかし、現今でもある種姓に屬する者の間では、依然として『肉食をした者は、その種姓から破門する』といふひどい戒律が守られてゐて、如何なる場合にも肉類を口にしやうとはしない。インド研究者として知られてゐるフランスの土俗學者デユボア氏は、その著書『ヒンヅー教徒の風習と儀式』に於て面白い實見談を述べてゐる――



〔第七十一圖〕　タムール人

ヒンヅー教徒は、その教の戒律によつて禁ぜられた食物を採らないばかりでなく、中には他人が飲食してゐるのを見ただけで氣分が惡くなる者がある。あるバラモンの男は、自分が卵燒きを作つてゐるのを見て急に氣分が惡くなり、さう〳〵三日ばかり寢ついてしまつた。

また、ある時タンジョールの一村落でバラモンの家が燒けたことがある。それ火事ださいふので、村民一同大騒ぎをして驅けつけたが、當の主人公は「かまはないからそのまゝ放つておいてくれ、消すには及ばない」さいふ次第。しかし、いくら主人公が「消すには及ばない」と云つたところで、たゞ手を拱いて見てゐるわけにも行かないから、一同は一生懸命で家財道具を火の中から取り出した。

すると、おゝ何さいふことであつたらう。一人の男がかつぎ出したのは豚肉の片鍋、いま一人の男が持ち出したのは、地酒の壺ではないか……そこで、さう〳〵その主人公は村に居たゝまらなくなつて、何處へか夜逃げをしてしまつた。……

卵燒を見て氣分が惡くなる、豚肉と地酒の壺を持つてゐるたさいふだけのことで夜逃げをしなければならなくなる——何れもこの世の、しかも二十世紀の今日のことさは思はれない。が、何百年來肉類やなまくさものを一切口にしないで、菜食ばかりして來たのであるから、さういふ極端な人間がゐたところで別に不思議はない。

現にわが國には、肉類を食ふと氣持が惡くなるさいふ者が田舍などには珍らしくないのだからかう云ふ氣持もあり得るものだとは考へられぬこともない。また豚肉や地酒の壺を持つてゐることを見附れば、インドでは、バラモン階級のものでなくともその土地にはゐられなくなる。酒はともかく、豚はインド人の最も嫌惡するもので、それを口にすることは當然破門に値する罪惡だからである。

## インドの酒

酒は現今では一般に用ひられてゐるやうである。が、以前には矢張り口にすることを許されなかつた。マヌは飲酒を以て「牛を食ふよりも重大な罪惡である」として禁じ、違犯者には鉛の熱湯を呑ませたり、額に烙印を捺したりしたこと傳へられてゐる。またシャカも禁酒を五戒の一としてゐる。だが、いくらやかましい禁止令があつても、飲酒の風は昔から一向衰へなかつたらしい。

現在最も廣く用ひられてゐる酒は、椰子の樹液を原料として醸造したトデー、ナラックといつたものであるが、暑い土地のことであるから、ビールのやうなものも相當用ひられるやうである。

## 斷食

ブラフマーナの斷食苦行は有名なものだが、ブラフマーナでなくとも、インド人は大抵定期の斷食をする。無論、食糧節約のためではなく、一つの行としてである。

先づヴィシヌ神の信徒は、毎月、十一、十二の兩日斷食又は減食を行ふが、殊に十一日は同教徒の大切な斷食日となつてゐる。またチエットラ（三四月）の白分月（スクラパクシャ）――新月より滿月まで――の九日目は、ヴィシヌ神がラーマに化身して世に出でた日だとて、また、スラヴナ（八九月）の黑分月（バクラパクシャ）――滿月以後――の八日目はヴィシヌ神がクリシナに現生した日だとて、俱に重要な斷食日となつてゐる。

シヴァ神の信徒は毎月黑分月の十四日、卽ち新月の前日一日絕食して、その夜は徹夜し、三時間ごとにシヴァ神を拜する。

何れも斷食の時には湯はもとより水すらも全然口にしないのである。

## 沐浴

ヒンヅー教徒は毎日必ず河川又は池、堀などに於て沐浴する。これは彼等の信奉する教の戒律に適はせんがためでもあるが、また一には、かくすることによつてその身の罪穢れが消滅するといふ信仰からでもある。だからセンヅーは河川や池を神聖視し、一寸した河川や池にはみな靈水の名を附してゐる。最も有名なものは、ガンガ、シヤムナー、ヒンド、ゴーダヴァリ、ネグブタ、カウヴエリ、サラスワテー等の諸川、スリ、チヤンドラ、ブシカランの諸貯水であるが、就中、ガンガ河は最も靈驗あらたかな靈水として彼等の尊崇の的となつてゐる。月蝕の日、夏至春分秋分、新月滿月の夜等の潔齋日に於ける同河畔の混雜は實に驚くべきもので、毎年これがために數多の溺死者を生ずるのことで

ある。

沐浴は無論一定の形式によつて行はなければならない。たゞ、水の中へ入つてでたらめにぢやぶ〳〵やればいゝと云ふわけのものではないのである。先づ裸體となつて水中へ立つ。そして東の方へ向つて不動の姿勢をとり、左のやうな祈禱の言葉を唱へる。——

「オー、ガンガよ、

梵天の甕に生じて、シヴァの頭髪に下り、ヴィシュの足を經て、すべての人の罪業を洗ひ去り、彼等を清淨にし、彼等に祝福を授けんがために地上に流れ來りしガンガよ、

卿は下界萬物の維持者にして、且つ保護者なり。

余は卿を思ひ、而して卿の神聖なる水中に浴することを心深く念ず。

願はくば余の罪業を拂拭し、すべての災禍より救はせ給はんことを。」

かくて、太陽を拜し、暫く默禱した後、兩手で水を掬つて神に供する型を三度くりかへすのである。

**面白い挨拶**

インドには種々雜多の種族があり、且つ種々雜多の教があるのだから、禮儀作法も一樣ではない。先づ同業間の挨拶の仕方について云へば、ヒンヅー教徒は恰度日本人が神佛を拜する時のやうに兩手を合はして、ナムシカー（ベンゴール地方）又はナムスカラ（南インド地方）などと云ひ、マホメット教徒は右手を胸又は額に當て、頭を一寸動かしながら「アッ・サラーム」といふ。またボンベイ地方に多いパーシー人は輕く頭を下げて「サヘブジー」と云ふ。

これらの方法は別に珍らしいといふほどのものではないが、面白いのはヒンヅー教徒の最敬禮である。即ちヒンヅー教徒固有の禮式では、先づ對者の足下に跪いて、兩手でその人の足を戴く形容するを以て、長上の者に對する正式の挨拶となつてゐる。勿論それは室内での話だが、途上でも、特に尊敬すべき人に會つた場合には、まさか跪きはしないけれども、一寸蹲んで同樣の型をやる。隨分念の入つた禮式ではある。

が、わが國でも最近まで平民はよく土下座をやらされたのだからばか〳〵しいなどといふ資格は、われ〳〵にはないわけである。

# 種姓の話

**種姓の現情**

インドの社會に「種姓」と云ふものゝ存在してゐることは、わが國にもよく知られてゐるところであるが、普通にはこれをブラフマーナ、クシャトリヤ、ヴァイシャ及びスードラの四階級としてゐる。ブラフマーナは漢譯には婆羅門と書かれ、神官に當り、クシャトリヤは漢譯の刹帝利、または刹利で、軍人であり、ヴァイシャは漢譯の毘舍、農工商の業に從事する輩のこと、またスードラは漢譯の戍陀羅、或は首陀であつて、鳥獸魚介の捕獲や屠殺などを事とするものである。古い佛典などにはかう云ふ風に見えてゐるのであるが、今日のインドの實情を調べて見ると、種姓の差別は決してこの四つに止まらないことがわかる。昔は比較的に社會の組織が簡單であつたから、この四大別ですべてを網羅することができたであらうが、近代に入つてからはこれに經濟的の要素が加はつて、極めて複雜なものとなつたのである。



例へばブラフマーナと云つても、現在では必ずしも神官の職にしばられてゐるわけではなく、生活のため或はその他の理由によつて種々の職業に從事してゐる。また、同じヴァイシャのうちでも、菓子屋、小間物屋、油屋、髮結ひなどと商賣が異なると同時に社會的階級もちがふのである。だから歴史的に云へば、種姓は氏族階級であること勿論であるが、近代的意味では社會的職業的階級と見ねばならない。それに極めて面白いと思はれるのは、かう云ふやうにだん〳〵階級の別が複雜になつたにも拘はらず、種別の精神が毫も緩和されてゐないことであつて、職業により、或はその他の理由によつて數百數千に分裂した種姓は一九二五年の統計によれば、全インドを通じて二千五百以上

〔第七十二圖〕 インドの行商

にも及んでゐると云ふが、それでも相互の間には嚴格な區別があつて、相容れざるこゝ、種別の簡單であつた昔の時代に比べて遙かに甚だしいものがあるといふ實狀である。

種姓のちがふ者同志は互に結婚を通じない、また種姓の卑しい者とは食をともにすることさへしない、甚だしいのになると口も利かないといつた風であつて、殘酷無比の惡習慣であるが、それが現今でも少しも緩和されてゐないのである。隨つてそれを犯せば宗教上の重罪人としてその愚かする種姓から除外される。インドでは種姓から放逐されるのは社會的の死を意味してゐる。その嚴格絶對なることは到底わが國の封建時代に於ける士農工商の區別どころのものではない。

さればインドでは、下僕の子は如何に才幹があつても、國内にゐる以上はまた下僕となるより外に途がない。下等種姓の俊才を將校に採用すれば、それよりも種姓の勝れた兵卒たちは、その指揮に從ふことを肯じない。また生れ落ちる時から、否、先祖代々かゝる環境の中に育てられて來た下等種姓の子弟には、悲しいかな、自分より上級な種姓に屬するものに命令するだけの勇氣を持たないものが多い。所謂、奴隷根性、己れよりも身分の高い者にはどうしても頭があがらないといふ情ない素質を殆んど先天的に持つてゐる者がその大多數を占める。向上の精神などは無論彼等にはないのである。

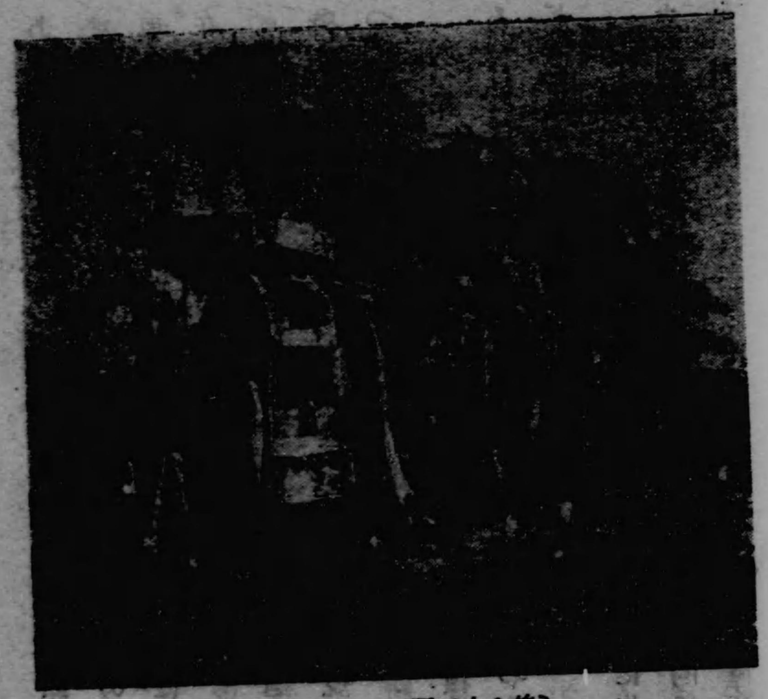
**種姓の由來**

「リグ・ヴェダ」のできた時代――紀元前一千四百年頃のインド・アーリヤ人の社會には、何等種姓制度と稱すべきものは存在しなかつたやうである。やがて平和の時代が續くにつれて、社會はやうやく沈滯に向ひ、從來充ち滿ちてゐた進往敢爲の氣風は次第に消え去つて、人々は活動よりも整理を好むやうになつて行つた。

そこで、從來は何等の制限もなく、何人でも自由に取捨選擇することのできた職業も、漸次、專門的となり、世襲的となり、いやでも應でもある一定の職業に從事しなくてはやつて行けなくなつて來た、そして他の社會と同じやうに、當時のアーリヤ人の會でも、最も尊むべき職業は神に仕ふることであつたので、神官は絶大の勢威を持つてゐる。そこで自然彼等は專横を極め、遂に所謂「四姓制度」なるものを制定して、自ら社會の最上級に納まつたうへ、その制度を價値づけるため、「婆羅門は神の口より生れた者である……」といふ牽强附會の說をでつち上げて盛んに宣傳した。

絶大な權勢を有する僧侶の言であるから、何人もこれに異議を挾むことは許されなかつた。そして、その夢のやうな說は何時しか神聖視せらるゝやうになつた。かくてこの忌むべき制度は確立せられたのである。

往時の種姓は前にも云つた通り、ブラフマーナ、クシャトリヤ、ヴァイシャ、スードラの四種であつて、その中ブラフマーナは神官の階級で神祀宗教を司り、四種姓中の最上位を占めてゐた。クシャトリヤは軍人の階級で、平時には政治を執り、一朝事あるときは兵を率ゐて出征するを本務とし、第二位を占める。ヴァイシャは實業階級で農工商の業に從事し、第三位である。以上の三種姓は同じくアールヤ民族に屬する者であるところから、同じやうに「ドウイジャ」(再生族)と稱せられて、最下級のスードラに對しては、非常に多くの特權を持つてゐた。例へば、クシャトリヤ姓のものは自分のため祭祀を執行することを許されてゐたさかヴァイシャ姓のものは祭祀を自分で執行することは許されなかつたが、學問は自由にできた。さか云ふ類である。しかるにスードラ姓は神を拜することはもとより、讃歌を讀誦することも學問をすることも嚴禁されてゐた。たゞ獸々として再生族に隷屬奉仕し、種々の雜役に服するよりほかに途はなかつたのである。



〔第七十三圖〕 インド王の象

右の四種姓中には、極めて嚴格な敎則があつて、各種姓の社會的地位、從事すべき業務のほか、配過選擇の範圍生活の程度等一々明細に規定されてゐた。そして、違犯者を取締るため、各村に「パンチャエッド」(五人會)といふ機關が設けられてゐた。これはちやうど江戸時代の五人組制度の村方三役(名主、組頭、百姓代)に匹敵する村の委員の會で、パテル(村長)がその議長を勤め、社會の基礎たる種姓を維持するために村民の日常の行動一切を監視しいやしくも分を越えた振舞をなす者が

あつた場合には、直ちにこれを處罰したのである。罪の重い者はそのカスト種姓から放逐することになつてゐた。蓋し當時に於ても破門は、社會的の死を意味してゐたこと故、如何なる刑罰を與へるよりも利き目があつたのであらう。「五人會」はそれ以外に公事訴訟のことも取扱つた。現在でもこれと同形式の自治機關が存在してゐる。

かういふ風で數百年間はこにかく別に事もなくて過ぎたのであつたが、そんな亂暴なことが何時までも續くものではない。果してこの階級制度の規定を適用することのできない場合現象が起つて來た。

先づ第一に外國人が續々こやつて來出した。全く種姓と關係のない人間に種姓の規定を適用するわけには行かないから、何處までも種姓を維持しやうとするブラフマーナ姓のものどもは非常に當惑した。

次に困つたのは、相異なる種姓に屬する男女の間に生れた子供の始末方であつた。ブラフマーナの制定した教法では、相異なる種姓の男女は絶對的には結婚することを得ない、そして、もしその間に子供が生れた場合には、その子供は、父の種姓にも屬せず、母の種姓にも屬しないこと



ふことになつてゐたのである。從つてその混血兒は社會から卑められた。それでもその子の父親が母親よりも上級の種姓に屬する場合——例へば、父がブラフマーナ姓母がヴァイシャといふやうな場合にはまだいゝのであるが、反對に母の方が父よりも種姓の高いものであつた場合には、非常に輕蔑せられた。殊に母がブラフマーナで父がスードラといふ時は、その子は殆んど人間並に取扱はれなかつたものである。

かういふわけで種姓と關係のない人間があらはれて來たが、バラモン教では、人類を四種姓——四種類に限定してゐたので、どうしても、それらの例外を四種姓と關係のあるものとしてしまはなければ氣がすまない。もし、四種姓と全く關係のない民族ができ上つたならば、種姓の制度は全く權威のないものとなる。換言すればインドの民族制度は根柢から壞されてしまふ。そこでブラフマーナの學者達は非常に困つた擧句、窮餘の一策として、外國人も混血兒も一切引くるめて四姓の分化、卽ち混血の現象であるとしてしまひ、それに一々新規の名稱を附したうへ、新しい職業を當て嵌めた。

例へば、ブラフマーナの男とヴァイシャの女との間に生れた混血兒はアムバシュタといふ名稱

を與へられて、醫療を職とする者と定められた。またヴァイシャの男とクシャトリヤの女との間に出來た子供はアヨガヴと稱せられて、職業は大工と定められた。その外バラモンの男とスードラの女との間に生れた子供はニシャダと名附けられて、漁獵を營む者と定められた。かういふあんばいで數多の新しい種姓ができて來たが、それが獨立したものとなつたのは最近百年間のことである。

**種姓と一般民衆**

以上述べた通り、この種姓の制度がインドそのものゝ發達を阻害してゐることはどの位であるか知れない。さればこそガンヂー氏始め讃多の社會改革家はインド諸宗派の協調と、この種姓の撤廢とのためにあらゆる努力をしてゐる。しかも、それらの運動は、種姓の撤廢といふ限りに於ては、殆んど何等の効果をも擧げてゐないやうである。

しかし種姓といふものゝ存在することは、統治者たるイギリス政府に取つては極めて好都合なのあるで。何故ならば、「インド民衆の大部分を占める種姓の低いものは、いはゆる『インド人のインド』には共鳴しないからである。イギリスの下にあれば、とにかく種姓の上下などにはこだわらない一視同仁の統治を受けることができるが、もし獨立――とまで行かなくとも自治を許された場合でも、インド人が支配者の地位を得れば、彼等の抜き難きカスト觀はことゝに現はれて、下級者を壓迫するにちがひないと考へてゐるからである。

## インドの婦人

**その境遇の變遷**

現今のインドの代表的種族たるヒンヅー教徒の先祖、即ちアールヤ人の婦女子は頗る元氣に富み、隨分活動したものであつたらしい。世界最古の書典と稱せらるゝ『リグヴ・エダ』紀元前一四〇〇年頃なるの讃歌の中にも、婦人の手になつた部分がかなり多いといふ。また、その頃の婦人には、堂々たる男子の神學者と論戰しておくれを取らぬ程の傑物が尠くなかつたとのことである。從つて、往時には現今のやうな極端な男尊女卑の風も、早婚の弊もなく、婦人は男子と對等に交際して、自由にその配遇者を撰擇することができた。

されば、往時の婦人は決して『弱き者』ではなかつたのであるが、夫に對しては極めて貞淑でよくその本分を守り、不貞の者は極めて稀れであつたと云はれる。サヴィトリーといふ一美少女が、數多の王子から降るやうに求婚があつたにもかゝわらず、サッテヤヴァーンといふ貧しい、しかも十八箇月の後には死ぬと占ト者が讃言したところの若者に戀して、遂に之に嫁し、熱烈な愛、貞節な勤行を以て『死の神』ヤマをして如何ともする能はざらしめ、めでたく夫の長壽を全うせしめたといふ一場のローマンスは、現にインド婦人の龜鑑として、小學校の讀本にまでのつてゐる。

かく、古代にあつては、女子はみな自ら夫を擇び、また夫の死後は、獨身で過すのも再婚するのもすべて、自己の心のまゝにすることができたのであるが、『マヌ法典』(紀元前九百年頃の產物)のできた頃から、漸時女子の境遇は變つて來た。そして、その後、四種姓制度が確立するとともに、著しく窮屈なものとなつて、もはや從來のやうな自由な行動を執ることはできなくなつた。その狀態は爾後約一千年間、格別の變化もなくて續いた。が、その後西方より押し寄せて來たマホメット教徒の侵略によつて社會の全組織に一大變化を生じた結果、婦人の地位は再び變化した。よくなつたのではなくて、一層惡くなつたのである。

蓋し、インドアールヤ人はもと〳〵宗教的民族であつたから、外敵の侵寇に遭つても、之に對抗しやうとはせず、退いて自己の民族制度の維持保存に專念した。

然るに、マホメット教徒は多妻主義を實行するものであるが、彼等の中には他人の妻に手を觸れゝば、死を以て罰せらるゝといふ嚴格な規則があるので、たとへ異民族の女といへどもそれが何人かの妻と定まつてゐる場合には決して手を出さない。そこでインド人はそれを利用して自己の子女を保護しやうと企てた。

この企ては確かに有効であつた。が、その結果忌むべき早婚の弊風を生じ、遂に婦人は社會より隔絕した生活——所謂「ゼナナ・システラム」(閑居主義)の生活を營むべく餘儀なくされてしまつたのである。

今日、インドの社會改革者が絕えず奔走するも、遂にその弊害を除去する能はざるほど頑强なる病根が植ゑつけられてしまつたのである。

## 極端なる早婚

今日、世界諸國民中、恐らくインド人――殊にその婦女くらゐ年若くして結婚するものはないであらう。支那人は男女七歳にして席を同じくせずと云つたが、インドの婦女のこの時代は既に結婚期である。

最近の統計によれば、全インドに於て五歳以下の妻君が三十萬二千四百餘人、同年齢以下の寡婦が一萬七千七百餘人となつてゐる。實に驚くべきことではないか。之を以て見ても如何に幼女の婚嫁せる者が多いかが判るであらうと思ふ。無論、如何にインド人が早婚であると云つても、まさか五歳や六歳で夫と同棲するわけではないが、結婚した以上遅くも四五年の後には夫君の家庭の人となるのである。現にベンガール州の上流社會では、女は大抵十歳にして夫婦生活を始め十二三歳の頃には母となる者が尠くないといはれる尤も。インドの女子は氣候の關係で非常に早熟であるから、十三四歳になれば、身體は立派に成熟する。從つて十二三歳で子供を生んだからといつても別に異とするには當らない理窟ではあるが、その當人にとつては隨分情ないことであらうと思はれる。まして、十歳や十一歳で夫を持たされては、恐らく苦痛以外の何物をも味ふことはできまい。



## 早婚制度の弊害

何故かゝる亂暴なことが行はれるのかといふと、インドでは、女兒が成熟期を過ぎるまで結婚しなかつた場合には、當人はもとより、その父母兄弟までも宗教上の罪人として、社會よりあらゆる侮辱を蒙り、一生涯人交りができなくされてしまふからなのである。

されば、女兒を持つた父母の最も苦心焦慮するところは、如何にして早くその女兒を他に嫁がせやうかといふことである。一刻も早く適當な配偶者を見出さなくては安心ができないのであるから、みな相競うて婿となるべき男子を搜し求める。從つて、男子はどこまでも強いものである。結婚を交換條件とすれば隨分無理なことでも徹し得る。そこで、男子の方では、持參金を幾何々々附けて寄越さなければ嫁にもらはないとか、これ〳〵のことを承諾して呉れなければ結婚しないとか、とにかく交換條件が滿足されなければ話にのらないといふ風で、神聖なるべき筈の婚姻は事實上宛も物品取引のやうになつてゐる。

隨つて、將來有望な男子ほどその評價は高い。中等學校を卒へたくらゐの少年に女兒をやるには、先づ一千ルピーくらゐの持參金を附けなければならない。大學に於て學位試驗受驗準備中の

青年の父兄は、尠くとも三四千ルピーは要求する。相當の學校を卒へて官衙又は銀行、會社等に奉職してゐる者は、極く下級の――いはゞ初任給の金五六十圓を頂戴してゐる者でも、一萬ルピーくらゐ出さなくては婿にできない。といふ有樣であるから、意氣地のない青年は實に惡い影響を受ける。よく新聞紙上に左のやうな求婚廣告が現はれることがある。

「血統正しきカヤスト姓の男子、カルカッタ大學醫學部卒業、研究のため洋行せんとす、結婚を求む。但洋行費用の負擔を要す。」

「將來アイ・シー・エス試驗（トギリスに於て行はるゝインド文官試驗）に應ぜんと心懸くる婆羅門の中學生、學費を支出し得らるゝ婦人と結婚を求む。委細面談。」

これによつても如何にその弊害の甚しいかゞよく判る。かゝる有樣故、女兒を持つた兩親の心配苦痛は實に甚大である。從つて、女兒の出產は、その一家にとつては甚だありがたくない。殊に資產のない家庭にとつてはまるで厄病神を背負ひ込んだやうなものである。そこで、女兒が生れると密かにこれを片附けてしまふといふ恐るべき惡風が生じて來る。何れの國に於ても、出產男女兒數はほゞ同じか又は女兒の方が幾分多いのが通例であるが、インドの大多數の州に於てはそれがまるで反對で、男兒の出產數よりも女兒のそれの方が遙かに少い。その最も顯著なのはバンチャブ州である。同州に於ける一九〇一年から一九二一年に至る二十年間の出產率は男兒一千人に對して女兒八百五十人となつてゐる。然して、現在同州の總人口は大約二千五百萬人であるが、そのうち約一千三百五十萬人は男子で、女子のは約一千百五十萬人と云はれる。卽ち、約二百萬人少いわけである。

**教育と男女間の差別**

無論、女兒の出產率が男子のそれよりも少いから、又女子の總數が總人口の半數以下であるからとて直ちにそれは女兒を殺害するためであると斷定するわけには行かないが、尠くともそれが重要な原因の一つであることは多くのインド研究者の等しく立證するところである。

殺してしまふのは最も極端な例であるが、たとへ殺さないで育てゝも、もともと厄介者なのだから鄭重には取扱はない。例へば、男兒が生れた場合には、如何に貧しい者でも相當のお祝ひをする。またその近親知己も必ずそれ相應の贈物をして祝ふ。が、女兒出生の場合にはお祝ひもしないし、御祝儀を贈るものもない。

また、男兒出生の場合には、『シャスチ』といふ特別の婦人保護者――產婆兼保姆のやうなもの

を雇つて、生兒及び產婦の肥立ちを看護させ、できれば子供が四五歲になるまでのお守りをさせることになつてゐる。慣例ではなくて宗教上の規律によつてである。そして、出生の第五日目にはその父親が赤兒の枕許に種々の草花や果物を飾り、ペンヂィンキを備へて置く。これは神が赤子の額に幸運隆盛の印を書きつけて下さるといふ信仰からであるが、女兒の場合には、かゝる宗教的儀式まで全く省略される。

そのくらゐであるから、女兒は殆んど教育などは授けられない。女兒には『グル』といふインド教の教師を頼んで、その教理や種々の宗教的儀式を教へ込むほか、中以上の家庭では學校の教師か上級學校の學生かを家庭教師として普通教育を受けさせる。一體、インドの家庭では學校教育よりも所謂家庭教育に力を注ぐ。これは一つは完全な小學校がないからであるが、また一つは階級制度が莫迦に嚴重で、自分より目下の者とは口も利かないといふ風なので、貧しい者でも行き得る小學校へ行くことは、少し上級の階級に屬する者は潔しとしてないためである。そこで、それらの家庭ではみな前述の通り家庭教師を雇ふのであるが、家庭教師と云つても、その家庭に同居するものは殆んどなく、教師の方から朝とか晩とか一定の時間を定めて通勤するのが通例である。

しかし、この『グル』にしろ家庭教師にしろ、男兒のためにのみ雇ふのであつて、女兒のためには上流の貴族、富豪か特志家でなくては雇はない。僅かに親達が裁縫と料理と初步の讀書算數とを教へるくらゐのもの、それらのものを習ひに家塾へ行く、又は音樂の師匠でもゐるなどと云ふのは餘程開けた家庭の娘である。然して、女兒の家庭に於ける宗教的行持は、たゞ將來立派な良人を持つことができるやうと、念ずるだけである。蓋し、それが彼女達の求め得る唯一つの幸福であり、また最大の使命であるからである。かくて、女兒のある家庭では、種々の宗教的お祭りが行はれる。

**家庭に於る宗教的生活**

女兒のある家庭で必ず行はるゝお祭りの一つは『シヴァ祭』である。これは、その女兒が將來シヴァ神（インド教の破壞建設の神）のやうな立派な人を良人に持ち得るやうに祈るためのお祭りで、通常、一年に一回五六月の頃行はれる。

その當日になると、少女達は各自シヴァ神の像として二個の小さな土像を作つて、自家の神棚に安置する。そして、美しい草花や、果物を供へた後、全身を水で念入りに洗ひ

清めて、新らしい著物に著更へ、改めて祭壇の前へ坐つて禮拜する。そして、

「歸命頂禮シヴァ尊、歸命頂禮バッチャラ尊。」などゝ、くりかへし〳〵唱へながら、シヴァ神の氣高く美しい容貌と、類のない勇猛な屬性とを一心に冥想するのであるが、その時、シヴァ神の容貌がはつきりと眼の前に浮んで來れば、將來必ずシヴァ神のやうな氣高い容貌の男子と結婚することができる徴候だとして喜び、どうしてもそれがはつきりしない場合には、好い良人が得られないといふので可哀相なほど心配する。幼な心にも結婚といふ大役を首尾よく果さなければならないと自覺してゐるのである。

『シヴァ祭』とともに重要な家庭の行事は『クリシュナ祭』である。これも『シヴァ祭』と同一の目的で行はれるお祭で、その形式方法も前者と同樣極めて簡單なものであるが、このお祭の禮拜の時、少女達が唱へるお祈りの文句がちよつと面白い。

「一國の王子を良人にできますやうに。賢い七人の男の子と、美しい二人の女の子とを得られますやうに。そして、男の子には勤勉で從順な嫁を貰ふことができ、女の子は社會に名を擧げ譽をかゞやかすやうな立派な男子を良人とすることができますやうに。また娘の緣付き先の五穀が毎年豐饒で、倉庫が何時でも一杯になつてゐますやうに。またその近親緣者がみな長命で幸福に暮せますやうに。そして、彼女がクリシュナさまの祝福し給ふところとなつて、聖河ガンガの畔で生を終り、天國の樂を受け得られますやうにお願ひ致します……」

このほか、インドの處女の是非營まなければならぬ、お祭が二つある。一つは『スジャチ・ウラタ』といひ、他を閻魔王祭といふ。前者は將來自分の持つ良人が妾狂ひなどをしないやうに祈るため、後者は同じく良人が長命で、寡婦の苦みをしないで濟むやうに願ふためのお祭である。

**處女の學ぶべきこと**

かくインドの處女達は幼少の時から結婚に因んだ種々の宗教的儀式を見聞し、母からは絶えず婚姻に關する諸々の神話を學ぶといふふうで、何時ではなく結婚生活そのものについての概念を得る。そして、稍々長ずると母親から、いよ〳〵結婚生活に必要なあらゆる實際的知識を敎へ込まれる。インドの婦人が最も希望することは、先のお祭によつて判るやうに、先づ良人が品行方正で、自分以外の女に心を移さないこと、健康で長命で自分に寡婦たるの憂き目をみせない事の二つであるが、そのうち健康はともかく良人の身持ちは確かにある程度までは、連れ添ふ妻の態度如何に左右されるもの故、經驗のある

母親はその邊の呼吸――如何にして良人を操縦するかといふ秘傳を事細やかに教へ込む。何しろ極めてデリケイトな問題であるから、母親の苦心は一通りでない。

**既婚婦人の義務**

處女の間、殆んど結婚の準備に暮し、先に記したやうな困難にうち克つて首尾よく結婚しても、インドの婦人は少しも安樂にはなり得ない。人妻となれば、家庭にあつた時よりも一層嚴格な規に縛られなければならないからである。如何にそれが不滿足な結婚であらうとも、一旦嫁した以上、あくまで貞節な妻として夫に仕へる義務がある。少しでも不貞な行爲があれば直ちに社會的の制裁が加へられる。よし不貞な行爲がなくとも、家庭が圓滿に行かなければ、その罪はすべて妻にあるとされ、批難は妻にのみ集中する。離婚などは極く下級の者ならいざ知らず、相當のカストに屬する人々には許されるものでない。その窮屈なことは眞に想像以上である。『バドマプラノ』といふインド教徒の倫理書には『既婚婦人の義務』として、左のやうなことが列記してある――

人の妻たる者は、細心の注意と熱心とを以て家政に努めなければならぬ。常に柔順を旨として從容に振舞ひ、決して他人と爭ふなどといふことがあつてはならぬ。

夫の笑ふ時は笑ひ、悲しむ時はともに悲しみ、泣く時は自分も泣き、何か尋ねた場合には直ぐそれに答へなければならぬ。――かくすることによつてその貞節は證される。

必ず他の男を、若いとか氣前がいゝとか、男まへだとかいふ言辭を以て評してはならぬ。まして、そのやうに感ずる男と口を利くなどは以てのほかのことである。

もし何人が甘言を以て近より、高價な貴金屬や衣裳を贈るやうなことがあつても、決してその男に耳をかしてはいけない。早速敬遠するがいゝ。

夫に男の客があつた場合には、無言のまゝ頭を下げて挨拶をなし、そのまゝその客には目をくれないで自分の仕事を續けるがいゝ。そして、その間は絶えず夫のことのみを想ひ、その客人のことなどは考へないがいゝ。かくすれば萬人の讃むるところとなるであらう。

妻たるものは、必ず夫が食べ終つてから箸を採るべきものである。そして、もし夫が潔齋する場合には自分もそれをともにし、斷食すればやはり自分も斷食し、飽食したならば、例へいやでも飽食するがいゝ。

たとへ夫が激情に驅られて手荒なことをしても、大聲を擧げたり、反抗したり、家を飛び出

したりしてはならぬ。おごなしくその手に接吻して宥しを乞ふべきである。

子供よりも孫よりも寶石よりも夫を大切にして、その死に會した場合には、潔くその遺骸ごもに自分も燒かれて死ぬがいゝ、かくすれば、人はみなその貞節を讃美するであらう。

このほかまだ數十項あるが、餘り長くなるからこのくらゐにして置く。インドの婦人にごつてはこの倫理書が宛も戒律のやうなものなのである。かういふ峻嚴な規に縛られてゐる彼女等の生活が、如何に窮屈なものであるかは、蓋し推測するに難くないであらう。幸にして夫が溫良な君子であればまだいゝが、もし兇暴な、又は不品行な人物であつたなら、その妻の苦しみは大變である。これを要するにインド婦人の結婚生活は、極端に女性の卑められ、束縛せられてゐたわが封建時代の婦人のそれよりもなほ一層みじめなものである。

**悲慘なる寡婦の生活**

かくインド婦人の生活は、處女時代も結婚して後も極めてみじめであるが、殊に結婚して後、夫に先立たれた場合、卽ち寡婦ごなつた場合には一層悲慘であるもはや彼女は何人からも文字通り未だ亡びざる人——生きた屍ごしか待遇せられない。極く開けた人々か、極く下級の階級に屬する人々以外はこれを人間なみに



扱はないのである。

以前には、前に記した『既婚婦人の義務』の中にある通り、夫の屍ごもに生きながら燒かれて死ぬのが、寡婦の美德ごされてゐて、事實上、多くの寡婦は殉死した——又は無理やりにさせられたものである。イギリスが統治するやうになつてから、極力これが防止に努めたので、現今では殆んごなくなつたが、それでもまだ折々禁を破つてこれを行ふ者がある。蓋し、妻はその夫の附屬物に過ぎない、されば夫の死後ひごり生き殘るは無意義なことである……ごでも昔のインド人は考へたのであらう。さもなくば『夫の屍ごもに燒かれて死ぬがいゝ』なごといふ非道な規則のつくれるわけがない。

ごにかく、そのくらゐであるから、夫の死後ひごり生き殘つてゐる寡婦の生活は實にみじめなものである。先づ通常、寡婦は否でも應でも頭髮を剃り、一切の裝身具（インドの婦人は極端にこれを用ひる）を捨てゝ、ひたすら謹愼の態度を保たなければならない。無論、一切の儀式に出席することは許されない。再婚なごはもつてのほかのことである。それくらゐにしてもなほ、社會らかは『未練者』ごして白い眼で見らるゝのであるから、もしそれを記して華かな生活でもし

やうものなら、忽ちひどい制裁が加へられる。父母兄弟までも異端者の一味としてその種姓から放逐されることが珍らしくない。種姓から放逐されることは、インドでは社會的の死を意味する重大事である。されば、寡婦となつた婦人の父兄は、可哀相だとは思つても、無理にも尼のやうな生活をさせるよりほかはないのである。かくの如き有樣であるから、再婚をしたい、華やかな生活を續けたいと思ふ寡婦も、社會の制裁が恐ろしさに、餘儀なく淋しい寡婦生活を續ける。如何に美しい容色を持つてゐても、如何に金に不自由がなくとも、浮世を離れて世捨人の生活に入るのである。

支那、ペルシヤ、トルコ……と、東洋には婦人の尊重されない國が數多い。だが、インドほど女性の尊重されない國があるであらうか。インドの婦人ほど虐げられた女性があるであらうか。

## インドの婚禮と葬式

**結婚媒介業者**

インドには「ガタク」といつて、結婚の媒介を本職とする男女がある。緣を求める男女——殊に女の兩親から頼まれて、適當の配偶者を探し出し、雙方の仲立となつて結婚の成立を計る、つまりわが國の結婚媒介業者——高砂社とか何とかいふものと同一樣のものであるが、何分インドには極端な男尊女卑の風があつて宛も女は男の附屬物でゝもあるかのやうに考へられてゐる上に、女の子が成熟期（十三四歳）を過ぐるまで結婚しないでゐた場合には、當人はもとより、その保護者たる父兄までも社會から非常な悔辱を受けなければならない、また、ある種姓ではそれを罪惡視してゐるので、容赦なく破門の宣告を與へ、その一家をして社會に顏を出せなくするといふ風なので、女は非常に結婚を急ぐ。にもかゝわらず彼女達には、或特殊の場合——例へばその親が非常に權勢の强い人物であるとか、富んでゐるとか、縹緻が特にいゝとか、或は、知己の中に適當な人物があるとかいふ場合を除いては、即ち何か男の眼を引きつけるものを持つてゐないと、なか〳〵いゝ相手が見附らない。男はみな彼女達の弱點を知つてお高く止まつてゐるからである。そこで多くの場合、この「ガタク」が利用される。さればインドのガタクはわが國の結婚媒介業者とちがつて、一般の人々の結

婚と極めて密接な交渉を持つてゐる。

一體このガタクの業は、宗教上の法規より言へば、ブラーフ・マン族中の僧侶の仕事となつてゐるのであるが、現今ではこの種族にもそれ〴〵その種族のガタクができてゐる。彼等の多くは比較的學問もあり、人を説服するにちよつと比類のない巧妙な腕を持つてゐる。もし、十七八歳の未婚の男子があることを嗅ぎ出せば、彼等は早速その少年の兩親を訪れて、巧みに結婚を説きすゝめる。一旦手をつけたら大抵ものにするやうである。



## 見合ひ式

ガタクの建言が採用された場合には、男家から誰か――普通は新郎の父――が新婦の候補者を拜見に行く。そして、これなら貰つてもいゝと思へば、金貨を一枚その娘に渡す。いよ〴〵お前を私の家へ貰ひ受けるといふ印である。

すると今度はその娘の父兄なり親類の者なりが代表者として男家へ行き、新郎候補者の人物を調査する。そして、氣に入れば矢張一枚の金貨をその男に渡す。『お求めに應じます』といふしるしである。

これがわが國でいへば見合式であつて、金貨の授受がすめば結婚の約束は成立したわけである。

つまり、インドでは、結婚する當人の意見などは全然問題しないで、雙方の親達が勝手に相談をきめてしまふ。されば、當人同士はお互に結婚式の時まで一面識すらもないのが普通である。

## 許婚式

いよ〴〵婚約が成立すると、結婚式を挙ける數日前に、『ガーヤラ・ハリッドラ』といふ儀式が行はれる。これはいはゞ許婚式である。この式に、新郎は先づ沐浴して身を淨め、絹の絲をこつた新らしい著物を著て、定めの場所に立つ。すると四人の有夫の婦人――そのうち一人はブラーフマン族の女――が、その周圍を四五回廻つて後、蜜黄の油を新郎の身體に塗りつけ、それがすむと今度は恒河の聖水――たゞの河水に過ぎないのであるが、恒河は所謂聖水の一であるから、その水は罪業消滅に特効があるとして尊ばれてゐる。で、その聖水を額にそゝぐ。

それから、先の蜜黄の油の殘つたのを少しばかり銀のコップに入れて許嫁の家へ送る。女家では早速座敷の眞中に席を設けて新婦を座らせ、その油を全身に塗つてやる。

この日から結婚當日まで、新郎は銀製の堅果鉗を、新婦は眼瞼を美しくする黑色の染料を滿した小さな箱を携帶してゐなければならない。これは、惡星を退散させる力があるといふ傳説的信

仰から來てゐる。

## 結婚式

いよ〳〵吉日が定まり、準備がすつかり調ふと、先づ新郎は父母親戚に伴はれて新婦の家へ行く。女家ではこの日自家の緣者を招き、祝宴の準備を調へて待つ。かくて、新郎が到着すると一同門前へ出て迎へ入れ、雙方の兩親竝びに近親の間に一通りの挨拶が濟むと、直ちに式が擧げられる。式は比較的簡單である。

先づ新郎が一重ねの衣裳を新婦へ贈り、頸飾をつけてやる。そして、兩人揃つて雙方の兩親へ敬々しくお辭儀をする。すると、それをしほに一座の近親知己一同それぞれ吉祥の辭を述べ、新夫婦の將來に幸多かれと祈る。そして、直ちに祝宴に移るのである。

祝宴は通例二日乃至五日間に亘り、富裕な家庭では神妓などを招いて興を添へる。祝宴の模樣は何れの國に於ても大同小異であるから別に詳述する必要もあるまい。かくて二日乃至五日間といふ長い祝宴が終ると、新婦は新郎とともにその家へ行くのであるが、通例、新郎の家へ滯留するのはほんの數日間——即ち男家に於ける祝宴が濟むまで〻、それが終ると再び父母の膝下に歸る。式を擧げるのは大抵八九歳の時で、まだ夫と同棲するには早過ぎるからである。尤も新婦が



十二三歳にもなつてゐれば、そのまゝ夫家に止つて結婚生活に入るが、式を擧げて直ぐ夫家の人となるのは異數の部に屬する。八九歳の時式を擧げた女の子は、通常二三年間生家に歸つて暮し稍々身體ができてから改めて夫家へ行き、はじめて眞の夫婦となるのである。

× × × × ×

## 葬式

インドの葬禮は火葬が普通であるが、スードラ階級の者と、シヴァ神の信徒は大抵土葬にするやうである。

火葬はわが國の田舍などで行はれるそれと同巧異曲で、たゞ積み上げた薪の上に棺を置き之に若干の脂肪を注ぎかけて點火するだけのことであるが、遺骨の處置法はちよつと變つてゐる。即ち、インドでは遺骨を金屬製の器に入れて、河川に投げ込んでしまふのである。かの聖河たる恒河は人々の最も尊崇する河で、この水に浴すればあらゆる罪業がたちどころに消滅すると信じられてゐるので、遺骨を葬る者も非常に多く、ために同河畔には年中火葬の煙が絶えないと云はれる。

火葬に關する奇風としては、も一つかういふことがある。この國では、王者を火葬にした場合には、その遺骨の一部を殘して、それをよくつきくだいて粉にする。そして、十二人のバラモン僧がその粉末を食物の中に交ぜて食つてしまふのが古くからの慣例となつてゐるのである。隨分氣味の惡い話であるが、何でもこれは、王者の罪業を引取るといふ意味で行ふのだといふことである。

火葬、土葬のほかに水葬といふものがある。これは、要するに死體をそのまゝ河川に投り込んで葬るといふ方法であるが、最も簡單で費用がからないといふところから、主として、下級のスードラや野蠻なシヴァ教徒などの間に行はれてゐる。

インドでは火葬、土葬、水葬、何れの場合にも、墓は造らないが通例である。たゞ、夫に殉じて死んだ妻のためには、必ずその死んだ場所へ三菱形の墓石を建てその貞節を表彰する。殉死は最高の婦德となつてゐるのであるから、かゝる墓には四時參拜者が絶えないといふことである。尤もイギリスが統治するやうになつてからは、殉死は罪惡であるといふので嚴禁されてしまつたから、もはやこの三菱形の墓が新らしく設けらるゝことは極めて稀である。

## ヒンヅー教徒の祭禮

宗教萬能の國インド

宗教萬能の國インドには隨分いろ〳〵の祭典儀式がある。全國一般に行はれる祭典があるほかに、一地方或ひは一町村にもそれ〴〵特別の祭禮がある。祭禮はわが國にも相當多いけれども、インドには及ばない。

インドでは祭禮の日には、家の内外を清淨にして、門口や窓を美しい草花や綠葉で飾り、人々はみな晴著を著ていろ〳〵の遊びに耽り、少し重要な祭典であれば、諸官衙、學校、商店等もみな休業する。

數多い祭典の中には、有意義なものもあるが、全く無意義なものも尠くない。中には公共の安寧秩序を害するやうなものもある。

いふまでもなくインドには種々雜多の宗教が行はれてゐる。されば各宗旨の祭典儀式を數へあければ恐らく數百に上るであらうが、こゝにはたゞヒンヅー教徒代表的祭禮を紹介するに止める

ヒンヅー教はインドの代表的宗教といつていゝからである。

## ポンゴル祭

この祭は、一月の半頃、南インドで行はるる大祭であつて、この日、太陽が黄道の南點に到達して、再び自分達の國へ向つて引返して來るといふところからそれを祝ふのである。

祝日は三日間に亙るが、第一日には、近親知己の間に物品の贈答をなし、各家に祝宴を開いて樂しく遊び暮す。第二日には、夫のある婦人はみな著物を著たまゝ頭から水をかぶり濡れた著物を著替へもせず、直ちに牛乳で御飯を仕かけ、それが沸騰して來ると一同口を揃へて『ポンゴル、ポンゴル、オ、、ポンゴル』と大聲に叫ぶ。そして、その御飯ができ上ると、一部をガネッシャ神に供へ、一部を牝牛に與へ、殘部は家族一同が相伴する。この日は誰にあつても『御飯は炊けましたか』と挨拶する。その答禮は『エ、炊けました』である。

第三日は牛のお祭り日となつてゐる。インドの田舍では殆んどの家にも牛を三頭なり五頭なり飼つてゐるが、荷物の運搬や、耕作に使役するのは牡牛に限られ、牝牛はミルクを採る以外の用には供しない。古來牝牛は靈獸となつてゐるからである。この日はその靈獸のお祭り日であ



るから、村の人々はみなその所有してゐる牛に、マンゴー樹の葉や椰子の實を糸でつないだ頸飾りをかけ、或ひはその角や毛には赤、黄、青等の色を塗りなどして、郊外の廣場へ放つて自由に遊ばせる。

## シヴァラートリ祭

ポンゴル祭は、北部のベンゴールその他の地方に行くと「マカラ、サンクラーンチ」と稱する。南部ほど盛んではないが、矢張、反物、果物、菓子といつたものを遣り取りして祝ふ。特にベンゴール地方では、この三日間は菓子を腹一つぱい食ふことになつてゐるので、一名「菓子祭」とも云ふ。子供達にとつては最も待遠しいお祭りの一つである。ベンゴール地方ではこのお祭りに祀る神はインドの福の神たるラキシミー天女である。

シヴァ神を祀るお祭りで、二月中旬の新月の日がその祭日となつてゐる。

シヴァ教徒はこの日には斷食して、お寺に參籠し、シヴァ神の表徴たるリンガムを清水で清め、草花や木の葉を捧げて幾度となく禮拜する。この祭禮の起原について次のやうな神話が傳つてゐる——

昔、ワラナシー（現今のベナレス）に一人の極めて性質の殘忍な獵師が住んでゐた。彼は日

日山野を跋渉して鳥獸を狩つてゐたが、ある日のこと、例の通り山へ出掛けたところが、ごうしたのか無闇に獲物があつたので、つい興に乘つて歸る時を忘れてしまつた。獲物は持ち運びのできないほど澤山集つた。が、日は既に西山に沒して、四邊は薄暗くなつてゐる。そこで彼は猛獸の襲來を恐れて、獲物をすつかり樹の枝にかけ、自分はその樹の上に攀ぢてその夜を過ごすことゝしたるこ、その夜はちやうど二月半の新月の夜で、常夏の國とは云へ、夜半を過ぎるこ露が降りて薄ら寒く、その上蓋飯を食べたきりだつたので空腹にはなる、遠く近く物凄い猛獸の咆哮が聞えるといふ次第で、眞に夜つぴてまんぢりともしなかつた。

〔第七十四圖〕　シヴァ神の像

ところが、偶然、その木の下にはリンガムがあつた。その獵師は少しも氣が附かなかつたのであつたが、彼が樹上で身動きするたびに、木の葉にのつた露が振り落されて、そのリンガムの上に散りかゝつた。無心にしたことはいへ、このシヴァ神の表徵たるリンガムに露をそゝいだ――即ち露を以て淨めたこゝは、シヴァ神の守護を得るに充分な功德となつた。されば、彼は翌朝樹から降りて小屋に歸り、二三日の後、壽命がなかつたこ見えて遂に死亡したが、その時、『死の神』閻魔大王がその使を送つて彼の死靈を奪はうこするこ、シヴァ神は早速自分の部下を派して閻魔の使を追ひ拂つてしまつたのであつた。

閻魔大王は大いに怒つた。そして直ちに手勢を率ゐてシヴァの宮殿に押し寄せ、門前に控えてゐたシヴ神の大臣ナンデ（牛）に向つて大聲叱呼した――

「シヴァは殘忍非道な獵師づれの保護者たらんこするのか！」

するこ、ナンデは從容として答へた。

「地獄王よ、この獵師は貴說の如く生來殘虐な行爲をなして來た。しかし、彼は死ぬ前に一夜斷食して夜もすがらリンガムを露で淨め、綠の樹葉を數多たび供へた。その功德によつて諸々

の罪業は消滅し、今はシヴァの守護を得て、カイサラの殿中（シヴァ教徒の極樂淨土）に一座を與へられてゐる……」

それを聞くと閻魔は暫くの間考へてゐたが、そのまゝ無言で引返した……

つまり、その獵師が樹の上で偶然神の御旨にかなふやふなことをした。そして絶大な惠みに浴した、その日を紀念するためこのお祭りが行はれ出したといふのである。

## ホリー祭

ホリー祭は三月の滿月の日の十日前から殆んど全インドに於て行はるゝ大祭であつて、ベンゴール地方ではこれを『ドール・デヤートラー』とも云ふ。

昔マイダスールといふ兇惡な神が、諸神の默想祈禱するのを妨害した時、クリシナ神がその比類なき勇氣と巧妙な手段とを以てこれを殺し、以て天地を泰山の安きに置いた、その赫々たる功績を表彰するための祭典である。

クリシナ神のお祭りであるから、元來はヴィシヌ教徒の祭日であるが、現今では、シヴァ教徒やマホメット教徒もともにこの日を祝ふやうになつた、祭典は前記の通り滿月の日の十日前から始まるのであるが、滿月の日の二三日前から殊に盛大となり、勞働者などはみな業を休み、大勢揃つて、クリシナが青年時代にブリンダバナで放蕩してゐた時愛誦したと傳へらるゝ戀歌を誦ひながら街上を練り歩き、友人や通行の娘などに赤や黃の粉をふりかけたり、太鼓や管絃をやかましく鳴らして莫迦騷ぎをする。賑かといふよりは、むしろ騷々しいお祭りである。餘り興にのつて、時には通行の婦女子に亂暴を働いたり、異教徒に戲れて遂に血を見るやうな騷ぎをひき起したりすることが屢々あるので、最近、識者の間では大分この祭日の存廢についてやかましい論議が行はれてゐる。

## ラーマナヴァミー祭

ラーマヤーナ（ラーマ武勇譚）中の王子で、後に神と崇められるゝに至つたラーマの誕生を紀念するお祭りで、その日は四月の新月の第九日である。

ラーマはヴィシヌ神の化身となつてゐるので、ヴシィヌ教徒は勿論のこと、シヴァ教徒もこの日には、斷食を守つて寺堂に參籠し、ラーマの像を拜し、その武勇譚を聽問し、デヴァダシー（神妓）の舞踊を見て樂しむ。

デヴァダシーといふのは神社に抱へられてゐる舞姫で、いはゞわが神社の巫女のやうなものである。が、これは巫女のやうに神前で歌舞を演ずるだけでなく、さま〳〵の副業を營んでゐる。

卽ち、招かれゝば一般民家の儀式――例へば結婚式など――にも出席して歌舞する。それから大多數はその屬する神社の神官達の從婢となつてゐるのであるが、中には一般參拜者の招きに應ずるものもある。つまり、神社附藝妓である。神に仕へる身でありながらかういふ事をすることは隨分呆れた話であるが、事情を聞いて見ればまた無理もないと思はるゝ點がないでもない。卽ち、彼女等は神社から一定の手當を給せられてゐるのではあるが、その給料はまことに尠い額なので到底それだけでは生活ができない、そこで止むを得ず內職を營むといふことになるのである。では何故、生活のできないやうな給料しか貰へぬ職業に多くの娘達はつくのかといふ疑問が起るが彼女等は大抵自分から望んで神妓となつたのではなく、まだ是非善惡の判斷もできない時分に神社へ送られたものなのである。インド婦人は難產の場合などには、よく『もし生れた子が女ならば必ず神妓に致しますから』と云つて安產の御祈禱をする。神に誓ふのであるから、もし女の子が生れゝば、どうしても神妓とする義務がある。そこで、その子が五六歲になると嫌應なしに神社へ連れて行く。また、下級階級の人々の中には、神妓となることは女たるものゝ最大名譽であると心得てゐる者が少くない。恰も藝妓となるのを名譽と考へるのと同一樣である。そこで、さういふ娘達は採用して貰へさへすれば、何時でも喜んで娘を獻上する。娘達も別に嫌だとも思はずに神社へ行く。今まで下級階級の娘として極めて慘めな生活を送つて來た者が、急に華やかな世界に入り、人々から相當敬意を拂つて貰らへるのであるから、ついうかゝと日を過すそのうちにその世界特有の毒ガスが精神にも肉體にも浸み込んでしまふといつたわけなのである。

〔第七十五圖〕　インドの舞踊者

**クリシナ ヂヤンマー シタミ祭**

ラーマ王子とともにヴイシヌ神の化身と稱せらるゝクリシナの誕生を祝する祭で、八月の滿月より八日目に當る。

當日は前のラーマヴアミー祭の時と同樣、ヴイシヌ教徒も、シヴア信者も斷食してこれを祀る。

この日から十日間は、毎日各地に於て祭の行列が行はれる。クリシナの一代中の功績を表した種々の像を牛の背に載せて市中を練り歩くのである。

**ナレリプ ルニム祭**

一にコナット、デーともいふ。ボンベーのヒンヅー教徒間に行はれる祭禮で、毎年八月下旬ムーンスーンが終つた頃催される。ムーンスーンの期間は海が荒いから小船は沖へ出られない。そこでその期間が過ぎ去つたことを祝ふと同時に、なほ念のため海上の靜穩ならんことを祈り、海神の保護を求めやうといふのがこのお祭りの趣旨である。

當日には、大勢の祈禱者が海岸に群り集つて、口々に經文を唱へながら、海に向つて聖水を注ぎ次に赤粉、次に花と米、最後に椰子の實を投げ入れる。ココナット・デーの名のある所以である。

**ガネッシヤ祭**

見物人も大勢集るので、海岸には種々雜多の緣日商人が店をならべ、終日非常な賑ひを呈する。ボンベー市の銀行會社商店等は大抵休業する。それがために現今では事實上一般の休日になつてゐる。

ガネッシヤ祭は、シヴア神の子ガネッシヤのお祭りで、九月の新月の第四日がその當日である。

この日、南インドでは泥土でその神像を作り、餅を供へてお祀りする。ガネッシヤ祭の當日には、信者は月を見てはならないと云はれてゐる。何でも、ガネッシヤが鼠に乘つて旅行した時、過つて鼠から落ちた、ところが天上でそれを見てゐた月姫が可笑しさに堪へず思はず吹き出した、そこでガネッシヤは大いに憤慨して、月姫を、これを讃美する者をを咀つた、それでガネッシヤの信徒は月を見てはいけないのだとかいふことである。何しろ誤つて月を見ることがあれば、早速惡魔拂ひの御祈禱をするといふ有樣なのだから手がつけられない。

## ドウルガ祭

現今インドで最も盛大に行れる祭典はこのドウルガ、プーヂャである。

ドウルガ、プーヂャはドウルガ女神が惡魔を平らげて地上に平和を招致した記念祭で、祭は九月の末か十月の始めの新月から十日間に亙つて行はれるが、その内九日間は禮拜日で、十日目は神像を水に流す日となつてゐる。

その別日になると、各地の神社又は大家の内庭などに女神の惡魔退治の像を作り、華麗な衣裳粧飾を施して、その教徒をして禮拜せしめる。殊に最後の三日間は重要な日となつてゐるので、朝夕神前で樂を奏し、くさぐさの供物を捧げ、山羊又は水牛を屠つて犧牲とする。そして十日目卽ち最後の日の夕刻には、大勢の壯丁が神像を外に擔ぎ出し、樂隊を先導にして近くの河川又は堀池に至り、神像を水中に投り込む。

いゝ河川の近い土地では、若者達が小舟に乘つて壯快な競漕を行ひ、平素は家に閉ぢこもつてゐる女達まで岸邊に出て見物する。夕方になると花火を打揚げ、人々はみな廣場に集つて互に過去の恩顧を謝し、將來の交誼を祈り合ふ、莫迦々々しいお祭りの多いインドでは、これなどは比較的有意義なものであるが、何しろ一年中の大祭であるから、人々はみな衣裳を新調する、御馳走を食べるといふわけで貧乏する。僧侶はこの十日間に一年中の生活費を稼ぐといはるゝのを見ても如何にこの祭典が派手なものであるかゞわかるであらう。

## カリ祭

カエリ祭はシヴア神の配偶者たる黑色の女神カリーを祀る日で、ベンゴール地方ではドウルカ祭に次ぐ大祭となつてゐる。祭日は十月の末か十一月上旬の新月の夜。カルカツタ市の一隅にある「カリガツト」をはじめ、この女神を祀る全國の神社に於ては盛大な祭典が執行され、何れも參詣の善男善女で非常な賑ひを呈する。

カリは非常に凶暴な女神であるから、これに捧げる供物は他の神々のそれとちがつてまことに生臭い。卽ち、この日には神前で、數十頭の山羊の頭を刎ね、流血淋漓たる頭をそのまゝ皿に載せて神に供する。實に殘酷なものである。以前には人間の血を供へたこともあつたとか。かゝる野蠻なお祭りであるから、その緣日の晩には寺祠内で隨分ひどい惡事醜態が演ぜられるといふことである。

〔第七十六圖〕カリ神の像

**ディパヴアリー祭**

これは燈明祭でもいふべきものでカリー祭と同日である。

ヴイシヌ神が惡魔を平定した凱旋紀念日であるともいひ、ヴイシヌ神の妻ラクシミ天女を祀る日だともいひ、また一説にはシヴアの妻パヴアニの祭日だといふ。何れが正しいか判らないが、さにかくこのお祭りには、家々の檐や家屋に數多の燈火がある。殊にカルカツタやベナレスのやうな河畔の大都會では、家々の燈影が水面に映射し、さながら不夜城の觀を現出する。ちよつと支那の元宵に似た催しである。



# インドのマホメット教徒

**インドに於けるマホメット**

マホメット教徒がインドの西邊に侵入したのは西曆紀元第十世紀のことであるが、十二世紀にはペシヤワールよりベンゴール灣に至る廣大なる土地を蹂躙し壺し、更に十四世紀にはその勢力南部にまで及び、十六世紀より最近イギリス人が覇權を掌握するまでは、その間多少の盛衰は無論あつたけれども、この國は概ねマホメット教徒の王――奴隷王朝、カルジー王朝、トウグラク王朝、サイード王朝及び蒙古王朝――によつて統治せられてゐたのである。

その間、マホメット教徒は極力インド教徒其他の諸宗を壓迫し、「コラーンを奉ずるか、または劍戟を甘受するか、何れか一を選べ」と呼號して改宗を迫つた。その結果マホメット教徒は全インドに行き亙つた。現在インドに於けるマホメット教徒の總數は約七千萬人といはれる。されば全インド何處へ行つてもマホメット教徒のゐない土地はない。が、その最も多い地方は

北西部の諸州で、東南に至るに隨つてその數は少くなる。即ち、インド及びパンヂャブに於ては總人口の六割近くはイスラム教徒であるが、合併州ではその七分の一、ボンベー州では十分の一南部のマドラス州に於ては更に低下して、僅かに全人口の四十分の一にしか當らない。尤もこの地方でもベンゴール州だけは例外で、この州の東部諸郡では人口の三分の二までマホメット教徒である。

**マホメット教徒の習俗**

マホメット教徒は無論ヒンヅー教徒とは全く別箇の生活を營んでゐる。ヒンヅー教徒の特色たる嚴嚴極まる社會制度も、神の前には萬民平等なりといふ教理を遵奉する回教徒には全然容認せられない。また弊害多き早婚の風もマホメット教徒にはなく、同教徒間では婚嫁は極めて自由である。無論相會食することに對してもヒンヅー教徒のそれのやうな禁制は全くない。ヒンヅー教徒の最も嫌惡する寡婦の再婚も、マホメット教徒は平氣で行つてゐる。肉類も、豚こそ嫌へ、その他のものは何でも食ふ。

風貌衣裝に於てもマホメット教徒とヒンヅー教徒との間には種々相違した點がある。マホメット教徒は頭を散髮にして鬚を蓄へる。が、ヒンヅー教徒の大多數は、頭は總髮にしてチョン髷式に結び、鬚は北西部の少數の者以外は蓄へない。またイスラム教徒は赤色のトルコ帽を被り、（ターバンを用ひる者もある）だぶ〳〵の股引を穿き、長いシャツの上に金（又は銀）モールを刺繍した胴衣を著て、その上に袖の細い膝までもとゞく長い上衣を用ひてゐる。

以上はマホメット、ヒンヅー兩教徒の習俗の相違してゐる諸點であるが、同一の國土に數百年間雜居して來たことゝて、互に混合融化せる點も無論多い。殊に現在のインドに於けるマホメット教徒の大半を占むるヒンヅー教徒の改宗者は、彼等特有の習俗を幾分留保してゐるから、純粹のヒンヅー教徒と異ならない點が多分にある。例へばマホメット教徒でも下級の者にはヒンヅー教徒と同樣、職業的種姓制度を設け、同族間の內婚制を守つてゐるものがあり、簡單であるべき筈の結婚式をヒンヅー教徒式に盛大に擧行するものもある。又偶像はイスラムの教義に悖るものであるが、各地方に聖人の墓を設けて多くの參拜者を集め、また種々雜多の魔神鬼廟を尊崇することゝ殆んどヒンヅー教徒と選ぶところのないものもある。いろ〳〵の祭典を盛大に執行するなどといふことも、確かにヒンヅー教徒の風習にならつたものであらうと思はれる。何故ならば、他國にあるマホメット教徒はかゝる風習は餘り有しないからである。

マホメット教徒の祭典は無論ヒンヅー教徒のそれほど多くはないが、その儀式は實に峻烈なものである。次にその主要なものを紹介して見やう。

**クトバ・エ・ラムザン祭**

マホメット暦のラマザーンといふ月は、三十日間日出から日沒までの間斷食を勵行する月となつてゐるで、熱心なヒスレムはみなこれを守り、夜の二三時頃起きて極く少量の食物をとる以外には殆んど一杯の水も飲まない。

同じマホメット教徒でもペルシャあたりのそれは、日中だけは水も煙草も一切口にしないが、夜になると種々の御馳走を作つて貪ぼり喰ひ、さま〳〵の娯樂に耽つて、夜を明かすのが通例であつて、それがためにラマザーンの月は一年中の大切な社交季節となつてゐる。インドのマホメット教徒は極めて眞面目であつて、この三十日間は晝も夜も出來るだけ謹慎するのである。

けれどもこの月が終ると、みな盛大な宴を張つて祝ひ、少し餘裕のある者は必ず舞妓を招いて歡樂に耽るのが例である。

**バクルイード祭**

このお祭りは舊約全書の傳說に源を發する。創世紀の第二十二章に、——

これらのことの後、神アブラハムを試みんとて、これアブラハムよと呼び答ふ。彼言ふ、われここにあり。エネバ云ひたまひけるは、なんぢの子なんぢの愛する獨子イサクを携てモリアの地に到り、わがなんぢに示さんとする彼所の山に於て彼を燔祭として獻ぐべし。アブラハム朝夙に起きてその驢馬に鞍をおき、二人の若者と愛子イサクとを遣れ、かつ燔祭の柴薪を割りて起て神の示したまへる處におもむきけるが三日におよびアブラハム目を擧げて遙にその處を見たり。こゝに於てアブラハムその若者に云ひけるは、なんぢらは驢馬とともに此處に止まれ、われと童子は彼處にゆきて禮拜をなし、またなんぢらに歸らん。アブラハム卽ち燔祭の柴薪をとりてその子イサクに負せ、手に火と刀とを執て二人ともに行けり、イサク父アブラハムに語りて父よと云ふ。彼答へて子よわれ此處にありといひければ、イサク卽ち云ふ。父と柴薪とはあり、されど燔祭の小羊は何處にあるや。アブラハム云ひけるは、子よ神は燔祭の小羊を備へたまはん、と。二人ともに進み行きてつひに神の示したまへる地に到れり。こゝに於てアブラハム彼處に壇を築き柴薪をならべ、その子

イサクを縛りて之を壇の柴薪の上にのせたり。かくして、アブラハム手をのべ、刀を執りてその子を殺さんとす。時にエホバの使者天より彼を呼び、アブラハムよアブラハムよと云へり。彼云ふ、われ此處にあり。使者云ひけるは、汝の手を童子につくるなかれ、また何をも彼になすべからず、汝の子即ち、汝の獨子をもわがために惜まざれば、われ今汝が神を畏るゝを知るなり。こゝにアブラハム目を擧げて視れば、後に牡綿羊ありて、その角林叢にかゝりたり。アブラハム即ち往てその牡綿羊を捕へ、之をその子の代りに燔祭として獻げたり。……である。

この話がマホメット教徒の中に傳つて、遂にバクルイードといふ形になつたといふのである。つまり、バクルイードは神に犧牲を供へて恩寵のいや增さんことを祈る燔祭なのである。

さればこの祭日には、マホメット教徒はみな郊外の野原又はその土地のセスクイスラム教徒の禮拜堂）に行つて壯嚴な祈禱會を催し、それが終ると、羊を屠つて神に捧げる。この羊を犧牲にすることから、バクルイードの日にはきつとマホメット教徒とヒンヅー教徒との間に激しい爭鬪が起る。

牛はヒンヅー教徒にとつては神使として崇敬せらるゝものである。然るにマホメット教徒は豚は穢れるといふので全然手をふれないが、牛はどし〳〵食用とする。もと〳〵肉食を嫌惡するところへもつて來て自分達の崇敬する靈獸を殺して喰ふのであるから、ヒンヅー教徒はイスラム教徒を宛も外道非人のやうに卑め、絶えずこれに對して不快の念を懷いてゐる。そこへ、このバクル祭といふとマホメット教徒は夥しい牛を神前で屠るのだからたまらない。ヒンヅー教徒は死を賭してまでもこの儀禮を妨害し、哀れむべき牛を救ひ出さうとする。マホメット教徒もヒンヅー教徒に對しては平素から餘り好感を懷いてゐない。いはゞお互に何か事があつたらと待ち構へてゐること故、直ちに先祖傳來の蠻勇を振つて之に抵抗する、といふ風で大騒擾を惹起するのである。數年前にもボンベーに於て恐るべき爭鬪が行はれ、數百名の死傷者を出したことがある。

## モハレム祭

モハレム祭は教祖マホメットの孫――アリーの子ハッセンとフセーンとが殺害せられた日を紀念するお祭りで、マホメット教徒の中でもシヤイア派（マホメットの子孫の教權繼承を主張する派）に屬するものは、殊にこの日を重視してゐる。

祭日はモハレム月の新月が見え出してから十日間となつてゐるが、通例五日目頃からやゝ賑やかになつて、八九日頃には最高潮に達する。その頃になると、各町内からタブッ

〔第七十七圖〕 インドの神輿



トといふ花車のやうなものを出して、賑々しく市中を引き廻し、大勢その後にくつゝき歩いてあらゆる狂態の限りを盡す。獅子や虎の眞似をして狂ひ廻る者もあれば、青怪な面をつけて踊り歩く者もあり、さらに夜に入るとそれに兩端に火のついた棒を卍字形に振りまはす者などが加はつて騒ぎは一層甚だしくなる。さればこのお祭りの時にもよく喧嘩騒ぎが持ち上る。無論多くの場合異教徒――殊にヒンヅー教徒との衝突であるが、折々は同じマホメット教徒同志の爭ひが起ることもある。一九一一年ボンベー市ではこれがために一大騒擾を生じ、遂に軍隊の出動を見た。そこでそれ以來同市ではこのタブットの行列を禁止してしまつたが、他のデッカン地方では依然として盛んである。

### アクリ・チヤル・シヤムバ祭

このお祭りは嘗て教祖マホメットが大病に罹つて一時危篤を傳へられたにもかかはらず不思議に快癒して、回復祝ひにメッカ市の郊外へ遊山を試みたといふ、その紀念祭で、毎年マホメット暦サファル月の最後の水曜日に行はれる。

紀念祭と云つても別に催物などはなく、たゞ簡單な祈禱會が行はれるだけである。が、教徒は總べてこの日を祝ふためその業を休んで、前夜妻女の用意して置いたくさ〳〵の

御馳走を携へ、數組にならつて郊外へ遊山に行く。

## インドの奇民

**洗濯が法度の村**

インドの北部、カルナチック山中に、スードラの一族が住んでゐる。この種族には實に奇拔な風習がある。男女とも一度新しい著物を著ると、破れて用をなさなくなるまで著とほすのである。何しろ山の中で狩獵を業としてゐるのだから著物は忽ち垢だらけになつてしまふ。殊に女は著物を手拭きにするので、文字通り惡臭紛々として鼻を衝き、垢でもつて著物の地が見えぬやうな有樣であるが、彼等は決してこれを洗はない。

多分、山中で水が不自由なところから、かういふ習慣ができたのであらうと云はれてゐるが、現今ではそれが宗教的性質を帶びて來て、汚れた著物を洗濯すると、當人のみではなく、その種族の者一同に恐るべき災厄が降つて來ると考へられてゐる。であるから、この種族の村ではうつかり洗濯もしやうものならどんな目に合はされるかわからない。洗濯が法度などといふ村は恐らく他にはないであらう。奇民と稱する價値は充分にある。

**盜みを名譽と心得る種族**

マラバル沼地方にクルサルといふ種族がゐる。

この種族は先のカルナチック山中の住人のやうに不潔ではないが、人の所有物をだまつて持つて來るといふ至つて物騷な習性を持つてゐる。何十代も前から泥坊を業として來たので他人の物をだまつて持つて來てはいけないなどといふ觀念は全くなくなつてしまつて、何でも欲しいものは遠慮なく持つて來ればいゝと考へてゐるらしく白晝公然と他人の家へ這入つて行つて、氣に入つたものがあれば何でも持つて行く。實に徹底した共產主義の信奉者である。何でもクルラルといふ名は盜賊といふ意味を持つてゐるのださうであるが。

彼等は盜むといふ行爲を正しい事と心得へてゐるのであるから、他人から『お前の種姓は何か』と尋ねらるれば、躊躇なく『自分は盜賊だ』と答へるさのことである。

**婦人の多男卑の實行者**

さらにまたスードラの一族にナイルといふのがある。この種族は主としてトラバンコールその他インドの西岸地方に住んでゐるが、インドには珍らしい女尊男卑の實行者で、婦人は幾人でも夫を持つことができる。尤も幾人でもといつても同時に三人も五人もの夫をもつわけではなく、一定の期間は一夫一婦であるが、その期間は婦人の意志によつて自由に伸すこともできれば短縮することもできる。つまり、氣に入れば三年でも五年でも乃至一生涯でも一人の夫を守つて行くが、氣に入らなければ例時でも現在の夫と離別して他の男と結婚するが、男はたとひ一日か二日で投り出されても故障を申し立てることは許されないといふのである。場所が寡婦の再婚を罪惡視するインドだけに面白いではないか。

**男女とも赤裸々の民**

インドは暑い國であるから、服裝は一般に簡單であるが、殊に貧民や子供のそれは殆んど裸體に近いものが多い。田舎へでも行けば全くの赤裸も決して珍らしくない。が、常に赤裸でゐなければならぬ、如何なる場合にも著物などを身につけてはならぬといふ規定を設けてゐる種姓があるのはちよつと奇拔である。

マラバル地方の山地に、野生の椰子樹の樹液を採取して暮してゐるマライ・ゴンデガルといふ一族がある。この族では、男子はすべて赤裸々で身に一物もつけてゐない。女はそれでも手拭ほどの小布片を腰部に纏ふが、何しろほんの申しわけほどの布片であるから、事實上赤裸々とかわらない。アフリカの蠻族すら木の葉をつゞつて卷きつけるとか、獸の皮を著るとかとにかく多少身につけてゐる今日、眞の赤裸々なのだから驚いたものである。

マイソールのスルタンが嘗てこの地方に遠征した時、この種族民が悉く赤裸々なのを見て贈をつぶし、酋長を呼び寄せてその理由を尋ねた。すると、酋長は恭々しく答へた。

『王よ、わが種姓の者が赤裸々でゐるのは、一つは無論貧困で衣服を求めることができないからではございますが、また一つは赤裸々で暮すべしといふのが先祖傳來の規だからでございまする』

そこで王は、爾來自分の方から必要なだけいくらでも衣服を作つて與へるから、赤裸々だけは止めて貰ひたいと訓した。ところが酋長は喜んで御うけすると思ひのほか、御座にそれを辭退して、王がいくらすゝめても肯かない。そこで王もいさゝか憤慨して、強制的に衣服を用ひさせや

うさ試みた。

するさ、驚くべし、このマライ・コンチカル族の者は、著物などさいふ窮屈なものを着せられてたまらないさいふので、一夜のうちに一人も殘らず山奥の方へ逃げ込んでしまつて出て來ないさう〳〵王も手の下しやうがなくて彼等に人間なみの生活をさせやうさいふ考を放棄しなければならなかつたさ傳へられてゐる。著物が着たくて四苦八苦する人間の多い今日の世の中に、こんな人間がゐるさはまるで嘘のやうな話である。

（松本文三郎博士の『印度雜記』による）

## インドの蠻人

生蕃ナガ族の生活

インドの東北隅、アスサム山脈の東麓一帶の地にナガさいふ極めて慓悍な民族がゐる。總人口約二十萬人さ註せらるゝが、大體に於てその半はチベット人殘餘はバルマ人の系統に屬する。

すべて高い山の頂上に住み、狩獵さ極めて原始的な農業さを營んでゐるが實に



殺伐な性情の持主で、各部落間に爭鬪の絶え間がない。そこで各部落の周圍には土塀を張り圍らし、深い壕を掘つて、嚴重な防禦工事が施してある。部落同志でさへさうであるから、外國人に對しては實に殘忍酷薄で、見つけ次第容赦なく襲撃して首にする。臺灣の生蕃さ同樣、彼等の間でも首を得ることは男子の最大の名譽さなつてゐる。矢張、彼等も喰はんがために首を狩るのではなくて、首の數の多きを誇らんがためである。何しろ一箇の首もまだ挙げ得ないやうな男には嫁になる者がないさいふくらゐであるから、餘ほどそれは重要なことであり、名譽なことであるにちがひない。イギリスは統治權を把握して以來數十年間、隨分骨を折つて懸柔に努めてゐるがさつぱり効果は挙ちないらしい。今日でもこの地方――ナガの國さ稱せられてゐる――を通過する旅人で彼等の兇刃に斃れる者が毎年二百人を降らないさいふことである。

各部族が互に相併し合つてゐるのであるから、服裝も隨分區々で、殆んど各部落によつて違ふさ云つていゝくらゐであるが、武裝は大體に於て一致してゐる。それは實に奇拔な扮裝である。先づ、頭には竹で編んだ兜を戴く。これには通常白色又は黑色の長い大きな鳥の羽が幾本も飾つてあり、前面には羽毛製の太い髭がちやうさ二百三高地型の束髮よろしくさいつた感でくつゝい

てゐる。そして、左右の耳にはそれ〴〵白色や赤色の綿布を固く捲きつける。身體には素肌に山羊の毛皮で造つた眞紅の幅廣帶を左右の肩から襷がけにして、絹木綿の短袴――スコットランド人の用ゐるキルトと同形式のもので、その模樣や色合によつて各自の所屬部族を表はす――を穿ち、子安貝を飾つた毛皮靴を帶び、太い革帶を締る。この革帶の背部に當るところには、赤白の鳥の羽毛で造つた長い尾のやうなものがつく。その尖端が半圓形を描いてまき上つてゐるところは實に奇拔である。かく種々雜多のものを纏ふたうへ、脚にはまた竹を編んだゲートルを卷きつける。これにもクバ〳〵しい色が塗つてある。まるで映畫に現はれるアメリカ・インド人の酋長といつたかたちである。

かういふ物々しい扮裝をして、右手には長い槍を携へ、左手には長楕圓形の楯を持つ。楯は鞣の皮で造られ、幅二尺、長さ四尺ぐらゐもある。

出陣の時、部族の酋などには、これだけの扮裝をこゝのへて數百人數千人が彼等特有の荒つぽい舞踊をやるのが常である。體格は概して立派であるが、殊に高地に住む部族は堂々たる體軀を持つてゐる。野蠻未開の民ではあるが、その習俗には文化人のそれ以上に認すべきものが多い。

また野蠻未開だと云つても、彼等は決して愚昧ではない。極めて敏捷な感覺の持主で、數理にも先天的に明るい。毎年寒い季節に入ると彼等の中のあるものは、土地の特產物を携へてカルカッタからボムベーあたりまで行商に行く、

## 女天下のカーシ族

ナガ族の國の西方――即ちアスサム山脈の奥にはまたカーシさいふ民族がある。カーシ族は往古バルマからインドの東北部一帶の地にゐた民族の一分派で、現在バルマ及びカムボヂヤに殘存するある民族と同系統に屬するさいはれる。今日でも固有の言葉を用ゐてゐるが、それには文字がないので、物を書く場合には主さしてイギリス語のアルファベットを使つてゐる。五六十年前までは、公文書にすら「兇暴殘忍なカーシ族」と記されたくらゐで、慓悍頑少なく、アスサム地方は屢々その侵掠に惱まされたものであるが、彼等は兇暴殘忍だといつても前に記したナガ族さはよほどその性情を異にしてゐる。第一ナガ族のやうな首狩蠻族ではない。またナガ族よりも一層勇敢であり、高深である。その社會には古くからちやんと統一があり組織があつた。

カーシ族の社會組織は、蓋し婦人家長制度――一部の哲學者の說では、男性が家庭生活に最初

に試みた制度であるといふ特殊の社會組織の代表的のものである。彼等の社會で、あらゆるものが婦人に屬してゐる。一家の財產はすべて男子でなくて婦人が所有し管理してゐる。結婚すれば男は女の家庭に引き取られる。つまり妻の家庭に引き取られる、もし入聟となることを望まなければ、結婚しても別居を續けて、用事のある時だけ妻の許へ出掛けて行く。が、この場合には子供の養育に關しては、夫は何等の責任も義務も持たない。要するにその夫は種馬のやうな地位に置かれる。

一家の家長は祖母、祖母がなければ主婦である。そして、男は長女の名をつけて自分の稱號とするのが通例である。例へば「吉野櫻子の父」とか「夏山繁子の父」とか名乘るのである。隨分妙な風習で、かゝる點のみを見ると、カーシ族は極端な女尊男卑の實行者のやうに思はれる。そして、この民族の男子は世界で最も不幸なものゝ一つのやうに考へられる。が、事實は必ずしもさうでない。女が家長となるのも、男が入聟となるのも乃至は娘の名を自分の肩書のやうにするのも要するに昔からの慣習だからさうするだけのことであつて、アメリカあたりのやうに女が實際に恐ろしい權力を持つてゐるからではないのである。現に彼等の家庭生活を見ると多くの場合、

他の何れの民族のそれよりも幸福なものであり、平和なものであるやうに思はれる。男は戶外の仕事に專念し、女は家政に沒頭するといふのが彼等の生活の實際である。表面上の制度又は習慣は頗る風變りであるが、內情はわが國のそれと極めてよく似てゐる。

カーシ族の固有の服裝は實に美しい。儀式などに古式の盛裝をした男女の群を見ると、まるで繪のやうである。男は先づ頭に眼の醒めるやうな派手な色絹のターバンを卷き同じ地質の上衣を著て、下帶を締めてゐる。下帶もターバンや上衣と同樣美しい色絹である。そして、なほ純白に黑く緣取りした長い羽毛の前立てを附け、金や銀の飾りを鏤めた胸當を帶び、細かい浮彫のある銀の帶を締めて左手に飾りつきの長刀を提げ、右手に山羊の毛の房を携へてゐる。

女は純白色の短い上衣に、黃色の下袴をつけ、頭には薄ショールをかむつてゐる。衣裳は無論みな絹である。そして、男女とも黃金と珊瑚とをつなぎ合せた長い頸飾りを帶びてゐる。祭禮などの際には必ず男女合同の舞踊會が町の廣場で催される。その際には女はみな前述の通りの服裝をしたうへ、頭には小さな金鍍の冠をのせて行く、

カーシ族の常食物は先づ大體に於て、馬鈴薯と豚肉である。豚は何れの家庭でも一三頭乃至七

八頭くらゐ飼つてゐる。馬飼業は僅か六七十年前から作り始めたのであるが、現今ではこの地方の主要物産の一つとなつてゐる。

この民族にも迷信は隨分多い。先づ彼等は人が死ぬと必ず火葬にするが、これは火葬にすれば死者の靈魂が生きてこの世に残るといふ信仰に基いてゐるのであるから、何代前の先祖でもその靈魂はみなこの世に残つてゐるものとして、毎日必ず時を定めて食物を供へる。そして、墓はたゞ目じるしの石を置くに過ぎないが、別に死者の靈を祀る場所を造り、其處には巨大な石塔を建てる。それは、一基のこともあれば、幾つも複狀に建て連ねる場合もある。

また、カーシ族の間では、いろ〳〵の占術が行はれる。先づ最も普通に行はれるのは、卵を割つて、その割れ目の形狀によつて事の成否を占ふ、屠殺した家畜の内臓を調べて未來の幸不幸を豫知する、といつた他愛もないものであるが、たゞ一つ興味の愛つた方法がある。

それは一部の尼僧が行ふ占術で、大蛇から吉凶を教示して貰ふといふ、いはゞ一種の邪神崇拜であるが、これを信じる者は極めて多く、尼僧は大蛇――無論それは實在物ではなく、龍のやうな架空的のものである――に近づき得る唯一の人間であるといふので非常に尊敬されてゐる。そ



て、この蛇神のお告げを聞くのには人間の血を供へなければならぬといふ迷信から、これを信奉する者は、怪我でもすると早速尼僧の許へ駆けつけて傷口から出る血を神前に供へて貰ふといふやうな奚遊化た眞似を大眞面目でやる。噂によると、今日でも彼等は特に重大なことを敢行して貰ふには、生きた人間を神前で殺害して犠牲にすることがあるとか。眞偽のほどは明らかでないけれども、ここにかくこの地方ではさういふ噂があるので、一般に夜間外出することを非常に危險視して、殊に女や子供は外へ出ないやうに氣を附けてゐる。

## トーダ族の村

中部の山間には現今でもなほ多くの褐色民族が住んでゐる。ドラヴィダ人と云つて、最も古くからインドに住んでゐる民族である。この褐色民族の中にトーダといふ一族がある。非常に毛深くて體格の好い點はちよつとアイヌ人に似てゐるが、彼等の生活は蒙古人やギルギス人のそれのやうな遊牧生活である。從つて住む土地は中部諸洲の盆地に限られてゐる。

村落は大抵草原の眞中にあつて、一村の戸數は二三軒乃至五六軒に過ぎない。が、其處からいくらか離れた草原の中に第二の村――一年の或期間を過ごす村が建つてゐる。遊牧さはいふもの

の彼等は天幕でなくて永久的の家を二箇所か三箇所に持ち、一つの村で幾箇月か費してい〻草がなくなると、今度はその第二の村へ引越してそこで幾箇月かを過ごす。その牧場の草が盡きる頃にはもこの村の牧場が立派に恢復するから、また引越して來るといふ方法をとつてゐるのである。

家屋はすべて掘立小屋式の木造の建築で、屋根は草葺、部屋は一軒に一つときまつてゐる。そこで家族の非常に多い家や、富者の家は幾棟も一つに固まつて一軒の家を形成してゐる。軒先は通常三尺ばかり飛び出てゐて、家族の休憩所ともなれば來客の際の應接所ともなる。窓は普通全くない。家の近くには石と土とで家畜を入れる圍(かこい)がつくつてある。家畜は主として水牛である。

一つの村の家畜は全部一所に放し飼ひにしてゐるが、村ごとに一つの搾乳場があつて、ミルクはすべて此處で專門の搾乳者が搾る。そして、搾るたびごとにその一部を村の各人へ分與し、殘餘はバターに製造して家畜の持主へその持高に應じて配當する。

また、各村には一頭づゝ「聖牛」と呼ばるゝ水牛が飼育されてゐる。聖牛は必ずその村の僧侶又は酋長が管理してゐるが、村民がそれを奉祭することは實際想像以上である。宛も氏神のやうに尊び敬つて、管理者たる僧侶又は酋長の外は何人もこれに手を觸れることを許されない。女はその側へ近寄ることすらも禁ぜられてゐる。即ち、この水牛はトーダ族のタブである。

## アンダマンの小人

インドの東、ベンガル灣内のアンダマン諸島にミンコピーといふ珍らしい民族が住んでゐる。この民族は身體が非常に小さい。そして、皮膚の色は眞黑か暗褐色で、頭は丸平つたく、髮はその一本々々が渦を巻いてゐる。いはばアフリカの小黑人と大差のない人種である。が、性質はひどく野蠻ではない。自分に危害を加へる恐れのない場合には、他民族に對しても極めて親切で、アフリカの黑族のやうに自分の方から襲ひかゝるやうなことはない。

極めて原始的の生活を送つてゐることゝ故、衣食住方面には特に記すべき何物もないが、その風習には奇拔なことがざらにある。

先づこの民族の間では、夫婦同志互にその子供を遣り取りする。子供を貰ふことが友人に對する義務のやうになつてゐるのである。されば子供は六七歳以後兩親の膝下に止ることは殆んどない。大抵例五歳で父の友人の家庭に貰はれてその家族となる。たゞ一人しかない子供でも、もし堅盯者があればやらなければならない。その場合拒絶したら如何に親密な間柄でもそれつきりに

なつてしまふ。

子供は十二三歳になると物忌みをはじめ、殆んど大人になるまでそれを繼續する。忌む物は豚、魚類及び蜂蜜である。物忌みは大人になつてからも毎年ある期間内はかたく守る。それを犯せば必ず彼等の神ブルガは嚴酷な罰を與へるさうである。禁食の種類は人によつて相異してゐて正確なことは判らない。

彼等の風俗中で最も奇拔なのは葬式――殊に子供の葬式である。子供が死ぬと、先づその兩親と友人達とは頭を剃つて、身體中に泥を塗る。またその村の者は一人殘らず集つて、一齊に大聲をあげて泣き叫ぶ。それが濟むと死骸を大きな木の葉に包んで、固く繩で縛り上げる。これは死者の母が自らするのが通例である。墓穴は屋内の爐の下に掘る。いよ〳〵準備がさゝのつて、いざ埋葬といふことになると、その父母、友人、及び縁者一同が交々死骸に近づいて、その顏のあたりを二三度靜かに吹く。これが最後の別れのつもりである。埋葬が濟むと、その墓穴の上へまたもと通りに爐を築く。母親は乳を少し小さな器に搾り取つてその墓前に供へる。

かくて葬式が終ると、その一家の者はもとより、村の人々もみな手まわりのものを携へて他の



土地へ移り住む。かうしなければ子供の靈魂が落ちつかないと彼等は信じてゐるのである。かくて、三ケ月經過すると、一同はまた村へ歸つて來る。そして、件の墓を發いて子供の骸骨を取り出し、それに赤か黃かに染めて形見として近親知己に頒かつ。貰つたものは死者を記念するためその骨を頸飾りに用ゐる。

## イラン諸國の民俗

**ペルシャ人の服裝**

ペルシャは數多いマホメット教國中、トルコに次いで最もその教の盛んな國であるから、婦人は全く外界から隔離した生活を營み、ちよつと外出するにも嚴重な扮裝をして、身體全部といつても兩手だけは例外であるがそれ以外の部分は頭から足まですつかり包んで他人――殊に男子に身體の生地を見られないやうにしなければならない。男子にして彼女達の素顏を見ることのできるものは、たゞその近親者だけである。

彼女達の外出姿を見ると、先づ頭からすつぽりと長い眞黑な被衣をかむつてゐる。これをこの國では「チャダル」と呼ぶ。何しろ襁が地面を拂ふくらゐ長いものを頭からかむつてゐるのであるから、それだけでも身體の形は、丈が高い低い、横幅が廣い狹いくらゐの程度しか判らない。ところへもつて來て、前額部の頭髪の生へ際からは乳または腹部にまで達する長い白モスリンの布が宛も日除けのやうに垂れ下つてゐるから顔もまるで見えない。尤も眼のところには窓があいてゐるが、そこにはちやんと絹絲で編んだレースのやうなものか又は黑馬の毛で作つた目の細かい網が張つてある。そして、足首のところで恐ろしく太い黑ズボンの端が固く結ばれてゐて、足には厚い靴下がかむさつてゐる。服物は大抵先の極端に尖つた無格構なスリッパーである。如何にも用心堅固なものであるが、何れの點から見ても優美とは申し難い。

自宅にゐる時には、件の長い被衣はさるけれども、固有の衣服は矢張餘り體裁のいゝものではない。試みにその品分けをして見ると、まづ下半身には前述の通り極端に太いズボンをつけ、ちようどわが國の婦人が腰帶を締めるあたりに幅の廣いバンドを帶び、短いスカート——通常腰部から膝に達す——を穿く。そして、男子用の外套のやうな形のコートを着る。コートは前を一列のボタンでとめるやうになつてゐる。

頭髪は前頭部を少し縮らせて、後頭部で結び、わが國で以前に流行つたお下げのやうに編んで後へ下げて置く。毛の長いのを誇る風習があるので、短い毛の持主は馬の毛で造つたかもじを後頭部の結び目のところへ加へて編む。そして、頭には風呂敷のやうな大きな薄い紗の布帛——これにはよくいろいろの縫ひ取りが施してある——をかぶり、四隅を後頭部へ集めて固く結ぶか又、はヴェイルのやうに下げて頤の下で止めるかする。

これがペルシャ固有の服裝であるが、近來この國でも洋服が大分流行しだしたので、前述のコート、ズボン及びスカートは次第に廢れて洋風のものが用ゐられつゝある。婦人服の地質として最も喜ばれるのは模樣、色彩の鮮やかな繻、紋織の類か縮子で、普通の絹布は肌著以外には餘り用ゐられない。しかし、以上はすべて中流以上の婦人を標準としての話であつて、下級の婦人——殊に肉體的勞働に從事してゐる婦人達の服裝は無論この定義にはあてはまらない。

女の子もその母と大差のない服裝をしてゐるが、ヴェイルを用ゐることは殆んどないやうである。

男の子は大人のやうに長いズボンを穿き、フロック・コートを着て、黒のトルコ帽を被るのが普通となつてゐる。



**家屋の構造と室内の模様**

家屋はすべて煉瓦、石材、泥土、などで築かれた低い方形の、いはば箱のやうな形の平家建であるが、外廊の壁が屋根よりも三四尺高く、ちやうど手摺のやうになつてゐて、屋上も事實上いろ〳〵のことに使はれる。殊に夏季は納涼場として、また寢室として極めて重要な意義を持つ。家が低いうへに外廊に窓が殆んどないのが通例であるから、夏季になると屋内はまるで竈の中へ這つたやうな熱さになる。そこでこの國の人達はみなこの屋上へ登つて屋を敷へながら寢るのである。

屋内は普通二部に分れてゐる。一部はビルン即ち外廊で、此處には主として男子が住む。他の部はアンデルン即ち内房で、此處には男子は絶對的に出入を許されない。少し大きい家になると、外廊から内房へ到るには、五つも六つもの嚴重な扉を通過したうへ、まがりくねつた迷宮的の長い長い廊下を經なければならないやうにできてゐる。

要するに屋内の輪廓は中央部に方形の中庭――通常煉瓦だゝみで、其處には花壇、石だゝみの泉水などがしつらへてある――があり、その周圍に廻廊を隔てゝ幾つかの内房と外廊があるさいふわけである。家の外廊には先に記した通り殆んど窓のないのが通例であるが、中庭に面した側はすつかり開放されてゐる。

各室の下には大抵地下室が設けられ、主として物置に使はれる。が、中には、家屋全體の下が廣い一つの地下室になつてゐて、中庭と同樣、床をすつかり煉瓦でたゝみ、中央に大きな泉水式の水槽が設けてある場合もある。それは夏季暑熱の激しい折の住居にするためである。

各室の構造を見ると、先づ床にはすべて美しい模樣のある蒼澤な絨毯を敷き詰め、壁にも美事な絨毯が幾枚か張りつけてある。そして、その壁の、床から約三尺ほど離れたところには深さ一尺、幅(上下の)二尺乃至三尺くらゐの凹みがあつて、ランプだの花瓶だのさいつた日用家具が置けるやうになつてゐる。また、西洋室のそれのやうに數多くはないが小テーブル椅子の二三脚くらゐは備へ附けてある、しかし、戸棚や箪笥は殆んど見當らない。ベルシャでは衣類はすべて箱又は櫃の類に納めて置く習慣になつてゐるからである。それらの容器はわが國の長持などと同樣木製であるが、塗つたものは極く稀で傷悼、ビロウド、變り色の絹などを張つたものが多い。

一般に寢具としては、蒲團を使用するが、それは何時でも床の上に敷き放しで、枕――毛氈で造つた圓形の厚板で非常に堅い――は食事時にはお膳の代用となる。

ペルシヤではわが國に於けると同樣にほとんどあらゆることが床の上でなさるゝので、椅子、机の類は餘り必要がないが、敷物は極めて重要である。であるからこの國の敷物、――ペルシヤ絨毯は實に立派なもので、百千年の昔から世界にその名を知られてゐる。近來舶來のアニリン染料を用ゐた粗製品が大分輸出されるので、ペルシヤ絨毯も全部が優良品だとは云へないけれども眞のペルシヤ絨毯――先祖傳來の方法で腕の優れた職人がこつ〳〵と作り上げた品物は、確かに絨毯中の逸品であるのみならず、それは立派な一箇の藝術品であると云ひ得ると思ふ。

## 婚禮

ペルシヤ人は概して早婚で、通常男子は二十歳、女子は十五六歳で結婚生活に入る。從つて縁談はすべて兩親または保護者によつて左右され、女子はもとより男子もそれに對して自己の意見を挾むことを許されない。當人同志は結婚式の時まで一面識もないのが通例である。

結婚式はかなり大袈裟で、結納の贈答なども思ひ切り派手に行はれる。式は二度するのが正式となつてゐる。第一の式は要するに形式的のもので、たゞ夫婦の誓をするだけに止り、これを濟ませたとてまだ同棲は許されない。されば花嫁が餘りに幼い場合には、それから第二の式まで相當の間を置く。

第二の式はいよ〳〵眞の結婚式のこと故、極めて盛大に行はれる。殊に田舍では村人同志の交際が親密な關係から、ある一家の結婚式は宛もその村の祝祭のやうになる。披露の宴が極めて盛大に行はれる習慣だからである。その饗宴の模樣がちよつと面白い。

## 饗宴の模樣

一體、結婚披露の宴に限らず、この國では饗宴は必ず同一のものが二ヶ所で行はれる。一方は男子ばかりの宴、一方は婦人ばかりの會食。マホメット教徒だから男女合同でやるといふわけには行かないのである。特別に家が大きくて室がいくつもあれば別の室でやればいゝから何でもないが、一方だけでも收容し切れないやうな小さな家では、當然一方を隣家なり縁者の家へなり持つて行くよりほかはない。隨分厄介な話である。

饗宴の時にはお隣りのトルコに於けると同樣、大廣間の床一面に清淨な白布を敷き詰めて、御

馳走を盛つた皿、丼の類から食器一切その上へぢかにこり擴ける。饗宴の御馳走といへば、先づ羊の丸燒き、スープ、烏(又は肉)と野菜のスチュー、チーズ、飯――これには普通の白飯の外にサフランで色をつけたもの、巴旦杏を混じて炊いたもの、櫻桃の汁で色をつけたもの等いろ〳〵ある――其他、果物、木の實、など。また飲物は種々のシャルベットのほかにこの國特有の清涼飲料「ダフ」などがある。――ダフは酸敗したミルクに少量の鹽と水とを加へたもので、見たところは餘り美味さうではないが、實際はなか〳〵莫迦にできない代物である。

古風の宴席では必ずお供へのやうな形の恐ろしく大きなパンを一人に一箇づつ配分する。これは御馳走の合の手に食べる以外に、匙の代りにしたり、皿に使つたり、手拭きの代用にしたりさま〳〵のことに使用する。手拭きの代用などといふと如何にも汚いことをするやうに思はれるがいくらペルシャ人でもさう無暗矢鱈と汚い手を拭ひつけるわけではない。たゞ箸もナイフ、フォークの類も使はないで指先で間に合はすため指の先が汚れる、そこでパンを少しむしつてはそれを拭ひ取るのである。何しろ莫迦に大きくて外側は石のやうにコチ〳〵なのだから皿や匙代りにするには至極都合がいゝ。

この國の婦人は平素尼のやうな生活をしてゐる割には恐ろしく食欲が旺盛で、飯の山も大きな羊の丸燒きも婦人席では忽ちの間に消滅する。

第七十八圖　ペルシヤの女

或人が『ペルシャの婦人は駱駝の如し』と驚嘆してゐたが、たしかに不可思議な胃袋を持つてゐる。

食事が終ると給仕人が水入れと鉢とを持ち廻る。客人はみなその鉢の上へ手を差出して給仕人が注ぐ水で清潔法を行ふのである。そのうちに、他の給仕人達は汚れた器物を取片づけ、食ひあまりを集めて無遠慮に道路へ投り出す。

**最大の年中行事ナウ・ラズ祭**

ペルシャの最大の年中行事はナウ・ラズ祭りである。これは五月の中旬に行はれる大祭で、當日には國内の諸官衙、學校、銀行會社、商店悉くお休みとなる。召使ひ達も一日乃至二日の藪入りをする。さま〳〵の催しものは、ナウ・ラズの日から十三日間引續き行はれる。その間、人々はみな新しく用意した晴衣を着て或ひは友人を訪れ、或ひは催しもの、見物に行く。まるで正月とお盆とが連れ立つて來たやうな有樣である。

ナウ・ラズの日から十三日目、即ちこの祭典の最終の日には、老幼男女悉く戸外へ出て遊ぶ。富裕な人達は田舍の別莊へ行つて饗宴を催したり、海岸の保健地へ遊びに行つたりして暮し、普通の人々は郊外や近くの名所へ一日の清遊を試みる。平素身體をつかふ所謂勞働階級の人々は、行きつけの喫茶店へ行つて終日、茶を飲み菓子を喰ひ、暑くても寒くても必ずアイス・クリームか氷水をとり、お仲間同志で至極無邪氣な世間話や遊びごとをして樂しむ。

またこのお祭りの前後には何人も必ず入浴する。一體ペルシャ人は立派な風呂を持つてゐるにもかゝわらず、餘り入浴を好まない。極く贅澤な人々シャレ者は例外だが、普通人では一週間に一回といふのが最も回數の多い方である。勞働階級の人々には、ヨーロッパの毛唐衆のやうに一箇月も入浴しないものが尠くない。だが、ナウ・ラズ祭りの前後、殊に前日にはどんな無精者でも入浴する。そして、入浴が終るとヘソナといふ化粧染料――エジプト產のたま椿の葉を原料としたもので、通常綠色がかつた黃色の煉ものとして賣つてゐるが實際の色合は赤味がかつた褐色である。――で頭髮を染め、掌と爪とに薄く彩色する。

ペルシャの風呂は、所謂トルコ風呂式の蒸風呂で、なか〳〵贅澤にできてゐる。だから富者は別であるが、普通の人々にはちよつと家に備へて置くといふわけに行かないので、自然町には公衆浴場が澤山ある。公衆浴場は絕えず紅色か藍色の貸タオルを數十本、ちやうど幟のやうに長くつないで入口のところへ乾してゐるから、何人でも町を歩けばすぐ判る。

× × × ×

アフガニスタンの女

アフガニスタン――インドとロシヤとの間に挾まれて、絶えずイギリス、ロシヤ兩國の恐喝に怯えてゐる憐れな王國の民も、大多數はマホメット教徒である。されば、この國では女は矢張數待せられない。インド人ほど徹底した男尊女卑主義者ではないが、ペルシヤ人やトルコ人よりはうはてである。この國には他のマホメット教國と同樣に、男子は同時に四人まで妻を持つことができ、その上妾は何十人置いても差支へなしといふ宗教的法律が行はれてゐる。ペルシヤやトルコでも無論これと同樣のことが法律上許されてゐるのであるが、それらの國には、實行者は事實上殆んどない。ところがアフガニスタンでは、殊に同國の上流社會でも二人も三人も正妻を持つたうへ、數人乃至十數人の妾を蓄へるのが普通のことゝなつてゐる。嚴正に一夫一婦を行つてゐる者は殆んど絶無と云つていゝのである。そのうへ、この國の上中流社會では、妻が夫の唯一のお相手役とはきまつてゐない。何故ならば、美少年を召抱へて身の廻りの世話をさせる風習があるからである。この風習は矢張貴族や僧侶の間に最も盛んであるが、中流社會にもかなり行はれてゐるといふことである。されば、女――殊に妻の立場はこの國では實に苦しいものであり、憐れなものなのである。



アフガニスタン婦人の迷信

從つて、この國の女は實に弱い、どうかして男を自分にひきつけたい。夫の愛を獨占したいといふのが彼女達の有する唯一の希望である。そこでこの國には古くから隨分さま〴〵の迷信が婦人の間に行はれて來た。

わが國では隨分古くからゐるもりの黑燒が愛を求むる男女の偶像のやうになつてゐるが、アフガニスタンでは蛙の黑燒が男の愛を獨占しやうと希ふ女に愛用されてゐるごちらも黑燒で、しかも同じやうな形をした蟲が原料であるところが面白いではないか。だが、アフガニスタンの黑燒は自分自身が作つたのでなくては何の効驗もないと信ぜられてゐる。黑門町からこつそり買つて來たのでは役に立たないといふわけである。そこでアフガ

〔第七十九圖〕アフガン人

ニスタンの女は、正妻も妾も娘もすべてみな野心を懷く以上は蛙の泣き聲に耳を欹てる。現在の王妃はどうか知らないが、先の王の第一王妃は、非常に蛙を捕へることの巧みな少年を手許に置いてゐたと傳へられてゐる。

ところでそれは一體どういふ方法で製造し、また使用するのかといふと、先づある一種の大蛙を二匹、背中合せに絲で縛る。そしてその二匹の蛙の腹へ各一箇づゝ小さな黑星を描き、鐵の箱の中へ入れて強い火にかける。適當に燒けたら骨も一緒によく碎いてすつかり灰のやうにしてしまひ、固く蓋のできる容器へ納めて絕えず肌身を離さず携帶する。そして、自分の競爭者と思ふものに逢つた時、少し取り出して、いきなり敵手の頭へ振りかけるのである。かくすれば必ずその競爭者に打ち捷つことができると大眞面目で信じてゐるのだから助らない。

も一つこの國の婦人の間に廣く行はれてゐる迷信がある。それはラタ・ブンド・ダヴァン、卽ち翟穫峠といふ山道の樹木の枝に布片を結び附けて置けば、それがなくならない限り、夫の愛は獨占できるといふ奇拔な迷信である。どういふところからかゝる迷信が生じたのか、それは判らないが、さにかくこの國に長く在留したあるイギリスの醫者の實見談によると、ラタ・ブンド・ダヴァンの附近一帶の立木といふ立木には盡く種々雜多の布片が結びつけられゐて、眞に翟穫峠の名に背かぬこの事である。

## トルコ民族の風習

### アナトリヤ

アナトリヤはギリシャ語で「日の出」又は「東」といふ意味である。今から約三千年の昔、覇氣に富むギリシャ人はエーゲ海の島々を帆や棹を力に往來してゐたが何分船が小さかつたので、海上で日が暮れても困るし、暴風雨にあつてはなほさら困るので、陸地から遠くへは出なかつた。それでもエーゲ海には數多の島がまるで飛石のやうに續いてゐるから、次ぎ次ぎと次第に遠乘りをして、終に彼等の本國からは遙か東の方なる小アジヤへ往復するやうになつた。そして彼等はこの大陸をアナトリヤ卽ち「東の國」と呼んだ。その名稱が今日まで傳つて、アジヤ・トルコ西部なる小アジヤ半島の名となつてゐるのである。

このアナトリヤ、一代の俊傑ケマル・パシャの本據たる「日の出」の國の平原と山々の起伏した中には、よほど大規模の灌漑工事をしなければ耕作のできない草原が澤山ある。かゝる土地には自然羊飼ひが住んでゐる。それらの羊飼ひの中にはアルメニヤ人やユーラック人やコマン人も相當ゐるが、大多數は矢張トルコ人である。が、彼等はトルコといふ名を以て呼ばるゝことを喜ばず、自分ではオスマンリと稱してゐる。

## トルコ人の村

羊を飼ふトルコ人否オスマンリ達は、一年のうち數ヶ月間は村落で暮すが、氣候が、暖かくなると羊の群とともに、ずつと高地の平原や山間に登つて、行つて小さな低い圓筒形の天幕に住む。天幕には普通山羊の毛を原料とした毛氈を用ゐられる。この天幕村にも犬が非常に多い。この村へ行つても短い毛の獰猛な犬がうよ〳〵してゐる。餘り人なつつこくはないが、飼主には極めて、從順で、人間よりも遙かによく仕事をする。仕事は羊の番である。

犬は天幕村ばかりでなく、本當の村落——羊飼ひの實家や小麥などを作つてゐる農夫の家の集合であるところの村落にも邪魔になるほどゐる。飼主のない野良犬も隨分多いらしい。が、この

〔第八十圖〕トルコの軍人

夥しい犬は天幕村の犬のやうに羊の番はしないけれども、それに劣らぬ仕事をする。村の衛生係をつとめるのである。村の人達は實に無頓着だから何でも汚い物は道端へ投げ捨てる。その汚物を犬と亢鷹——これも到るところに群つてゐる——とがすつかり片附けてしまふのである。もしこの衛生係がゐなかつたら、アナトリヤの高原の村々は足の入れ場もなくなつてしまふであらうと思はれる。

高原の村といへば如何にも美しいところのやうに思はれる。が、アナトリヤの村落は美しいところではない今も云つたやうに村の人達がまるで衛生といふことに無頓著なうへ、家といふ家が何れもみな低い平べつたい泥土を以て築き上げたものなのだから、實に殺風景

で、お世辭にも美しいとは申し難い。

## 親切な村人

村そのものは感心できないが、そこに住んでゐる人々には感心する。老幼男女を問はず他人に對して實に親切だからである。旅の者がそれらの村落へ到著すると、早速その村の村長へ紹介する。村長は溫顏を以てこれを迎へ、遠來の客にふさはしい御馳走をするために、少年に野へ行つて仔羊を持つて來いと命ずるのが常である。わが國のある地方の農家で客人の御馳走といへば、手打ちうどんと鹽鮭にきまつてゐるやうに、アナトリヤ高原の村々では、御馳走といへば仔羊となつてゐるのである。

子供達はみなほろ著物を著てゐるがそれ〴〵腰に小さな袋を携へて、その中に畫の辨當のパンを入れてゐる。そして、必ず技と粗末な木の笛とを持つてゐる。笛はみな子供が自分で作るのである。體裁は餘りよくないが極めて微妙な音が出る。無論、鳴らすのも巧い。

子供が仔羊を捕へて來ると庖丁自慢の村人が料理に取掛る。支度ができると村の男達はみな村長の家へ集まつて來る。が、女は一人も出ない。マホメット教徒だから身内の者以外の男の集りへは出ないのである。彼女達は、夫と親と兄弟とのほかの男の前では、ヴェールで嚴重に顏を包



んでゐなければならない。だから公開の席へは餘り出席しない。また、普通の食事の時でも一家擧つてすることはなく、母と娘とは父や息子が食べ終るまで待つか、別室で濟ますのが通例である。この點は他のマホメット教國の家庭でも同樣である。

## 村の宴會

食事の仕方はトルコ人の間では貴賤とも大差なく、モツラ僧から村の農夫牧者まで大抵似たものである。時刻が來ると客間の床の上か庭前の地面へ廣い布を擴げる。そして、その上に誰かゞパンを圓く輪なりにならべる。パンは平たく堅くて通常大皿(西洋皿の)くらゐある。パンの上には新しい王葱か或は大きな胡椒の實——これは青いまゝのこともあれば赤くなつたのを使ふこともある——がのせられる。そこで客は敷布の周圍に跌座する。

一同が着席すると油いりの飯を大丼に盛り上げて持つて來る。仔羊の燒肉——骨附きのまゝ燒いたもの——や、仔羊の肉と野菜とをごろ〴〵に煮た一種のスチユウがやはり大丼で運ばれる。ミルクで造つた酸味のある飲料が出る。

數名の若者がその皿や丼の置きならべてある敷布の上を跣足で歩きまはつて巧みに御馳走を客

人達に配分する。そのうちに一人の少年が水入れと鉢とを持つて客を一人々々廻つて行く。客はそれ〴〵鉢の上に手を伸して、少年が水入れから垂らす水で清める。洗ふのではないちよつと清めるのである。

それからみな袖口を少しまくり上げて誰かゞ食べ始めるのを待つ。主人が氣を利かせて、お始め下さいと促す。

それを合圖に一同は思ひ〴〵前の井に手を伸して、飯でも肉でも手掴みで食ふ。指で肉片をさつて、自分が食ふ前にまづそれを引き裂いて隣の客と互に肉片の獻酬をやる。飯を一掴み口へ入れるとパンを少しむしつて食ふ。この場合のパンはナフキンの代りである。スチユウや酸いミルクを食べる時には、パンを適當の大きさにむしつて、それですくふ。こゝでパンは匙の代用となる。

食事中は誰も一切しやべらない。食事中の談話は禮儀に背くものとなつてゐるからである。食後にはまた水入と鉢とを持つた少年が廻り歩いて客人に手を清めさせる。

## 寢床

かういふ村では、客人は普通は所謂客間——家の中央部にある廣間に泊められるのであるが、暑い時には室内はたまらないから、村の人達と同樣に、屋根の上へ登つて寢る。屋根といつてもわが國のそれのやうに坂になつてゐるわけではない。家が箱のやうな形だから屋根も平面である。そして、大抵周圍には高さ三尺もある壁がめぐらせてある。何のことはない二階建の家の屋根をそつくり取り去つたやうなものである。夏になるとこの地方では雨が殆んど降らないから、村の人達はみな此處で寢る。此處なら室内よりは涼しくていゝ。尤も屋根の上でなく庭前の青草の上に寢床をとる者もある。これは場所によつては屋根の上よりも一層いゝ。寢床はちやうどわが國の蒲團のやうなものを敷いて、それと同じものまたは毛布を上にかける。室内でも西洋流のベットは使はない。床の上に件の蒲團を敷いて寢るのである。この點はわが國の風習と實によく似てゐる。

× × × × × ×

## コンスタンチノプル

オスマンリ帝國の覇業は空しくなり、由緒ある國の首府といふ名目は失はれたが、コンスタンチノプルは矢張今日でも事實上トルコ人の都であり、マホメット教の一大中心地である。苟もトルコ人の生活を知らんとする者、イスラム世界の實情を究めんとする者はこの都を疎外するわけには行かない。或ひはこの都に於て營まれてゐるトルコ人の生活は特別のもので、その全部を直ちにこの民族の代表的生活と見なすことはできないかも知れないけれども少くとも本國にあるトルコ人、殊にその諸都市に住む幾百萬かのトルコ人の生活は或程度までこれによつて窺ひ知ることができると思ふ。

〔第八十一圖〕コンスタンチノープルの景



コンスタンチノプルは現在三つの區域に分れてゐる。一區はガラタとペラで此處には主として外國人――ヨーロッパ人が住み、近代式の商業都市を形成してゐる。また一區はボスホラス海峽によつて隔離されてゐるスクタリで、此處は純然たるトルコ人の町、他の一區はこの都の最も重要な部分スタムブールである。

スタムブールは金角灣といふボスホラス海峽に接續する幅一マイルばかりの深い入江によつてペラ、ガラタと隔離されてゐて、住民はすべてトルコ人、アラビヤ人其他のマホメット教徒である。コンスタンチノプルの名物たる壯麗なモスク――マホメット教徒の禮拜堂――や廣大なバザールやアンゴラに新政府が樹立されるまでは由緒深きオスマンリ帝國の最高官廳として日々數百千の高官が出入した高壯雄大な舊政廳等はすべてこの區域内にある。

このモスレムのスタムブールとヨーロッパ人のコンスタンチノプルとを結び合せてゐる金角灣上の舟橋――舟をつなぎ合せて橋梁の代りとした橋――そこは、實に世界有數の興趣深き橋である。それはかのシャイロックがアントニオに難題を吹きかけるヱネチアのリアルトーよりも興趣に富み、ニユー・ヨルクとロング・アイランドとを結ぶブルクリンの大鐵橋、或ひは世界で最も

通行者の多いと云はるゝロンドンはテイムス河上の諸橋にも劣らぬ重要な價値を持つてゐる。このガラタ橋を通過する男女の數は日々三萬を下らないといふことである。

何人でも試みに日中この橋上に立つて見るがいゝ。一體今日は何事が起つたのかと思はざるを得ないであらう。それは餘りに通行が激甚だからである。

殆んど世界のあらゆる地方から集つた、種々雜多な人相風俗の男女が少しの絶間もなく往來する。先づトルコからペルシヤ、ギリシヤ、シリヤ、エジプト、アルメニヤ、マルタ、日本、支那、ユダヤ、ロシヤ、フランス、イギリス、アメリカ、イタリヤ……とその名稱を覺えるだけでもいゝかげん骨の折れるくらゐ、多くの國々の住民を眼のあたり眺めその各々の純粹の言葉を耳にすることができる。否、ものゝ一時間もこの橋の上に立てば、眼を閉ぢ耳を塞いでゐない限り、いやでも應でもそれらのものが眼に入り、耳に聞えて來る。實に驚くべき場所である。世界のあらゆる人種の雜居するといはるゝロンドンやニュー・ヨルクの下町にも、かゝる場所は一寸見出せない。

**異樣なスタムブールの街路**

純西洋風のベラ、ガラタの區域からこの驚異の橋を渡つて一歩スタムブールへ足を入れると、其處はもはや東洋である。眼につくものも耳に入るものもすべてみな、西洋人のよくいふ『オリエンタル』の形容詞なしには說明し難い獨自な空氣を漂はせてゐる。

町は自然の丘の傾斜の上に建つてゐるので、途は橋の袂から直ぐ登りになる。街路は狹くてうね〳〵と曲りくねつてゐる。粒石を使つて丹念に――といふよりはむしろ凸凹に敷き詰めてあるが、年月の力でその石塊の一つ一つが恐ろしく滑々に磨り減らされてゐる。恐らくビザンチン時代の勇士達も、この石盤の上を踏み鳴らしたものであらう――と思はれる位にとにかく古い。

その狹くて汚い街路をいろ〳〵珍奇なものが通つて行く。駱駝をのそり〳〵曳いて行くアラビヤ人がある。熊の子の鎖をひいて、豆太鼓を打ち鳴らしながら拍子面白く踊らせて行く男がある傍らには拂子のやうなものを手にして占ひをしてゐる老いた陰陽師がゐる。五重塔の九輪のやうな形をした、妙な金具を背に負うて、銅壺を十ばかり半圓形に繼ぎ合せたやうなものを腹に卷きその上にコップを並べて生水を賣り歩く男がある……。

さうした變つた人込みの中を分けながら暫く行くと、街路から少し引込んで立派なモスク――マホメット教の寺院がある。例の土饅頭のやうな形の屋根が中央にむつくりと盛り上つてゐて、その周圍には土筆の形そつくりの尖塔が幾つかまるで煙突のやうにつゝ立つてゐる。堂の前の狹い石壁の隅にはちやうどお宮の手洗鉢のやうなものがあつて、幾人かの男が丹念に手や耳を洗つてゐる。コラーンの戒律に示された通り參詣前の清めを實行してゐるのである。コラーンの戒律には、凡そ何人と云へども禮拜前には少くとも手、腕、耳及び鼻の穴は洗ふべしとある。モスレムの間では絶えず身體の清淨に保つことは敬禮の方便ではなくて、信仰の一部なのである。されば、コンスタンチノプルには數百千の風呂屋があり、少し大きいモスクには大抵特に貧民のために設けられた浴場が附屬してゐる。

**トルコ料理店とトルココーヒー**

また暫く行つて、とある純トルコ式の料理店を覗いて見る。いや特に覗かなくとも街路を歩きながらで店の樣子はよく見える。街路と店との間に何等の區劃もない――テーブルが街路にまでせり出してゐるからである。見ると客はみな手掴みである。肉でも魚でもすべて五本の指でつまんで食つてゐる。客の求めに應じ大皿から小皿に盛り分けてゐる店の主人公も同樣に手掴みである。どうかすると、傍らのテーブルからボーイが集めて來た空皿を、洗ひもしないでそのまゝ使ふことすらもある。ちよつとわれわれには這入りにくい。

料理屋は感心できないが、トルコのコーヒーは素敵である。下宿のおみおつけと兄弟のやうなしろものとはわけがちがふ。先づ一見砂糖蜜の如し、とでも云はうか、黑ずんだ赤褐色で、ところつとして光つてゐる。その茶椀は目白の餌入れを少し大きくしたくゐいの至極可愛いゝ瀬戸物で大抵金、銀、銅等の飾り金具で卷いた柄がつけてある。クリームやミルクは全く用ひない。飲む前に砂糖を入れるなどといふこともしない。ちやんと適當の味――大抵の甘黨でも一杯で閉口するくらゐ強い味がつけてある。

このコーヒーの作り方には矢張いろ〳〵秘法があるらしいが、大體に於て、先づ最初にコーヒーの實を適度に煎つて、石臼の中へ入れてよく搗き碎く、そしてそのよく搗けた粉を人數に應じて必要なだけ厚い鐵鍋へ入れ、熱湯を注いでよく搔きまわしたうへ、ところ火にかけて煮る。だがもと〳〵相當熱い湯が使つてあること故、それは直ぐ煮え立つから、よく注意してゐて、煮え立

つ少し前に少量の冷水を注いで加減する。かくていよ〳〵本當に煮え立つたら適量の砂糖を加へて茶椀にそるのである。尤も特別に念を入れる場合にはそれ以外に麝香を加へるとか何とか面倒な手續きがあるらしい。が、その邊のことはよく判らない。

美味いとか不味いとかいふことは無論その人の嗜好によつて隨分ちがふのだから一概には云へないが、少くともトルコのコーヒーは僞せ物ではない。

**トルコの菓子**

トルコ人は實に驚くべき甘黨である。彼等はあの甘い濃厚なコーヒーを一日に幾回となく飲む。そして、その度ごとに何かしか甘いものをとる。家庭では客來と云へば必ずコーヒーと菓子とタバコとを出す。お體裁に出すのではない、本當に飲み喰ひ且つ喫てもらうためである。であるからその際には必ず主人公が先になつて盛んに飲んだり喰つたりする。商店などでも少し暇のかゝる買物でもすれば、早速コーヒーとタバコは持つて來る。無論、タバコは世界にその名を知られた名產地であるから、葉卷でも、紙卷でも、乃至は刻みでも品質は優良無比である。普通の人々が常用してゐる廉い紙卷でも、わが國へ持つて來ればショー・ウインドーの中へ嚴然と納つて、なか〳〵貧乏人の手には入らな



い。

菓子類は無論無數にあるが、最もトルコ人が好んで食べるのは、果物の砂糖漬、無花果を原料とした煉物といつた極く甘いもので、スミルナはそれらの砂糖菓子の名產地として知られてゐる。なほ、この無花果の煉物に、巴旦杏と蜂蜜とで製造した矢張恐ろしく甘い煉菓子を混ぜ合せて箱に詰め、『トルコ人の歡喜』と名附けて國内到るところで賣つてゐる。無論、これもスミルナの產物である。

**トルコ人の米の飯**

無論、例外はあるが、昔風の家庭では現今でも食卓を用ひないで、各自がちやうどわが國の會席膳を圓くしたくらゐの膳を使つてゐる。この點はわが國の風習と實によく似てゐて面白い。

平常の食事には、その圓盆の中央に「ピラフ」の皿が置かれ、その周圍に鹽入胡椒壺、漬物といつたものが竝べられる。ピラフといふのはバターをうんと使つたスープの中へ白米を入れてドロ〳〵に煮た、いはゞおじやのやうなもので、トルコ人は三度々々これを欠かさない。いや欠かさうにも欠かせないのである。何故ならば、それはわが國の御飯、イタリヤのマ

カロニにも匹敵する最重要な食物だからである。ホテルでもこのおじやは必ず出す。

## バザール

コンスタンチノブルの人々は、買物はすべて「バザール」卽ち定設市場でする。バザールと呼ばるゝ市場はトルコばかりでなく、インドから中央アジヤ、西アジヤ、アラビヤを經て北アフリカのアルゼリヤ、モロッコに至る一帶の地方到るところに存在してゐるが、このコンスタンチノブルのバザールは最も有名なものである。

コンスタンチノブルのバザールと云つても一箇ではなく總計では十ばかりあるが、その中で最も著名なのは、「エジプト人の市場」といふのと、「大市場」と呼ぶのとの二つである。何れもスタムブールにあつて、前者は幅七間、延長一町半ばかりの街路一筋、後者は約九十の狹い短い通りよりなり、賣店の數は四千軒以上と稱せられる。

ガラタ橋の袂から前に記した緩い傾斜の石疊をやゝ暫く進んで、この路でもいゝ右へ折れると其處は既に所謂大市場の一部である。この市場内の夥しい小路はアスファルトを敷いたものもいくらかあるが、大多數は例によつて石疊で、その上には半永久的の屋根が張つてある。ちようど

トンネルといつた形であるが、屋根が高いから暗くはない。

兩側の建物はちやうど高架線の下のアーケイドのやうに殆んど同じくらゐの間隔を置いて細かく仕切られてゐて、その一區劃が一軒の店となつてゐる。この店にも商品が山のやうに積み上げてある。壁にも柱にも殆んど少しの空處もなくいろ〳〵のものが吊り下げてある。だが、商店はその種類によつて店を張る場所がちやんと一定してゐるので、同一町内には、毛皮なら毛皮、小間物なら小間物、紙なら紙とその店の商品も一致してゐる。毛皮商の通りには、いくらさがしても小間物屋は一軒もない。同樣に小間物屋の市場に紙屋を見出すことは不可能である。しかも、その分類が實に細かくて、同じ皮革でも毛皮、鞣革、同製品といふやうに一々區別されてゐる。

そして、如何なる品物にも定價といふものがない。商人は客の顏つきによつて値段を定めるのである。ちやうど關西の小賣商人と同一轍で、相手が案内をよく知らぬと思へばいくらでも吹く。それで客が滿足しないと見ればだん〳〵値を下げる。隨分手數の掛る話で、氣の短い者には堪らなく思へるが、流石に大國の民だけあつて、トルコ人は一向あせらない。悠々としてタバコでも喫みながら氣長に交渉する。「時は金なり」などといふ言葉は、この土地では何等の魅力をも有し

ない。

しかし、とにかくこのバザールは大規模なものである。殆んどあらゆる種類の商店が各々數十軒乃至數百軒づつ寄り集まつてゐるのだから、如何なるものでも此處で調はないことは先づないと云つていゝ。

× × ×

× × ×

**トルコの新しい女**

最近のトルコに於て最も目覺しい變化をなしつゝあるものゝ一つは婦人の地位及び服裝である。僅々十年前のコンスタンチノプルに於ては、普通の婦人は實に嚴重な扮裝をして、厚いヴェールで顏を包んでゐたものである。が、今日では市中を歩いても、ヴェールをした婦人は殆んど見懸けなくなつた。尤も頭には今でもみな黑い布をかぶつてゐる。が、それは頭髪を蔽つてゐるだけで、顏は全くむき出しである。下級社會の婦人ならばいざ知らず、良家の婦人は十年前といはず僅か二三年前までヴェールを取つて人前に出る、殊に公園や盛場のやうな人だかりのする場所へ行くなどといふことは全然しなかつた。たとへしたくとも社會がそれを許さなかつた。しかるに今日では、男子とともにダイムラーやロールスロイスの車を郊外へ走らせる婦人や駿馬の轡をならべて公園の竝木の下を散歩する娘達を見懸けることが珍らしくない。

**變化の過程**

かゝる急激な變化が生じた最大の原因は先の世界大戰である。大戰の勃發と同時に、數多の婦人は自ら進んで戰場へ行き、傷病者の看護に從事した。戰場ではなりやふりには構つてゐられない、また從來の物々しい服裝は餘りに手足纏ひであつた。そこで、それらの婦人はみな被衣をぬぎ、ヴェールをとつて活動した。その甲斐々々しい容姿が愛國の念に燃えてゐて婦人に摸倣されたからとて別に不思議はないであらう。男子の代りに砲彈や彈藥の製造に從つた婦人はもとより、自宅にあつて慰問袋や繃帶の製造に專念した貴婦人までも、ヴェールをとつて歩くのを一つの見榮とした。

しかも、大戰後トルコでは他の諸國に於けると同樣に婦人の職業が著しく多くなつた。從來はたゞ家庭内の仕事——家庭教師、女中といつた仕事しか與へられなかつた婦人が商店の賣子、タイピスト、電話の交換手……といふやうな公開的の仕事に從事することを許されるやうになつ

た。そして、それらの仕事に携はる婦人達は皆大戰中と同樣ヴェールをつけなかつた。無論それはちやうどわが國で洋裝や斷髪が一部の人々以外に歡迎されないやうに、一般の人々には直ぐには受け納れられなかつた。ヴェールをつけないで公開の場所へ出るのは職業婦人か器量自慢の蓮葉娘ときまつてゐた。が、綺麗なものを誇りたいのは世界共通の女性の持つ尊い弱味である。トルコの婦人達にも例外はない。何時しかヴェールは厚物から薄物に變り、たゞ體裁だけのものとなつた。そして、最近にはその薄物すらも殆んど用ゐられなくなつてしまつたのである。また僅々五六年前までは夫婦でも母子でも或ひは兄妹でも、とにかく性の異つた者が二人で公開の娯樂物芝居、映畫、音樂等を見物に行くことは法律を以て禁ぜられてゐた。が、かゝる禁制は今日ではない。また自動車や馬車のやうなものにでも男女二人で同乘することは許されなかつた。が、現在では前にも云つた通り全く自由である。たゞ、今日でも市中のタクシーや乘合馬車にはトルコ婦人專用の特別席が設けてある。そして、異教徒を排する思想が強いので、モスレム同志なら男女が腕を組んで歩いても大丈夫であるが、トルコ婦人が異教徒、殊にキリスト教徒たる男子と行を俱にした場合にはいろ〳〵面倒な問題が持ち上り勝ちである。どうかすると、二人とも野次馬のために袋叩きにされることすらある。

**婦人の新聞と學校**

現在コンスタンチノプルには、婦人によつて經營されてゐる大規模の週刊新聞がある。婦人の智能啓發と地位向上とを主義とするもので、讀者は大部分婦人であるが、その記事はすべてアラビヤ語を以て書かれ、主として政治、文藝、家政の三欄に力を注いでゐる。ありふれた婦人雜誌のやうなものではなく、なか〳〵讀みごたへのする新聞である。

また、コンスタンチノプルにはアメリカ人の設立した女子大學がある。このカレヂはもとスクタリにあつたのであるが、今では金角灣から五マイルばかり、ボスポラス海峽に臨む風光明媚な丘の上に移されて、ヨーロッパの先進諸國のそれに優るとも劣らぬと思はるゝくらゐ萬般の設備は完全してゐる。そのほか、極めて進歩して組織の理化學研究所や衛生試驗場のやうなものもあつて、何れも婦人の學生を收容する。最近にはそれらの學校や研究所だけでは滿足せず、遠くパリー、ロンドン或ひはベルリンあたりへ遊學する婦人がめつきりふえて來た。かくて、今やトルコの婦人は日に日に開放的にまた智識的になりつゝある。彼女等がヨーロッパ諸國の婦人と同程

度の自由を獲得するのも遠くはあるまい。

× × ×

× × ×

**マホメット教の托鉢僧**

マホメット教徒も、佛教徒やキリスト教徒と同様、夥しい宗派に分れてゐる。托鉢僧の宗派又は準宗派だけでも百七十七もあると最近この地に永く在住してマホメット教の研究に努めたアメリカのある宗教家は發表してゐる。

托鉢僧はトルコ全國到るところに於て見懸ける。彼等は一生涯托鉢生活を續けてゐるのである。彼等はコンスタンチノプル市内のみでも約二百五十の禮拜所を持つてゐる。そして、宗派によつてそれ〴〵異つた儀式を行ひ、固有の習俗を守つてゐる。が、現世の慾を捨てることが來世に於て幸福を受け得る唯一無二の方便であるといふ信念に於ては百七十七の托鉢僧宗派すべてみな一致してゐる。

コンスタンチノプルのペラ大路の近くには一定の禮拜所を持たぬ托鉢僧の集るモスクがある。また、ペラ・パラス・ホテルの近くには荒行を標榜する托鉢僧の禮拜所がある。これらのモスク



又は禮拜所へ行く信者は、驚くべき狂熱的信仰の持主ばかりである。無所屬托鉢僧はみな教祖マホメットの著てゐるやうなマント式の被衣を著け、灰色の高い糖塔狀帽を戴いてゐる。彼等に云はせると、この奇妙な帽子は、世界が創造さるまで教祖マホメットの靈魂が保護されてゐた容器の形を型どつたものださうである。この無所屬托鉢僧をモスレムは「メヴレヴィ」と呼ぶ。

**托鉢僧の祈禱會**

メヴレヴィは、毎週火曜日と金曜日に各自の屬するモスク又は禮拜所に會合して行を行ふ。その行は實に奇拔なものである——

先づタムバリンの音につれて一同が揃つて爪先で立ち、口々に

『ラ・イラ・イルラルラ、ウ・モハンメド・ラスール・アルラ』(アルラーのほかに崇拜すべきものはなく、マホメットはその豫言者なり)

と、叫びながら、幾度となく、ぐる〳〵廻りをする。そして、そのウンと力を入れて廻る時、兩手を擴げて右手は頭よりも高く左手は頭よりも幾分低く、ちようど輕業師が綱の上か何かで身體の中心を取る時やるやうな眞似をする。また、眼は必ず閉ぢ、頭は肩にくつゝくやうにかたむける。かういふ容姿でぐる〳〵廻りながら、先の眞言を唱へ終ると、『神よ用意はとゝのへてゐま

す。一刻も早くわれを御許に召し給へ！』と云ふ意味の祈禱を大聲に叫び出すのである。この祈禱は行の時ばかりでなく、平常でも日々何百回となく唱へる。

## 苦行僧の集會

苦行僧は毎週木曜日の午後會合を催すが、當日には信徒以外の者にも參會を許すので中には見物かた〳〵出懸けて行く者もある。

禮拜堂は餘り大きくない。會合の催さるゝ祈禱室は間口、奥行とも五間くらゐなものである。床には一面に羊の毛皮が敷き詰められ、背後の壁には半徑二尺ばかりの半圓形の凹室がしつらへてある。やがて定刻になると、ターバンを敷き、長い被衣を著た長老がその廚子のやうな席へ座り、一同は毛皮の上へ正座する。そこでいよ〳〵式が開始されるのである。

先づ最初に長老が短い説教をする。それが終ると一同口々に例の『ラ・イラ・イルラル……』を唱へながら、頭々前後に激しく振る。その運動は刻々に速く激しくなる。そのうちに幾人かの者は興奮の極忘我の境に入つて、正しい眞言を唱へることができなくなる。やがて堂内は『ル……』『ラアアアア……』といやうふな實に何とも云へない氣味の惡い叫喚で滿たされる。それでもまだ頭を振るのは誰一人中止しない。一同の顏は次第に充血して物凄いやうな色となる。ある者は口から泡を吹きはじめる。また、ある者は痙攣的に飛び上る、跳ね上る……

かゝる間にその室の一隅では寺男が盥ほどもある大きな鐵の鉢に炭火をかん〳〵起して、その中へ幾本かの太い鐵棒を入れて烙く。長老の座つてゐる例の廚子の中からいろ〳〵の責道具——太い棒、大きな平石、先端の鋭く尖つた短刀くらいもある大ナイフ、といつたものが取出される。すると、二三の者がその火鉢の傍へ立つて行き、いきなり熱く烙けた鐵棒を素手で引出して、そのまゝそれを持つて室内を驅け歩く。と、また一方では取出された責道具を執つていろ〳〵な苦行をやり始める。床の上に横臥して平石を腹の上にのせる者がある。對座して互に棒でなぐり合ふ者がある。またいきなり頭を壁にたゝきつけて、そのまゝ床の上に打倒れてしまふものもある。甚しいのになると、件の鋭いナイフを力一杯自分の腕に突き徹す……

まるで正氣の沙汰ではない。また、事實正氣ではないらしい。何でも專門家の話によると、かういつた狂熱的な信仰の持主は、祈禱をやつてゐるうちに興奮して一種の氣狂ひ、宗教的精神錯亂とでもいふべき狀態に陷るのだとのことであるが、確かに彼等苦行僧達の行爲は正氣の沙汰と

は思はれない。

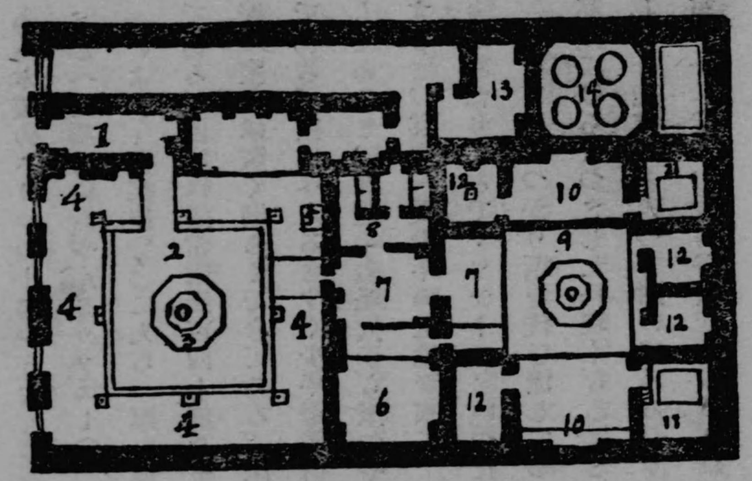
× × × × ×

## トルコ風呂

トルコの名物の一つに風呂がある。トルコの風呂はローマの風呂ごゝもに古くからその名を世界に知られてゐる。しかも、ローマの風呂は、今日ではたゞ往時の燭熱した文化を偲ばせる一箇の研究資料ごしてその殘骸を止めてゐるだけであるが、トルコ風呂は現在トルコ國内はもごよりペルシヤ、シリヤ、エジプト、チユニス、アルゼリア等の西アジヤ及び北アフリカの諸國をはじめ殆んご世界のあらゆる國々に存在して、人々の娯樂物ごなり、慰安物ごなり、また保健物ごなつてゐるのである。現にわが國のやうな古來風呂に不自由のない土地にすらその勢力を及ぼしてゐる。

トルコの風呂は、いふまでもなくすべて例の蒸風呂が主ごなつてゐる。從つて普通の湯の風呂のやうに簡單には造れない。浴室の設備が複雜で、非常に金がかゝる。であるから、トルコでは自家に浴場を持つてゐるのは必ず相當裕福な人ごきまつてゐる。そこで錢湯が流行る。ごんな田





〔第八十二圖〕 トルコ風呂

舍町にも浴場だけは實にもつたいなゐくらゐ立派なものがある。錢湯の發達してゐるごでは、わが國ごもにまさに世界一ごゝ云つていゝであらう。

浴場の設備は無論千差萬別であるが、公開の浴場は大體に於て第八十二圖に示したやうな構造になつてゐる。

先づ表の入口(一)から入るゝ、ごりつきに廣い休憩室がある。室の中央部には圖に示したやうな仕切がしてあつて、絶えず清水が噴いてゐる。此室は休憩室であるごごもに一般入浴者の脫衣場である。この部屋で滿足できなければ、いくらかの料金を拂つて特別脫衣室(四)へ行く。此處には通常綺麗な少年がゐていろいろごゝ客の世話をしてくれる。用意が調つたら備へて

ある木製のスリッパーのやうなものを履いて奥の室(七)へ行く。この時、何か飲みものがほしいと思へば場内にちやんとカフエー(八)ができてゐるから其處へ行けばいゝ。

いよ〳〵蒸部屋(九)に入る。厚い扉を押して中へ這入ると、其處はたゞ白濛々たる湯氣の世界である。溫度は通常攝氏百四十度乃至百六十度くらゐもあるので、最初は顏がヒリ〳〵する。だが、室内は廣く明るくできてゐる。床も周圍の壁もすべて青色大理石張り、室の中央には噴水まである。室内へ入るとすぐ少年が眞白なタオルを敷いてくれる。それに腰を下ろして暫くぢつとしてゐると、身體中の毛穴から玉のやうな汗が流れ出す。顏も背も手も足もぬる〳〵して來る。すると、其處へ美少年の三助が來て、身體中殘る隈なく洗つてくれる。頭から足の先まですつたりもんだりまるでマッサージといつた丁寧さである。

かくて、すつかり垢を洗ひ流してしまふと、次の室へ行つて暫くソファの上に横になる。この部屋にはちよつとした料理くらゐはとれるやうになつてゐる。數多の室に分れてゐて、各室に美しい介抱方が一人づゝ附いてゐるやうなのも尠くない。休憩室ばかりでなく、浴室も普通の混浴室の外に(十二)分房浴室がある。これは無論一室に一人づゝ入るので、各室には一人づゝ三助がついてゐる。三助は、トルコでは大抵紅顏の美少年であるが、パリーあたりのトルコ風呂には若い女のところが尠くない。それらの女三助はみな客につき切りですつかり世話をする。規定の世話料は大したこともないが、特別の世話料は隨分高い。しかも、トルコ風呂の女には悪ごい病氣を持つた奴が多いので、大抵高い料金を拂つた上、手術料や藥代を拂はされるといふことである。大戰前にはロンドンもさういふ浴場が隨分たくさんあつて、非常に繁盛したものであるが、その後、その筋の取締りが嚴重になつたので、現在では殆んどないらしい。

このほかトルコ風呂の中には、大抵、水泳場や日本流の混浴場などが附屬してゐる。要するにトルコの浴場は何れもなか〳〵大規模なもので、浴場にはちがひないが、また立派な娯樂場或ひは倶樂部であるともいへる。

## アラビヤ人

アラビヤ人の本土は本來アラビヤ半島であるが、今日ではペルシヤ灣の東海岸地方及びアフリカの北部一帶に擴つてゐる。彼等がかゝる大移動をなしたのは、西暦六百二十二年頃にかのマホメット教が勃興して以來のことである。

彼等は何れもヨーロッパ系統の人種卽ち白色人種に屬してゐるけれども、概して皮膚は薄黑く、頭髮や眼も黑い。そして、中背で、瘠せてはゐるが筋骨はたくましい。顏の形は大體に於て細長い、所謂爪ざね型で、鼻は長くて高い。

アラビヤ人はその生活狀態から二部に大別することができる。卽ち、都會及その附近に生活するものと、野外に天幕を張つて居住するものとである。その數は前者の方が非常に多く、大約四と一の割合に當る。アラビヤ人と云へば普通、馬や駱駝とともに放浪生活を送つてゐるものゝやうに思はれ勝ちであるが、事實はまるであべこべで、反つて都會地で商工業などに携つてゐる者の方が遊牧生活を送つてゐる者——所謂ベドウイン族よりも遙かに多いのである。

兩者の生活は非常に違ふ。まつたくかけ離れてゐると云つてもいゝくらゐである。從つて、その風習や性情には無論大分異つた點ができてゐる。例へば、野に住むベドウインは依然として殺伐な性情を多分に持つてゐる。彼等はその家畜に對しては實に優しく親切であるが、異教徒や異民族に對しては實に殘忍酷薄な眞似を敢てする。異教徒異民族でなくとも、卽ち同じアラビヤ人であり、等しくマホメット教徒であつても、その屬する部族又は部落が違ふ場合には容易には打ちとけない。また彼等は屢々隊を組んで强盜をやる。支那の馬賊のやうに民家を襲ふことは餘りないが、沙漠の中で旅行者や隊商を襲擊して、その所持品貨物を强奪する。たゞ品物を强奪するだけならばいゝが、どうかすると强奪した上に殺害する。またいきなり殺害して置いて掠奪する。であるから、沙漠地帶を通過する隊商や旅行者は、みな嚴重に武裝して常に彼等の襲擊に備へるのであるが、何しろ對手は生命の尊さを知らぬうへ馬でも駱駝でも己が手足のやうに自由自在に使ひこなす腕を持ち、射擊に長じ、地理に明るいといふ恐るべきしろものであるからなか〳〵その魔手からのがれるのは容易でない。それでも一行の人數が多ければいゝが、十人以下といふやうな小勢の場合には、無事に目的地へ到著することは殆んど不可能だと云はれてゐる。

要するに沙漠に住むベドウインは、トルコを蹂躙し、北アフリカの諸國を切り從へ、遠くイスパニヤにまでその勢力を及ぼした光榮ある祖先の粗剛果敢な性情がまだ殘つてゐるのである。

然るに、都會に住むアラビヤ人には、かゝる獰猛な性質は殆んど之を認められない。のみならず、彼等は今やユダヤ人にも劣らないと思はるゝくらゐ物質慾の強い、利に敏い民となつてゐるのである。殊に、エジプト、アルゼリヤ、チユニス等のアラビヤ人は過去數十年間に非常な變化をした。彼等はもはや沙漠の浮浪民ではない。立派な一箇の文化人である。

かく兩者の間にはいろ〳〵の點に於て大きな隔りができるが、たゞ一つ全アラビヤ人を通じて共通な點がある。それは、マホメット教を信奉してゐることである。アラビヤ人に非ざるマホメット教徒は夥しい數に上るが、アラビヤ人にしてマホメット教徒でない者は殆んど絶無と云つても過言ではない。ベドウインでもカイロやコンスタンチノプルの文化人でも、マホメット教徒であることに於ては變らない。從つて、彼等の思想には如何にその住む場所が違ひ、生活が異つても一脈の相通ずる點がある。またその風習も、他の方面は如何に相違しても、宗教に關する部分だけは一致してゐる。つまりマホメット教は、アラビヤ人の生活の基調をなしてゐると云ひ得る。この意味に於て、アラビヤ人の生活を知るには、どうしてもマホメット教を研究してかゝる必要がある。次に極く簡單にその概要を記して見やう。

## マホメット教

マホメット教は回教或ひは回回教とも稱られてゐるが、前者はマホメットの傳へた宗教であるといふところから歐米人が勝手に附けた名であり、後者は支那人が、昔この教を新疆省に住んでゐた回々（フィフィ）、即ちウイグル人の媒介によつて知つたから、それで回々人の宗教即ち回々教と云ふのであつて、孰れも本來の名稱ではないのである。

その正しい名稱は『イスラーム』である。そして、このイスラームの名は、マホメット教徒間では神聖犯すべからざるものとなつてゐる。

元來このイスラームといふ名は、アラビヤ語のアスラマ（正しくする、又は安全にする）といふ言葉から出た名詞であつて、平和、安全、正義等の意義を持つゐる。なほイスラーム教では信者のことを『モスレム』と呼ぶ。が、この『モスレム』といふ形は「アスラマ」の過去分詞で、正しくされたものの意味である。

抑もマホメット教の意義、根本思想は何かと云ふと、一元神論即ち唯一無二の全智全能なる神を信じ、それによつて安心立命を得ようとするものである。從つてマホメット教では、唯一の神

のほかには何ものの介在をも許さない。キリスト教などのやうに、神の子であるとか、聖靈であるとか、さらに進んではエンゼルであるとかサタンであるとかいふものもなく、僧俗の區別なども存在せず、教祖マホメットすらもたゞの人間として取扱つてゐる。

その經典はアル・コルアーンと呼ばれる、俗にはコーランなどともいふ。『神のほかに崇拜すべきものなく、マホメットはその豫言者なり』とは、その經典のあらゆる部分に於て高唱さるゝところである。

さればマホメット教には、絶對的に偶像がない。そして、またあらゆる宗教の教祖や使徒——例へばシャカであるとか、キリストであるとか、モーゼであるとか、アブラハムであるとか、さういふ人々もマホメットと同じくたゞ一個の人間、一介の豫言者であつて、決して神とか佛とかいふ超人間的のものでないと解釋してゐるのである。いかにも人間的な見方であつて、この點はたしかにマホメット教の特徴と云はねばならぬ。世界の何れの宗教もこの點では、はるかにマホメット教に及ばないと云ひ得る。

## コラーン

マホメット教の聖典は『アルクルアーン』であるが、これは教祖マホメットがアラビヤのメッカに於て修業してゐた頃からメヂーナに移つた後、その死ぬまでの間に「天神アルラーから受けた默示」を書き綴つたものと稱せられ、全章百十四に分れてゐて、マホメット教徒の日常生活の規範である。

かくコラーンはマホメットがアルラーから授けられたものとされてゐるので、同教徒がこれに對するは、宛も偶像教徒がその偶像に對するが如く、絶對的の信仰と尊崇を拂つてゐる。であるからマホメット教を知るにはコラーンを研究するが最もいゝ方法である。コラーンに表はれてゐるイスラームの原理とも云ふべきものは、要するに左の五つの思想である。

一、絶對に犯すべからざる權力者にして、宇宙萬物の創造主たる唯一無二の神を信仰すること。

二、人間相互の親和と慈惠とを旨とすること。

三、恩を感じ、德に報ゆること。

四、來世を信ずること。

五、あらゆる煩惱を排除すること。

マホメット教では以上のものを五大教理と云つてゐるが、更にこれらの教理を守るための方法として、六つの信仰箇條と、五つの修業箇條と、幾多の戒律とが定められてゐる。六つの信仰箇條とは——

一、アルラー神の信仰
二、天使の信仰
三、コラーンの信仰
四、豫言者の信仰
五、天の審判に對する信仰
六、宿命の信仰

五つの修業箇條といふのは左の通りで、いづれもイスラム教徒たるものは必ず實行しなければならぬものである。

一、シエハダ（信仰の眞言）



二、サラト（祈禱禮拜）
三、サダカ（喜捨）
四、シヤム（斷食）
五、ヘッジ（巡禮）

**信仰の眞言と禮拜祈禱**

シエハダ（信仰の眞言）といふのは、「ラ・イラ・イルラルラ・ウ・モハンメド・ラスール・アルラ」（アルラーのほかに崇拜すべきものなく、マホメットはその豫言者なり）の一句であつて、同教徒たる者はこれを『常に口にし、殊に死ぬ時はかう唱へながら息を引取るべし』と定めてある。

祈禱禮拜は必ず日に五度しかも一定の時刻に行はなければならないと規定してある。されば、敬虔な信徒は如何なる場所にあつてもその時刻になると必ず聖都メッカまたは東の方へ向つて正式の禮拜祈禱を捧げる。各モスク——マホメット教寺院では禮拜祈禱の時刻になると、ムアヂン（時刻報知役）が本堂の尖塔上なる大鈎鐘を鳴らして附近の信徒にその時刻を知らしめる。それは最初がスブフ（夜明け方）次がズルフ（正午）、それからアテル（午後三時頃）、マグリブ（日沒時

の少し後)、最後がアシア(日没時の約一時間半後)であるが、エジプトやシリヤの都會では、それらの時刻には鐘を鳴らすばかりでなく、各寺院のムアヂンの一人がその寺院の附近を、大聲に左のやうな文句を叫鳴つて歩く——

『アルラフ・アクバル(四度反復)アシユハジ・アル・ラ・イラハ・イルラルラ(二度反復)ヘイヤアラス・サラー(二回反復)ヘイヤアラル・フエラー(二回反復)アルラフ・アクバル(二回)ラ・イラハ・イルラルラー』

——アルラー(神)は最も偉大なり。アルラーの外に神なきことを證す。マホメットはアルラーの豫言者なることを證す。禮拜祈禱に來れ。救ひを受けよ。アルラは最も偉大なり。アルラーの外に神はなし。

その聲を或はその鐘の音を聞くと敬虔なモスレムは、直ちに手、足、耳、鼻の穴等を水で洗ひ清めて、所定の型通り禮拜祈禱をする。この禮拜祈禱の前に身體を清めることは、モスレムにとつては極めて重要な義務である。如何なる場合にもこれを欠かすことは許されない。手足其他を清めないで禮拜祈禱を行ふことは重大な罪惡(宗教上の)の一つとなつてゐる。尤も、アラビヤの内地のやうな沙漠地帶——飲料水すらも得難い土地では、日々五回づつ身體を洗滌するのは事實上不可能であるから、此處では特に水の代りに砂を用ふることが許されてゐる。なほ、禮拜祈禱を行ふ場合には、戸外にある場合でも必ず履物を脱いで洗足になる。禮拜祈禱の順序方法は無論戒律に示してある通りにしなければならない。その形式は隨分煩鎖であるが、幼い時から毎日毎日欠かさず勤めて來たモスレム達は、別に厄介とも面倒とも感じないらしい。人通りの多い路傍でも彼等は一點の遺漏もなく悠然として正式の禮拜を行ふ。禮拜祈禱の方法は面白い。

**禮拜の型**

先づ最初に直立して、『アルラーフ・アクバル』——アルラー(神)は最も偉大なり——と大聲に唱えながら、兩手を開いたまゝ掌を前方に向けて顏の兩側に差上げる。(挿畫の中の一は卽ちその形を示す)そして、引續き二三の祈禱を低聲に唱へた後、靜かに兩手を下げて帶のあたりに重ね合せる。この時、また大聲にコラーンの最初の一句を諳誦し、續いて同經典中の二三の句を低聲に諳誦する。それから最敬禮式に上體を屈めて、『アルラーフ・アクバル』と三度くりかへし、(挿畫中の二の形)終ると再び直立して、また同じ眞言を大聲に唱へ上げる。(挿畫中の三)そこで此度は床(又は地面)の上に手をつ

〔第八十三圖〕モスレムの禮拜

いて頭を床につくくらゐ下げ、(挿畫中の四)短い祈りの句を一句唱へると頭を上げて正座したまゝ(挿畫中の五)次の句を一句唱へ、終るとまた先と同樣敬々しくお辭儀して、次の句を一句唱へる。これをつゞけさまに三度やる。それから引續き正座したまゝ暫く低聲に祈禱する。これで正式の禮拜祈禱は一通り濟むわけであるが、それだけで仕舞ふものは殆んどなく、大抵また同じことを最初から今一度くりかへす。中には三度も四度もくりかへす者もある。

禮拜祈禱を行つてゐる間の彼等は殆んど忘我の境に入つてゐるやうに見受けられる。如何に周圍が騷がしくとも禮拜を受るまでは見向きもしないといふ熱心さである。これは無論熱烈な信仰を有するからではあらうが、また一つは、永い間の訓練の結果であると思はれる。確かに彼等の禮拜祈禱は熱烈なものであり、嚴肅なものである。一人々々がさうなのであるから、壯嚴な大寺院の禮拜堂で行はるゝ禮拜式や、月の夜などに町の廣場、郊外の野、或ひは河畔の砂の上で催さるゝ大祈禱會は、何人をも感し去る程の力强い氣分に滿ちてゐる。

## 斷食と巡禮

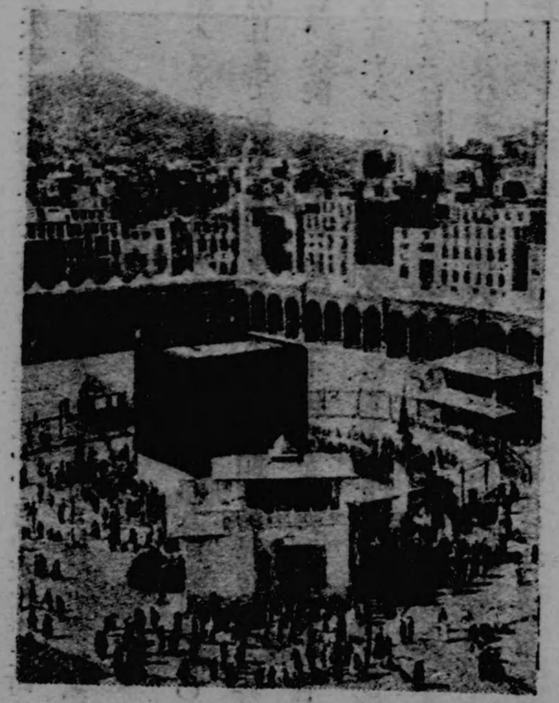
斷食は每年一回、マホメット教曆の「ラマザーン」の月、卽ち第九月新月の日から始まつて次の新月の日までの滿一箇月間に亘る。その間は幼兒を除くの外は晝間は一切の飲食を斷ち、寺院へ參詣したり、自宅で經文を讀んだりして、日を暮し、夜半になつて初めてたゞ一回の食事をやる。この期節になるとマホメット教徒の商店は大抵休業するので、旅行者などは隨分困ることがある。

巡禮といふのは、聖都メッカ、メヂーナ及びその附近の聖蹟に巡禮することを意味するのであつて、苟もマホメット教徒である以上は、尠くとも一生に一度はこれを行はなければならぬ。そしてそれはマホメット教曆の第十二月に行ふのが最もいゝことしてある。

## 割禮

マホメット教徒の間では、男の子が六つか七つになると必ず割禮を施すことになつてゐる。割禮とは陽皮を切去することであるが、これは婚禮、葬式とともに一生の大禮となつてゐるので、何れの家庭に於ても隨分派手に行はれる。

いよ〳〵それを施すことに決定すると、先づ日を選んでその子供のために盛んな行列が催される。その日、子供は先づ頭に赤いカシミヤのターバンを卷き、身にはなるべく人の眼をひき易い派手な女の子の著物を著けたうへ、なほ一層眼立つやうな女の裝身具——髮飾りだの頸飾りだのを飾り立てる。さうかすると、その裝身具の一つに奇怪な、何人の眼をも



〔第八十四圖〕メッカなるカーバの黑石



ひくやうな繪畫や模樣が麗々しく描いてあることもある。これは何れもマホメット教徒共通の迷信であるところの所謂「邪眼」を避けるためである。

「邪眼」といふのは、要するに他人から惡意や嫉妬の眼で見らるゝこと、必ず恐るべき災害を受けるといふ迷信であつて、エジプト人でもトルコ人でもアラビヤ人でも或ひはペルシヤ人でも、所謂イスラム世界に住むものはみなこれを深く信じてゐる。わざ〳〵女の子の衣裳を著たり、仰々しい裝身具を帶びてそれに人眼をひきやすい記標をつけたりするのは、人々の注意をそれらのものに集中せしめて、うまく「邪眼」の災をまぬかれやうといふ考案なのである。

とにかくさういふ奇拔な扮裝をして、なほ顏の下半分——眼から下は美しい模樣を縫取りした絹ハンケチで蔽つて行列の先頭に立ち、その周圍には、割禮の手術者たるべき床屋のおやぢと騷騷しい樂隊とが附添ふ。そして、そのすぐ後には二三人の少年——その主役は大抵床屋の息子——が、床屋の表徵たる「ヘムル」を車にのせて隨從する。

ヘムルといふのは四本の脚のついた半圓筒形の木の戸棚であるが、この日にはその平面の側に下げてあるカーテンの上に鏡の細かい破片と銀(又は銅)貨とが一面に張りつけられる。その背後

即ち殿りにはまた騒々しい樂隊がつく。かうして、騒々しく樂を奏しながら市中を練り歩くのである。

割禮の手術はその日のうちに行はるゝのが通例であるが、時には二三日のちになさるゝこともある。何れにしても當日には親類知人等を招いて大晩餐を振舞ふ。が、儀式と云つては割禮を受ける當人が來客一同の前でコラーンの一節を讀むだけのことで、近親者のほかは、食事が濟むと暫く雜談でもして時を移したのち、思ひ〳〵に退散する。手術模樣は一切異教徒には不明であるが、要するに包皮を切去するだけであるから別に面白いこともないらしい。昔のユダヤ教徒はこの手術の道具として薄い刃物のやうな石片を用ひたと傳へられてゐるが、今日のマホメット教徒は剃刀を使用するとのことである。

## 婚禮

マホメット教徒は一般に早婚であるが、殊に女は早くて、先づ十歳から十二三歳までの間に結婚するのが通例である。男も事情が許せば二十歳以下で妻を娶る。男女間に嚴重な隔離があるので、自分自身で配遇者を選擇することは事實上許されない。緣談はすべて、兩親かまたは結婚媒介者(女)によつて纏められる。

〔第八十五圖〕 アラビヤの女

緣談が首尾よく纏ると、男家から女家へ「マール」を贈る。「マール」は先づ身代金とでもいふべき性質のもので、その額は身分によつて、また女が處女であるや否やによつて違ふ。が、エジプトの中流階級のアラビヤ人の間では、先づ初婚の娘は五六十ポンドが普通となつてゐる。女が再婚の場合にはその三分の二で濟む。そして、このマールは、結婚前に全部贈るのではなくて、その約三分の一は男が死亡した場合、または男が理不盡な離婚を求めた際に女へ扶助料として支拂ふさい

ふ契約書を作製するだけに止まり、結婚の際には雙方の間に協定された金額の三分二を贈るだけである。が、さにかく、マールの授受が濟めば婚約は完全する。

婚禮を擧げる前日には、花嫁は近親知己を招いて御馳走し、宴が終るさ賑々しい行列をつくつて入浴に行く。これをエジプトでは「ゼフエト・エル・ハムマム」さいふ。

行列は高調子の笛さ太鼓さよりなる樂隊が先導し、次に花嫁の知己中の既婚の婦人さ、夫婦そろつた近親者さが行く。その後には若い未婚の娘が數十名、それから花嫁の輿。花嫁の輿はちようどわが國の神輿のやうな形のものであるが、その座席の正面は開け放たれ、左右さ背後の三方には美しい色絹のカーテンが下げてある。また棒鼻には派手な色合の長い布が結んである。尤も近來カイロあたりではこの輿は全く廢れて、代りに一種特別の車が用ひられるやうになつた。輿にしろ、車にしろ、花嫁は、頭からすつぽりさ大きなカシミヤのショールをかむり、頭上に厚紙製の小さな冠か帽子かを戴いて行く。花嫁の輿の後にはまた樂隊がつく。そして、行列は市中を出來得る限り徐行する。

翌日輿入れの際にもこの時さ同樣の行列をつくつて行く。

## 葬式

葬式も結婚式に劣らないくらゐ盛大である。死骸は近親者によつて湯灌され、清淨な布にくるんで輿の間に置かれる。死亡が朝であればその日の午後三四時頃まで、夕方であれば翌朝までその家に留め置かるゝのが通例さなつてゐる。そして、湯灌後、出棺までの間は、絶えず近親者や「ネダベー」――常に葬式に雇はれて泣いたり悲しんだりする商賣人で、エジプトでは女に限られてゐる――が死骸の側に附ききりで死者の冥福を祈る。また「フイクス」(學院の長)が「コラーン」の數節を讀唱する。かくて定めの時刻が來るさ、死骸を白色または綠色の幅の廣い布で固く卷く。棺は通常用ひない。布で卷いた死骸をそのまゝ屍架の上へ乘せて墓場へ運んでしまふのである。

葬式の行列の先頭には、その町内または村内の貧者が五六人。

『ラ・イラ・イルラルラ・ウ・モハンメド・ラスール・アルラ』(アルラーのほかに崇拜すべきものなく、マホメットはその豫言者なり)さ、口々に叫びながら行く。その後には死者の近親者中の男子がつゞき、次には三四人の男の子が棕櫚の枝葉で造つた臺の上に「コラーン」の寫しを載せて行く。彼等は歩きながら「ハシリイエー」(コラーンの中にある最後の審判を表現した詩句)を讀

唱する。其後には三四人の男が死骸を屍架の上にのせて擔いで行く。死骸は必ず頭部が先に向けてある、死骸の次には死者の近親者中の女達が大勢、みな頭髪を振り亂し、大聲に泣き叫びながら行く。例の「ネダベー」までその中に混つて大聲を擧げてゐることも珍らしくない。そして、死者が一家の主人である場合には、彼女等は泣く合間々々に大聲を發して。

『ォー、わが家の駱駝よー』と叫ぶ。駱駝はアラビヤでは一家の「稼ぎ人」の表徴である。

一行はまづモスクへ行く。こゝには多くの聖者の墓がある。死骸をのせた屍架はその一つの前に下される。直ちに大勢の僧侶が「コラーン」を讀唱して死者の冥福を祈願する。終ると一行は再び列をつくつて墓場へ行く。墓場へ到着すると、死骸は屍架から下されて、墓穴の中へメッカの方を頭にして横たへられる。死者が宗團の關係者、苦行僧、貴顯紳士、富豪等の場合には、この時水牛を屠殺して犧牲にするとか、死骸を教團の御旗で包む儀式を行ふとか、いろ〳〵變つた儀があるが、普通人の葬式には別に何等のこともない。そのまゝ土を掛けて葬つてしまふだけである。

〔第八十六圖〕 アラビヤ人の葬式



一般に男子は葬式にも喪裝しないので變つた點もないが、女のそれには隨分奇拔なものがある。例へばエジプトの田舍では、死者の近親の女は頭髪をわざ〳〵振り亂して、頭と胸とに泥をつけ手や腕を、ある木の葉の染料で青く染めるといふやうなことをやる。頭に麻、木綿、モスリン等の細長い布を卷いて、その端を背後にたらして置く風習はエジプトのみでなくアラビヤ、シリヤ、トルコ、ペルシヤ等に廣く行はれてゐることらしい。

も一つ、マホメット教徒の葬祭に於て變つてゐると思はれるのは、男女によつてその墓場を區別することである。彼等の墓場へ行つて見ると、必ず眞中に區劃があつて、一方は男の墓、一方は女の墓といふやうになつてゐる。マホメット教團には比翼塚はないわけである。如何に女は「汚れたもの」であるにもせよ墓場まで區別するとは隨分妙な話である。

## 男女關係

一體マホメット教では激しい男子中心主義が唱へられてゐて、教祖マホメットにも「婦人は必要なものであるけれども何等の善をも齎らすものでない」といふ意味の言があり、婦人は避け難い邪惡ときまで云はれてゐる。そこで、マホメット教徒間では、一般に婦人は所謂閉居主義の生活を營むべく餘儀なくされてゐる。夫と肉親の親兄弟と自家の奴隷と、この三者以外の男子に素顏を見らるゝのは非常な罪業であるといふので、絶えず厚い布やヴェールを以て顏を覆ひ隱してゐなければならぬ。家庭の食事すらも男女は別々にとる——母親と娘とは、父親や兄弟が濟ませてから食べるのが宛も不文律のやうになつてゐる。また、男子は同時に四人までの妻を持ち得る。妾は何百人蓄へても差支へない。尤も、教祖マホメットがかゝる戒律をつくつたのは一夫多妻を奬勵するためでは決してなかつたマホメット時代のアラビヤでは極端な一夫多妻主義が行はれてゐて、普通人でも五人六人と妻を持つ。上流社會の者などは數十人の妻を持つたうへそれ以上の妾を蓄へるといふ有樣だつたのでマホメットは自已の理想とする一夫一婦主義を實現する道程として先づ四人以下といふ制限を設けたのであらうといふ說もある。が、マホメットの理想が奈邊にあつたか今日のマホメット教徒には事實上理解されてゐないやうに見受けられる。經典に四妻まではいゝことなつてゐるからといふわけで、餘裕のある者に公然と數人の妻を持つ。現に最近までマホメット教世界の最高權威者であつたトルコのスルタン(王)ですら、數百人の妻妾を持つてゐた。

かゝる有樣であるからトルコにしろペルシヤにしろエジプトにしろチユニスやアルゼリヤにしろすべてマホメット教徒の國では、女は極めてみじめな地位に置かれてゐる。マホメット教の發源地たるアラビヤに於ては無論である。さればマホメット教世界では、女に生れるくらゐ不幸なことはない。生れ落るから死ぬ時まで、否、死んだ後までも前に述べたやうに墓場まで區別されるといふ次第で、ことゴ〳〵にひどい差別待遇を與へられる。さういふ關係からであらう、マホメット教徒の間では一般に男子の出生は非常に歡ぶが、女子の出產は宛も不幸に見舞はれたやうに考へる風習がある。殊にアラビヤ人の間ではそれが甚だしい。男子が生れた場合には近親知己擧つていろ〳〵の贈物をするが、女子出生の場合には、贈物をしないのみならず、近親知己は男ばかりでなく、女までその子の父へ悲歎の辭を寄せる。「殘念でしたネ」、「どうも飛んだことで……」「まあこの次をお樂しみにおあきらめなさい……」といつたあんばいである。わが國でも以前に

は女子の出生を餘り喜ばない風習があつたが、マホメット教徒、殊にアラビヤ人のそれは到底わが國の比ではない。まつたく事實とは思はれないくらゐである。これくらゐ極端になれば確かに奇習といひ得る。

**アラビヤ人の魔除け**

アラビヤ人の間にも隨分いろ〳〵の迷信が行はれてゐるが、殊に盛んなのは所謂、呪ひ、魔除けの類ひである。老若男女貧富貴賤の別なくさま〴〵の魔除けを用ひ、呪ひの効力を信じてゐる。

魔除けとして最も普通に用ひられてゐるのは、小形のメタルで、大抵紐をつけて頸にかけるが、中には他人に見えないやうなところへつけてゐる者もある。メタルの形はスペイド形、楕圓形、方形、長方形、棒狀等いろ〳〵であるが、多くの場合、三箇が一組となつてゐる。同形のものを三箇横に細い鎖でつなぎ合せるとか、眞中に一箇大形のを置いて左右に小形のものを配するとか、とにかく同一の紐に三箇づゝついてゐる。いろ〳〵魔除けになりさうな文句を記したのもあれば、たゞ美しい繪畫模樣を浮彫りにしたのもある。

そして、アラビヤ人は自分自身が常にこれを帶びてゐるばかりでなく、家畜にも必ずつけてゐる。また、新築した家だの、よく實つた果樹だのといふ人の目をひき易いものには必ずその一部異樣なものゝかたちを遠くからでも見えるやうにはつきりと記して置く。これは例の「邪眼」を避けるためである。

護符は大抵ハート形で、金屬製のものもあれば、皮革で造つたものもある。また木製のものも稀にはある。が、何れもメタル式の平板ではなくて、その中にコラーンの句または一種の呪文を記した小紙片が納められるやうに箱になつてゐる。富裕な者は貴金屬で立派なもの——裝飾品を兼ねるやうなものを造るが、貧しい人々は大抵皮革か何かを用ひて自分で造る。何でもこの護符は中の紙片に記された文句によつてそれ〴〵ちがつた効力があるのださうで、ある句は盜難除けになる、ある句は姙難除けになる、またある句は水難除けになるといふやうにそれ〴〵一定してゐる。

護符は大抵は矢張り長い紐をつけて頸にかけるのであるが、全然別の方法で用ひることもある。例へば、病人のお護りとする場合にはこれを枕へ縫ひつける。しかも、その際には護符の數は多いほどいゝといふので、甚だしい者は頭をのせるところもないくらゐ澤山の護符を縫ひつける。

パレスチナに永らく在留したあるイギリスの宣教師の話によると、同地のアラビヤ人の間では生れて間もない赤子の枕――しかもその頭のあたるところへ黄金の護符を縫ひつけて置けばあらゆる災厄から免れしめ得るといふ迷信が行はれてゐて、そのためにまだ固まらぬ頭に一生涯取り去ることのできないやうな傷痕を受けてゐる子供が非常に多い、とのことである。

とにかく、魔除けと護符は、アラビヤ人の間では、例の邪眼や種々の生物をからくりの種にする古術などともに最も勢力のある迷信である。

**ベドウインの天幕**

アラビヤ半島並びに北アフリカの沙漠地方に住むアラビヤ人の天幕は、概して相當大きいが、高さが恐ろしく低くて實に不好構なものである。同じ天幕でもキルギス人や蒙古人のそれは、やゝ家らしい感じがある。形こそ圓筒形で變つてゐるがとにかく骨組はしつかりしてゐるし、周圍の壁に當る部分と屋根との間には確然たる區劃がある。が、アラビヤ人の天幕は、要するに今日わが國なとで普通に用ひられてゐる△形の天幕と同樣で、側面も屋根も全く區別がない。しかも、その組立て方がまた實に亂暴である。即ち、先づ長さ一間乃至一間半の細い棒を三四本ちやうど叉銃の場合と同じやうな形に上端を組み合せて立て、それを中柚として半徑一間乃至二間の圓を劃くやうに長さ三四尺の細棒を三四本づつ柚と同方法で組み合せて數ヶ所に立てる。そして、その上に羊の毛で製した丈夫なフェルトをすつぽりとかぶせ、周圍に砂をかき寄せてフェルトが飛び上らないやうにして置くといふだけのことに過ぎない。從つて、形はまるで一定してゐない。支柱の立て方によつて圓形がイビツになつたり、菱形のやうになつたり、或ひは八角形のやうになつたり、種々に變化するからである。要するにこの天幕は數百年來少しも變化してゐないらしい。

**ベドウインの服裝**

遊牧者であるから服裝は極めて粗末である。先づ男は通常長いシャツのやうなものを著て、帶を締める。帶は皮革で作つたものが多い。著物は主として木綿、しかも白木綿である。そして、頭にも廣い風呂敷樣の白木綿をかむる尤も近來この頭布はターバンに壓倒されつゝあるやうである。

女の服裝も男のそれと大差ない。が、女にはそれ以外に大きなマントのやうな形のコート――大抵綿布――を以て全身を蔽ふ風習がある。

原始的な生を送つてゐる彼女達も矢張裝身具に對しては異常な執着心を持つてゐる。裝飾品を

喜ぶことは他の民族の婦人と異らない。が、財政の極めて貧弱な彼等には貴金属や珠玉はなかなか得られないので、多くは鐵、真鍮、銅、又はニッケルといふやうな普通の金属か、たゞの硝子製の品である。

食料は獸類から得たものが主で、殊に羊の肉は最も重要な位置を占めてゐる。食事には矢張り箸もナイプ、フォータの類も用ひない。すべて五本の指で間にあはせる。そして、各自はたゞ一枚の皿を持つてゐるだけで、料理はすべて盛込みにして一同でつゝき合ふ。

## アフリカ

**アフリカの住民**

アフリカは黑人の本土である。が、この大陸に黑人以外の民族がゐないと考へるのは大なる誤りである。いふまでもなく北アフリカ――エジプトからトリポリ、チュニス、アルゼリヤを經てモロッコに至る地中海沿岸一帶の地に住む諸民族即ちエジプト人、ユダヤ人、アラビヤ人、ムール人、ベルベル族、カバイル族等はたゞムール人が黑人の血を受けてゐるだけで、その他はみな純粹の白人種たるセム種及びハム種に屬してゐる。またエジプトの南東紅海及びインド洋に沿ふソマリー地方のソマリー人はハム種に屬するものである。無論、それらの諸民族の中には皮膚の色が薄黑いものもあるが、骨格容貌は黑人とは全く似てゐない。文明の素質、程度もまるで違ふ。

されば、アフリカ系統の民族が住んでゐるのは大體に於て北緯二十度以南の地である。が、その地に於ても純粹の黑人――頭髮の極端にちゞれた、鼻の平らつたい、唇の物凄いほど厚い、そして全身が鍋墨を塗つたやうに眞黑な土蠻のゐるのは、大體に於て北緯二十度の線から赤道に至るまでの地大陸東海岸のソマリーランド、アビシニヤ、ウガンダ等を除いた地方であつて、殘餘の地方にはバンツー族以外には純粹の

〔第八十七圖〕ベルベル族の舞踊

〔第八十八圖〕ッマリ人

黒人に屬するものはゐないと云つていゝ。卽ち赤道以南の地にゐるのは主として、ネグロイドまたは類似黒人と呼ばるゝもので、これはわれ〳〵日本人よりは確かに黒いが、純粹の黒人ほど黒くはない。先づ暗褐色とでもいふべき色である。なほまた、鼻の平つたいところや、唇のむくれ上つてゐる點は純粹の黒人と違はないが、頭髮は純粹の黒人のそれほどひぢく縮れてはゐない。

**純黒人の一般習俗**

純粹の黒人の特質は大體前述の通りであるが、細密に觀察すると、なほ幾多の特徴を見出し得る。例へば、顏の下半分はちやうど猿のそれのやうに恐ろしく不格好に突き出てゐる。また頭の形は



大體に於て細長い。福助式の頭は黒人の中には極めて稀である。背丈は高く、肉附きも相當いゝ。

スダーンは大なる黒人國で住民の殆んど全部黒人であるが、この地方の黒人は大抵極めて原始的な方法によつてゞはあるけれども、こにかく農業を營んでゐる。彼等の家屋は普通圓形で、その屋根は圓錐形をなしてゐる。

スダーン本土のウォロフ族やニール河上流地方に住むボンゴー族の住家は、直徑、高さともに二十尺乃至三十尺で、すべて丸木と藁とを用ひて建てられてゐるが、なか〳〵堅固にできてゐる。外敵——人または獸——の襲擊を防ぐために入口が極端に小さくしてあるので、出入には四つ這ひにならなければならぬといふ不便はあるが、屋内の設備はかなりいゝ。先づ床は大抵土でたゝきにしてあつて、一隅に設けられた寢床には厚く乾草や芭蕉の葉の乾したのを敷いた上に大きな毛皮が置いてある。

農業を營む結果、彼等は大抵住家の近くに收穫物の納屋を持つてゐる。竹を組み合せた高い臺の上に藁葺の小屋をのせたもので、臺の高さは通常一間半乃至二間に達する。床下を高くするのは無論外敵の害を恐れてである。

彼等は大抵裸體で、僅かに小布片を腰部に纏うてゐるに過ぎないが、その布は女達が固有の機を用ひて織る。裸體民族が織物の製作法を知つてゐるさはちよつと面白い現象である。織物の材料は草その他植物性の纖維で、非常に粗つぽいものが多いが中には相當精巧なものもある。

一般に裝身具を好むが殊に華美な色のものまたはぴか〳〵光るやうな飾りを好むので全身にさま〴〵の金具やガラス製品をくつつける。腕輪、指輪、耳輪、足輪ど身體中輪だらけであるが、それは大抵鐵か銅か眞鍮製で、金や銀の製品を用ひるのは精々酋長どその妻子ぐらゐのものである。輪類の外の飾りも無論隨分多い。或種族は飾りをつけ

〔第八十九圖〕 スダーン人と家

るために耳、鼻迄だしいのになるど唇にまで孔をあけてゐる。例へば先に記したボンゴー族の女などは、耳小鼻及び唇に幾つも孔をあけて、その孔へ草の莖を短く切つて挿してゐる。

また刺青も廣く行はれてゐる。單に裝飾の目的とするものもあれば、その民族を表示するための徽章として行ふものもある。刺青を施す場所は主として顏ど胸どで、背中や腹には餘り行はない。刺青の方法は極めて亂暴なもので、普通針の代りに小刀を用ひる。細かい孔をあけて色を入れるどいふのではなくて、大きな切疵をつくつてそれになるべく傷口のいたむやうな藥——主ども草木の液汁——を用ひて傷痕をのこすどいふ方法である。

黑人の女は通常頭髮をいろ〳〵の形に結んで、飾りをつけてゐる。飾りは頭挿式のものもあるが、大抵は冠のやうに頭へのせる、又は、帶狀になつてゐて鉢卷のやうに卷きつけるやうになつてゐる。男で頭髮を長くしたものは極めて尠い。普通は所謂五分刈式の頭で、髮は一本一本渦を卷いてゐる。中にはすつかり剃つて駝鳥の羽をくつゝけてゐるやうなのもある。——

食物は農業を營む關係上、比較的菜食を多くとる。山中の餘り耕作をやらない部族でも、いろいろの果物や食料に供し得る植物が山野に滿ちてゐるからアラビヤやキルギスあたりの遊牧者の

やうに獸類やミルクを主食物とする必要はない。尤も中には人肉を珍重するなどといふ恐るべき惡食主義者も二三あるが、これとても、たゞいゝ肉の出た場合――例へば他部落の者を捕虜にしたとか神に犧牲として捧げたとかいふ時に、それを喰らへば長壽を得らるゝというやうな迷信から喰ふのであつて、のべつ人肉ばかりむさぼつてゐるわけではない。

以上は黑人の衣食住についてその大體を述べたのであるが、風俗習慣は何れの國に於ても一樣でない、まして殆んど各部族、各部落が互に排し合つて、どこまでも自己の習俗を固持して行かうとする氣分の濃厚な蠻族の間には、普通の點よりも相異した箇所の方が遙かに多い。すべてを網羅することは到底できないが、今手許にある材料の中から最も注目すべきものを二三記して見やう。

**ニヤムニヤム族の變風**

ニール河の上流地方にニヤムニヤム族といふ奇妙な名の蠻族がゐる。何でもニヤムニヤムといふ名は、彼等が人肉を好んで食ふといふどころから隣族のディンカといふのがつけた稱呼で「喰ふ人」の義だとのことである。されば自分ではニヤムニヤムなどはいはないでサンデと稱してゐる。が、とにかく、この部族の者は人を喰ふ。

彼等の社會では、酋長の逆鱗にふれた者は容赦なく死刑に處せられるが、驚いたことは、その死體はすべて仲間内で喰つてしまふといふことである。

服裝も隨分變つてゐる。先づ衣服と云つては腰部に卷きつける毛皮があるだけで、それ以外には何物もない。從つて裝身具は腕輪、頸輪、頭飾り等いろ〳〵あるが、何れもみな材料は野獸の齒牙で、しかも多くの場合それを少しも加工しないで、たゞ紐で連ねて身につける。

他の部族と闘ふ場合や山谷に野獸を狩る時には、左手に幅二尺、長さ四尺ばかりもある小判形の楯を携え、右手には長さ六尺乃至八尺の細身の投槍を持つ。また必ず一本の小刀――鉾のやうな形のもので、刄渡七寸乃至一尺――を腰につける。

投槍と小刀のほかにまだ重要な武器として木製或は鐵製の一種の飛道具があるが、これを用ひる場合は稀である。蓋し、投槍の方が彼等にとつては使ひいゝからであらう。

## バリ族の奇習

同じくニール河の上流地方に住むバリといふ部族は、黒人の中でも最も野蠻な部類に屬し、女は腰部にちよつとした革片か羽毛でつくつた房かをつけるが、男は大抵眞の赤裸で、身體には一物をもつけない。そして、頭を綺麗に剃つて、烏の羽を縛りつけてゐる。

男女とも刺青は盛んに施すが、その模樣は主として直線または點で、複雜な曲線、まして物の形なぞを表はしてゐるものは殆んぞない。

主な生業は一般に牧畜で、家畜は彼等の全財産と云つていゝ。

そこで彼等の社會では、必要な物品を購ふ場合には勿論のこと、嫁を貰ふにも家畜をその代償とする。從つて家畜は何物よりも大切にする。家畜のためには生命を捨てゝも悔いないといふくらゐである。

さればこれを屠つて食用に供するのは、先づ部落の祝祭か葬儀を營む場合かに限られてゐる。この點は蒙古人なぞと非常によく似てゐる。

## アインカ族の雨乞ひ

スダーン地方にゐるアインカといふ蠻族の間では、毎年夏季になると極めて盛大な雨乞ひが行はれる。

それはこの種族の最も重要な年中行事の一つである。さればその祭典は大抵酋長が司會する。司會者には先祖の魂が乘り移る、ここの種族の者は考へるので、絶大な尊敬を拂はれる。

雨乞ひ祭りの當日になると、同種族の男子は盡く齋場へ集合する。齋場は高い峰の頂に設けらるゝのが通例である。

一同が集ると先づ司會者がうや〳〵しく祭壇の前に立つて禮拜祈禱を捧げた後、よく太つた牡牛を屠つて犧牲にする。

そして、司會者が太い鐵の棒をこつて振り廻しながら、聲を限りに

「雲よ御座れ！」と三度くりかへす。それが終ると一同揃つて近くの部落へ立ち歸り、その夜は部落内で盛んな舞踏會を開催する。

**ヌーバ族の迷信**

同じくスダーンの南部にヌーバといふ土蠻がゐる。この部族では誰かに子供が生れると、子供の欲しい女は早速自分の頭よりも大きい石を拾つて來て、それを頭上に戴いてお祝ひに行く。そして、型通り慶賀の詞を申し述べると、そのまゝまた石を頭上へ戴いて歸つて來る。が、自分の家の前まで來ると、またくるりと廻れ右をしてもう一度その家へ出掛けて行く。無論件の大石は頭の上へ載せたまゝである。かくて幾度かそれをくりかへして、いよ〳〵疲れ切ると、その種族の守護神たるソーバの石といふ小山のやうな巨岩の側へ行つて頭上の石をおろし、子供の授るやう祈りつゝ暫く休息する。かうすれば、そのソーバ石の靈が願をかなへてくれると信じてゐるのである。

**マンジャク族の葬禮**

大陸の西端ポルトガル領ギニヤの山中に住むマンジャクといふ一族は、この地方の土蠻中では最も智識程度が高いと云はるゝのであるが、それでもなほ隨分蠻的な習俗を持つてゐる。殊に彼等の葬禮は變つてゐる。

この部族の間では、人が死ぬと先づその遺骸を青葉で燻して所謂燻製にする。でき上ると、すつかり全身の皮膚を剝ぎ、改めてボグンストといふ手織の布で卷く。そしていろいろの色紙で飾つた棺へ納め、それに銅製の鈴か眞鍮製の小さな鏡を結んで部落内の一隅へ祀つて置く。

また同じく、このポルトガル領ギニヤの土蠻中ダホマン族といふのがある。マンジャク族よりはずつと野蠻な種族で、主として狩獵を營んでゐるが、この種族では酋長が死ぬと、誰かお供がゐなくては不便であらうからといふので、幾人かの男——主として酋長が生前特に可愛がつた男達に無理やりに殉死せしめる。また女手も必要であらうといふので、その正妻と妾の中の一人か二人かを殺す。そして、それらの死骸をすべて一纏めにして酋長の墓の直ぐ傍に葬るといふことである。

**黃金海岸の土蠻**

黃金海岸地方といへば、名は莫迦にいゝが、この大陸で最も氣候の惡い、そして野蠻未開な土地の一つである。この蠻境に住む土蠻の一族にアワナスといふのがある。

この種族では男女關係が非常に嚴正に保たれてゐる。何人と雖も二人も三人も妻を持つことは許されない。——アフリカの蠻族には一夫多妻のものが多い——また妾を蓄へ

ることもできない。結婚の際には、ちやんと證人を立てゝ、その面前で男女とも自分の指を傷けて、その血を同一の器に受け、よくかきまわしたのち半分づゝすゝり合つて夫婦の誓ひをする。これを行つた以上、もはやその女は永久にその夫から離れることを許されない。たとへ途中でいやになつても、がまんして一緒になつてゐるよりほかはない。夫の許を去つた女は何人からも相手にされないからである。

**シエラレオネ蛮族の秘密結社**

西部アフリカ地方には非常に宗教秘密結社が多い。これはアフリカばかりでなく世界中到るところに存在するものであるが、西部アフリカ地方の秘密結社は宗教團體とはいふものゝ實に血生臭いものなのである。その最も猖獗を極めてゐるイギリス領シエラレオネなどでは、代々の總督が隨分嚴重な取締りをやつてゐるが、何分この秘密結社の集會は人里遠く離れた深山幽谷に於て催されるのが通例なので、充分の効果は擧らないらしい。

シエラレオネで最も勢力のある秘密結社は「豹人結社」といふ男子のみの團體である。この結社はその名の示す通り實に性質の兇暴な團體で、恐らく全アフリカの結社中最も惡性なものであちうと云はれてゐる。

この結社の者はみな臂部に一種特別の記章をつける。記章と云つても木や金で造つたものをつけるのではない。絶對的に紛失や消滅の恐れのない入墨を施すのである。その刺青の方法からして既に變つてゐる。即ち、先づ太い鐵の針を臂部の皮膚の下へ突き刺して、肉を引張りながら鋭利な切物で適當なだけ切つて取る。そして、傷口にはある木の實から採つた一種の油藥を塗つて置く。それを何回か繰返して一箇の圖案を彫りつけるのである。

この手術の時流れる血はすべて器の中へ受けて、「ボルフイマ」と呼ぶ強烈な藥の原料にするため、その製法を先祖から傳授されてゐる部族の長老達が大切に蓄へて置く。ボルフイマは生きた人間の血と肉とで作られるもので、彼等の間では不老長壽の靈藥として珍重されてゐるといふことである。

されば、その靈藥ボルフイマの原料が盡きると、長老達は結社の集會を催す。集會の行はれる場所は大抵深い森の中である。そして團員一同頭から豹の毛皮を被り、手にはちやうど豹の爪のやうな形をした鋭利な刄物を携へて集合する。一同が集ると、長老が厳かに開會の辭を述べる。

そして、徐ろに會衆の中から元氣いゝ青年を四五人選び出し、『靈藥の原料を持ちかへれ』と命令する。この役に選ばれることは團員の最上の名譽となつてゐるので、選拔された者は喜び勇んで出懸けて行く。犧牲となるのは七八歳くらゐの少年少女が多い靈藥の原料には成熟前の子供の血肉が最もいゝと信じられてゐるからである。しかし件の選手ごもはたゞ子供を浚つて來るだけで直接手を下して殺すわけではない。それはまた他の奴が選ばれてやる。

〔第九十圖〕 パピンガ（カメルンの土人）

ボルフィマには血と少量の肉片を用ふるだけであるから、殘骸は主だつた團員の間に分配する。無論、彼等はまだ食人の蠻風を持つてゐるのである。實にその殘忍兇暴なことは言語道斷で彼等の表章たる豹よりも遙かに獰猛である。



**バンツー族の結社**

豹人結社に次いで有名なのは、カメルンからコンゴー、ローデシヤ一帶に擴つてゐるバンツー族の間に非常な勢力を有するブトウ社である。

この秘密結社は前述の豹人結社のやうに殺伐な團體ではないが、非常に邪教的色彩の濃厚な結社である。會員には無論男でも女でもすぐなれる。が、この社に屬する者は必ずルベンドウといふ特殊の言葉を使ふ規約になつてゐる。何しろ、主として肉體的の享樂を目的とする團結であるから、他人に危害を及ぼすやうなことは殆んどないが、その内情は隨分醜惡なものであるらしい。

この結社は隨時隨處に小集會を催す。が、集會の催されるのは常に夜で、場所は大抵洞窟や森の中である。その實況を描寫することはちよつと憚るが、要するに邪神を祀り、さまゞの御馳走を作つて盛んな饗宴を催す。そして、次のやうな意味の歌を合唱しながら會衆一同擧つて亂舞する。

オー、來い！來い！來い！そして飲め！
誰でもいゝから神さまの子供はみんな來い！

〔第九十一圖〕 ズールの舞踊



これに來ないやうな奴は
奴隷の子だらう、ほうつさけ！
ォー、來い！來い！來い！そして飲め！

會衆の中には妻子のある者もゐれば、人妻もゐる、未婚の青年男女も無論ゐる、それが何等の拘束も受けずに、終夜心ゆくまで享樂を恣にするのである。如何にそれが猥褻なものであり、醜惡なものであるかは改めて詳說するまでもなく何人にも推察し得るであらう。

## ネグロイドの風俗

赤道以南の地には、既に記したやうに主としてネグロイド――類似黑人または準黑人と呼ばるゝものが住んでゐるのであるが、そのうち南部及東部アフリカに住むネグロイドは、人相骨格が非常に純粹の黑人とよく似てゐる。彼等は一般に丈が高く、皮膚の色はつや〳〵した暗褐色を呈してゐる。頭の形も純黑人と大差がない。たゞ、毛髮は純黑人のそれほどひぢく縮れてはゐない。純黑人の頭髮は少しづゝ丸く固まつてゐて一見宛も山椒魚の肌のやうであるが、ネグロイドのそれは大きく渦を卷いてゐるだけで概して固まつてはゐない。

ズールー、カフィール、ウガンダ等の諸族が現存してゐるネグロイドの中では最も重要なものであるが、ズールーやカフィール族の服裝は殆んど赤裸と云つていゝくらゐ單純なものである。一般に男は腰部にぴら〳〵の下つた紐、女は總の附いた帶を締めるだけで、それ以外には殆んど何ものも身につけない。尤も女は毛皮の外套を上體に卷くことがあるが、それは特別の場合に限られてゐて、平常はそんなおめかしはしてゐない。

ネグロイドは、一般は農業か牧畜かを主生業として營んでゐる。中には大規模の狩獵を生業と

〔第九十二圖〕ウガンダ人



してゐる者もある。彼等の行ふ大規模の狩獵といふのは、山野に一町乃至五町四方といふ廣い地域に亙る嚴重な迷路式の柵を結ひまわして、その一方に廣い入口を設け、數十人乃至數百人協同で一つの森または谷を包圍して、その中に住む獸類を盡く柵の中に追ひ込んで生捕りにするといふ極めて痛快な方法である。

世界各國の動物園などに送られる猛獸——獅子だの犀だのといふやうなものは主としてこの方法によつて捕獲されるのである。

**ネグロイドの武器**

彼等はそれ〳〵面白い武器を持つてゐる。中部及南部のネグロイドが用ひるケリーやアセガイはその最も優れたものである。ケリーといふのは一端に瘤のある短い棍棒で、これは目的物に投げつけるもの——いはゞイギリスやアメリカの巡査が携へてゐる棍棒のやうな武器でアセガイといふのは一種の槍で、その柄は細長く、穂先は鐵または石でできてゐて、概して幅が非常に廣い。なほまた彼等はよく手裏劍を使用する。これはすべて鐵製で、刀身から二三の枝が出てゐるのが普通である。蓋し、枝をつけるのは傷口を大きくするためであらう。

それらの武器は無論狩獵ばかりでなく、戰にも使用する。そして、戰時には護身用として、殆んど身長に等しいほどの高さの盾を用ひる。これは主として輕い木を骨として牛の毛皮を張つたもので、形は楕圓形が普通である。

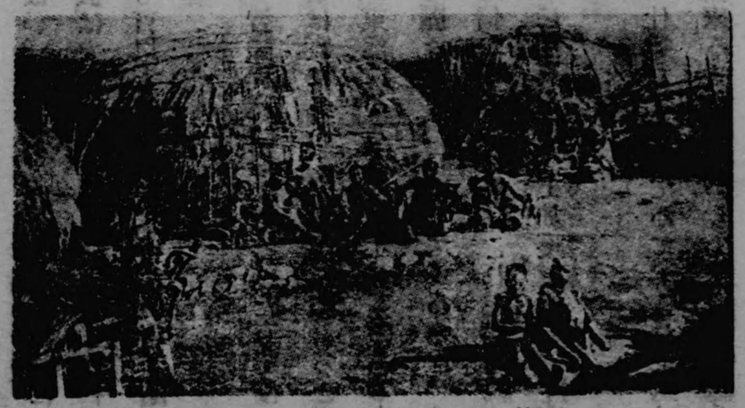
ズールーやカフイールは極めて性質が荒いのでよく異民族や他部落と戰爭をするが、カフイール族の間には、敵を一人殺すたびに、それを表示するため自分の脚にわざ〳〵切疵をつけるといふ奇風が行はれてゐる。

そこで彼等の間では脚に切疵が多いほど勇士として尊敬され、切疵がたゞの一つもないやうな男には、嫁になりてがないといふことである。

〔第九十三圖〕 ズールー人

## ズールーの計算法

ズールーにはちよつと面白い風習がある。それは物の數を表示するに手や腕を用ひることである。手の指を以て數を數へたり示したりするのは日本人も支那人も西洋の諸族もやることで別に珍らしくもないが、ズールーは指ばかりでなく、指から手、腕全部を使用するのである。即ち、十までは兩手の指を以て表するが、それ以上になると拳や腕で表示する。無論これは各部族によつてそれ〴〵異つた方法を用ひるので細かいことは判らないが、要するに、十一は左手を握つて、右手の指を一本出す、十二は同じ方法で指を二本、十三は三本……といふやうにして、十六になると此度は右手を握つて左手を出す、二十一になると先づ兩手を握つて見せてから指を一本出す、三十一になると



〔第九十四圖〕 ズールー人の家

最初に兩手を握り合せて置いて指を出す……といふあんばい。そして、いよ〳〵手で間に合はなくなると、此度は右手の腕を眞直ぐに突き出して五十を表はすとか左手の腕を曲げて七十を示すとか、兩腕を組んで百を表はすとかするのである。何でも百以上の數は數へ得ない者が隨分多いといふことである、

## ネグロイドの迷信

黑人といひ、ネグロイドといふも結局その智識程度は似たり寄つたりで極めて低いのであるから、黑人にも準黑人にも迷信は實に多い、が靈魂を恐れることは雙方の各部族とも共通のやうである。大陸の東部にゐるネグロイド系のある部族は木の葉、ほろ布などで造つた奇怪な人形を麗々しく門口に立てゝゐるが、これはそれによつてすべての惡靈を退けることができるといふ迷信からで、彼等はこれを偶像視して極度の尊敬を拂つてゐる。狩獵にでも行く時には、必ずそれに獵具を供へて加護を祈る。獲物が多ければ非常に喜んで鄭重にそれを祀るといふ風である。

またマダガスカルの土人は一般に、疾病に罹るのは惡靈の仕業だと考へてゐて、これを退けるには舞踏をやるよりほかに方法はないといふので、病人が出來ると全部落のものが集つて盛んな舞踏會を催す。これと同形式の迷信は南アフリカのローデシヤに住むマショナ族やマタベル族の間にもあるといふことである。

## アフリカの小人

アフリカには黑人、準黑人に屬するものゝほかに、俗にピグミーと呼ばるゝ小人種が諸處に散在してゐる。專門家の說によると彼等の分布區域は、赤道を南北に去ること緯度にて各三度の間、東はウガンダから西は太西洋岸に至る一帶の地に亙ることである。

小人種にも數多の部族があるが、その主要なものは、先づ大陸の中部地方に住むアッカ族、ワンブチ族、コンゴー河の大彎曲部の南方――ベルギー領コンゴーのバッア族及びフランス領コンゴーのオボンゴー族などで、これらの諸族は何れも身長三尺五寸、乃至四尺五寸、十分成長した子の體重が十一二貫しかない。そして皮膚は概して褐色、頭髮は淺褐色でひどく縮れてゐる。男には短い灰色の毛が全身に生へてゐる者も尠くない。頭及び顏の形は大體に於て細長く、眼は小さくて兩眼の間が非常にせまつてゐる。從つて外見は如何にも惡い。しかも、彼等は男女とも全くの赤裸々で一枚の木の葉すらも纏うてゐない。

多くは他民族の中に雜居して、その奴隷となつてゐるが、ある者は獨立の部落を形成して專ら狩獵を營んでゐる。彼等は狩獵に妙を得てゐるが、その武器は小さな弓矢と槍だけである。矢にも槍にもよく毒を使用する。

陷穽や罠を作ることも實に巧い。彼等の普通に作る罠は一見假小屋のやうな形をしたもので、その屋根は蔓草で巧みに覆はれ、その上にバナナや胡桃のやうな餌がのつてゐる、無論その屋根の下には深い穽が掘つてある。

彼等の部落は通常森林の中にあつて、家屋はすべて一つの空地をぐりまいて建てられてゐる。そして、その空地の中央には酋長の家がある。村の入口には必ず小さな番小屋があつて、村の番をすると同時に、村へ入る他部落民から通行稅を徵收する。箇々の家屋卽ちこの小人の住居は、細い木の枝を直徑一間くらゐの圓形又は楕圓形に地面へ立て廻して、各々の尖端をまげて全體の形をちやうどお椀を伏せたやうな形につくり、これに廣い木の葉を葺いただけのもので、小屋の高さは通常五六尺入口の高さは二三尺しかない。恐らく人間の住家として最も小さなものであり また最も簡易なものであらう。

## ブッシマン

大陸の南端、カラハリ沙漠及びその附近に僅かばかり殘存してゐる民族で、ブッシマンといふのがある。これも小人種の中に入るもので、成育しきつた男子の身長が僅か四尺から四尺四寸くらゐしかない。皮膚の色は黃褐色で、頭髮は短くて恐ろしく縮れ、少しづつ丸くかたまつてゐる。

この民族は古來一定の住家を持たず、彼方此方と流浪して、山間の洞窟や岩の間を選んでは一時的の隱れ家としてゐる。服裝は男女とも赤裸に近い。卽ち腰部に小形の毛皮を卷くだけである。日々植物の根や果物を搜し、また蜂の蜜や白蟻の蛹を採集し、或ひはまた蛇や、蜥蜴のやうなものを捕へて食料としてゐる。就中白蟻の蛹は彼等の最も珍重するもので、俗に「ブッシマンの米」と稱せられる。

極めて原始的な民族ではあるが、面白いことに音樂と繪畫とダンスとが何よりも好物で、絕えず樂器を鳴らしたり、繪を描いたり、踊を踊つたりして樂しんでゐる。彼等の愛用する樂器にゴラといふ一種の一絃琴があるが、これは普通の弓の弦に輪をつけて、それを移動することによつて調子をとるのやうにしたものである。繪は岩窟の壁や樹皮に彫りつけるのであるが、その

題材は主として人物か鳥獸かで、中には彫刻した上に彩色を施したのもある。尤も彩色と云つてもその色は赤、黃及び黑の三つに限られてゐる。

ホッテントット

ブッシマンの住むカラハリ沙漠地方にはも一つホッテントットといふ名の妙なのが廣く世間に知られてゐる民族が住んでゐる。元來ホッテントット族はブッシマンと準黑人との雜種であつて、背はブッシマンより幾分高いが、皮膚や頭髮の色は殆んど前者と變らない。

しかし、生活程度はブッシマンのそれよりはよほど高い。主として遊牧生活を營み、家畜の群とともに綠草を逐うて彼方此方と不斷の移動を續けてゐるが、彼等はブッシマンとちがつてちやんと家屋を有し、立派な部落を形づくつてゐる。家屋はちやうど椀を伏せたやうな形で、普通直徑二間、高さ一間くらゐある。細い棒で骨組をつくつて、最初に蘭草の席をかけその上に獸類の皮革を張り廻したものであるから、いはゞ一種のテント式家屋である。タルアル、即ち部落は、必ず一箇の廣場を眞中にして圓形または楕圓形をなしてゐる。その廣場は部落民の共同の家畜收容場となるのである。一クルアルの戶數は普通二三十であるが、中には五十戶六十戶といふ大部落もある。

衣服は鞣製の洋服式の上衣と前掛のやうな形の下衣とからなり、男女とも毛皮の帽子を使用する。なほ女は駝鳥の卵殼に孔をあけて、紐で膝に結びつけ、その紐の少し上方に細い革帶を締めるのが通例である。革帶にはまた龜の卵殼にブチュといふ一種の首油を滿して結びつける。ブチュは獸類の脂肪に芳香をつけたもので、主として頭髮をなでつけるのに用ひる。以上は平常の服裝であつて、盛裝の場合にはそのほかに種々の裝身具を用ひる。先づ通常、男女とも胸には象牙の輪をはめ、足首には羊の皮で造つた足輪をつける。足輪はどうかすると三十も五十もつけてまるでゲートルをつけたやうな觀を呈することがある。また盛裝の時には男女とも全身に前述の香油ブチュに煤または黃土を混ぜ合せたものを塗りつける。

ホッテントットもブッシマンと同樣、非常に音樂や舞踏を好み、殆んど毎夜のやうに部落民は廣場に集つて樂器を奏なで、原始的な舞踏をして樂しむ。樂器はブッシマンの用ひるものと大差ない。即ち主要なものは例のゴラ――ホッテントットはゴムゴムとも稱ぶ――と太鼓である。が彼等の太鼓はちよつと變つてゐる。それは素燒かまたは太陽熱で乾し固めた輪に羊の鞣を張つた

ものでは、大きさは直徑一尺から二尺五寸くらゐまでいろ〳〵ある。大體の形はわが國の太鼓によく似て細長い。大形のものはまるでセメント樽のやうである。

## アメリカ・インド人の風習

**アメリカ・インド人**

今日のアメリカ大陸は大部分白人種によつて占領されてゐる。カナダに住んでゐるのは主としてイギリス人とフランス人の子孫であり、アメリカ合衆國の住民も大部分は白人系統に屬するものである。またメキシコ以南の地には、スペイン人、ポルトガル人、イタリヤ人等の子孫が社會の表面に立つてゐる。かくてこの大陸の本來の主人公たるアメリカ・インド人は、今や北部に於ても南部に於ても社會の表面からその姿を消してしまつて、僅かにその餘命を保つに過ぎぬ憐れな情態に陷つてゐる。往時南北アメリカ全土を支配して、アステク、マヤ、インカ等の光彩陸離たる文明を生んだ氣概はもはや今日のアメリカ・インド人には認められない。その種族のあるものは既にとび、また殘存してゐるものも多くは後來の異種族と混淆して、純潔な血を傳へてゐるものは殆んどないと云つていゝ。しかし、彼等の多くはまだ固有の風習を守つて暮してゐる。從つて、風俗習慣だけを見ればまだいろ〳〵變つた點があり。面白いことがある。

**エスキモーの生活**

エスキモーの住む國——ラブラドル、グリーンランド及びグリーンランドの西方北アラスカ地方に亙る所謂北極地方は實に淋しい土地である。夏季の數箇月間を除くのほか地面は常に積雪に蔽はれてゐて、眼に入るものは僅かに現はれてゐる木々の梢のみである。穀物も野菜も成育する時がない。餘儀なく彼等は肉食を主としてゐる。エスキモーなる族稱は、本來ラブラドルに住む彼等の隣人が命名したものであつて、「生肉を喰ふ者」との義である。されば彼等自身はエスキモーと云はずして、イニューイトと稱してゐる。イニューイトはエスキモー語で「人民」の意である。

かく淋しい邊境に住む人種で、その數も餘り多くはないが、彼等は舊アジヤ系統の人種中では有名なもの〻一つである。エスキモーと云へば氷原やアラスカを思ひ、アラスカと云へばエスキモーの名を思ひ浮べるほど彼等の名は廣く知れ渡つてゐる。だが、彼等の生活情態に關しては案

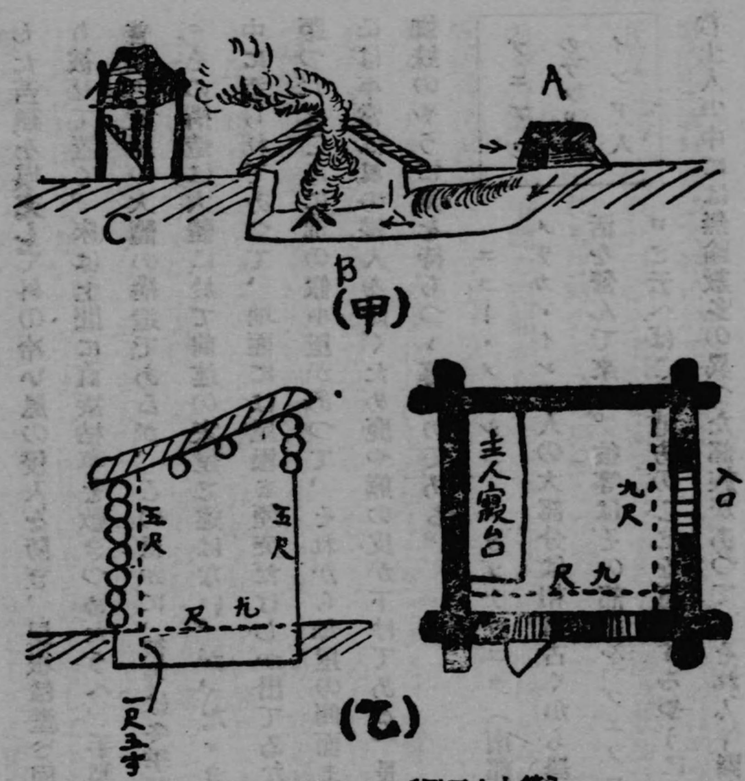
外に知られてゐないやうである。淋しい國に住む人種ではあるが、彼等の生活はなか〳〵面白い。

エスキモー人の身體は餘り大きくない。身長は充分成長した男子で普通五尺二三寸である。皮膚は黄がかつた褐色で、頭髪は黑くして直毛、顏面は扁平、概して顴骨が秀でてゐる。すべての點がわれ〳〵日本人と甚だよく似てゐるやうに思はれる。

衣服は男女とも海豹の皮で造つたジャケッ式の上着を着て、同じ材料のズボンを穿く。氣候が寒冷であるから足には矢張海豹かまたは海馬の毛皮でつくつたカミクス、即ち長靴を履き、頭には羽毛製頭巾をちやうど飛行帽のやうにすつぽりとかぶつてゐる。以上はエスキモー固有の服裝であるが、比較的歐米人と接觸する機會の多いグリンランドやアラスカの一部のエスキモーは、今日では餘ほどこれと異つた服裝をしてゐる。

家屋は各地方によつて多少ちがふが、大體の構造はみな同一である。こゝには主としてアラスカのエスキモーの家屋について記して置く。

アラスカのエスキモーの家は所謂校倉造りの丸太小屋である。校倉造りといふのは、柱を用ひないで、たゞ丸木を井形に組み合せた建築物で、わが國では奈良の正倉院がその代表的のものであるが、アラスカ土人の家は無論正倉院のやうな堂々たる大建築ではない。




〔第九十五圖〕エスキモーの家

(甲)各の家
A入口小屋
B母屋
C倉庫
(乙)通常の家

通常間口、奥行ともに三間、高さは一間半くらゐで小屋の内部は戸外の地面よりも一二尺ばかり掘り下げてある。また、丸木を組み合せた壁の間隙には、乾燥

した苔類を塡充して外の冷い風の侵入を防ぎ、屋根は壁と同樣に丸太を竝べた上に火山灰土を盛り被せて置く。床は土間に直接枯草を敷きつめたうへ、手製の席を敷くのが通例である。以上が普通の家屋の大體の構造であるが、このほかに、彼等は冬季間だけ住む特別の小屋を持つてゐる。

その構造は大體に於て前述の家屋と違はない。が、たゞきびしい寒氣を防ぐため、家全體が地中に造られてあつて、地面には屋根と煙突だけしか出てゐない。そして、入口は屋根から一二間距つたところに別の假小屋があつて、それから母屋の側面まで隧道式の斜道が通じてゐる。入口には平常は風の侵入を防ぐため鹿や熊の皮が下げてある。長い冬の日を彼等はこの地下の家で土蜘蛛のやうに夏を待ちつゝ暮すのである。

**プエブロのアメリカインド人**

ニュー・メキシコ、アリゾナ、ユタ（南部）、及びコロラドの諸州に散在するアメリカ・インド人の大部分は相當古くから農業を主生業として一種特別の村落生活を營んで來た。彼等はその部落を「プエブロ」と稱する。そこで現今ではプエブロと云へばこの地方のことを意味するやうになつてゐる。が、プエブロ地方に住む土人の中には無論數多の異つた部族があつて、それ〴〵固有の風習を持つてゐる。そして、彼等の生活狀態は大體に於て二種類に分れてゐる。一つは農業を主生業としてプエブロに定住する者であり、他の一つは一定の住家を有せずして所謂遊牧生活を營むものである。

今日では何れも往時のやうな獰猛な精神は有しなくなつたのでさほどでもないが、以前には、兩者の間には爭鬪の絕間がなかつた。お互に激しい憎惡を懷き、絕えず衝突したものである。遊牧民の代表的のものは、ショション族、ユート族、アパチエ族及びナヴァホ族で、そのうちアパチエ、ナヴァホの二族は北方から移住した民である。彼等は以前ほど獰猛でなくなつたとはいふものゝ今日でもまだ慓悍な氣質が全くなくなつてゐるわけではない。折々は所謂ゴッド・ダンス（幽靈舞）のやうな激烈な宗教運動の中心となつたり、殘忍酷薄な白人に對して戰鬪をいどんだりする、現存アメリカ・インド人中では最も頑もしい部族である。

さて、プエブロの土人は、前述の通り農耕を主生業としてゐるのであるが、彼等の耕地はすべて階段式耕地とでもいふべきもので、耕作は決して樂でない。階段狀になつた高い畑に一々灌漑しなければならないからである。作物はもとは主として小麥であつたが、今日ではメロン、南瓜、隱元豆、綿等も作つてゐる。彼等の間には副業として七面鳥を飼養してゐる者が多い。とにかく

プエブロの土人はもはや決して野蠻人ではない。周圍の異民族に劣らぬ立派な農耕者である。

しかし、彼等の日常生活には、まだいろ〳〵變つた點がある。彼等のうちのある者は依然として山腹などの岩の間に住んでゐる。自然の岩窟や岩と岩との間隙を利用して住家をつくり、麓まで極めて嶮岨な小道をつけて往來してゐる。どうかするとたゞ斷崖のところ〴〵に足場がつくつてあるだけで、小道すらもないところがある。部落は通常所謂キャニオン——峽谷にあるのであるが、何れの部落に於ても人家はそのキャニオンの山腹に階段のやうに建てられてゐて、みな麓からは容易に到達できなくなつてゐる。部落そのものが一箇の堡塞のやうなものである。無

〔第九十六圖〕 カナダ・インドン人



論これは異民族、または他部落の者の襲撃を慮つてのことに外ならない。

家屋の屋根は大抵丸太か、木の枝かを竝べた上に、土を置いたもので、平面になつてゐる。そして、その眞中に素燒の煙突があり、軒先には同じく素燒の桶がついてゐる。家屋の周圍には入口もなければ、窓もない。どうかすると四方とも自然の岩のこともある。出入はすべて屋根の一隅に設けられた入口——穴からするのである。

衣服は比較的いゝ。何か儀式めいたことのある場合には、男は美しい打紐の飾りのついた白木綿の下帶をつけ、女は濃青色の上衣——左肩は露出する——を着て派手な色合の飾帶を腰に結ぶ。なほ脚には鞣製のゲートルを卷き、鹿皮製の靴を履く。マントのやうな形の被衣を羽織る場合もある。頭髮は通常所謂お下げにして、二筋の眞田狀に編み、その各々を肩から前へ垂れ下げる。なほその先端にリボンを結ぶ者もある。

彼等の間にも例のトーテミズムが行はれてゐる。從つて社會組織は隨分複雜である。現にホーピ族などは、六十の氏族に分れてゐて、しかも各氏族はまた十二のフラトリーに分れてゐる。フラトリーといふのは、兄弟の盟を結んだ者の團體である。以前には羚羊と蛇とをそのトーテムと

する氏族は各々一種の秘密講社を有してゐたが、今日ではそれはないらしい。だが、全部族のある年齢の男のみによつて組織されてゐる一大結社があつて、彼等の社會では非常な勢力を持つてゐる。

## 中央アメリカの土人

中央アメリカの土人は大體に於て三種に分類することができる。即ち、古代メキシコ文化の影響を受けてゐる北部の諸族、マヤの文明を受け繼いでゐる中部の諸族、及び文化並びに言語の素質が著しく南アメリカなる諸族のそれに類似してゐる南部の諸族である。

第一の北部の諸族中で最も重要なものは、ナファ族である。古代メキシコの主府テノクチトラン——現今のメキシコ市——の住民たりしアステヶ族もこのナファ族の一分派に外ならない。彼等の多くは矢張農牧を營んでゐるが、その生活情態は既に記述した北アメリカの諸族のそれと大差ない。

地震の多い關係から家屋は主として輕い木造の平家建で、しかも屋根は棕櫚の葉で葺き、外廓——壁に當る部分は筵張りといふ頗る粗末なものが多い。しかし、高地に於ては寒暑の差がかなり激しいので、かゝる粗末な小屋に住むものは殆んどなく、大抵アボベと呼ぶ太陽熱によつて乾し固めた一種の煉瓦を以て建てた家に住んでゐる。屋内の設備、家具等は極めて簡素で、特に記すべき何物もない。

〔第九十七圖〕 アマゾン・インドン人

服裝も頗る簡單で、氣候の暖い低地では男は長い綿布をインドシのやうに股に挾んで腰に卷き、その一端を前に、一端を背後に垂れて下げる。また、女はたゞ一枚の腰卷を纏ふのみで、それ以外には殆んど何物も身につけない。高地の住民は氣候が寒冷であるからそれだけでは到底凌げない。そこで男は大きなマントのやうなものを纏ひ、女は腕のないジャケッを着る。なほ大西洋沿岸に住む諸族の女は大抵それ以外に一種の外套を用ひる。尤も以上は彼等固有の服裝について述べたのであつて、今日すべての土人がかゝる服裝をしてゐるといふわけではない。中には洋服を用ひる者もあり、洋服まがひのものを纏ふ者も多い。だが田

舍の農牧者の間には矢張固有の服裝が多く用ひられてゐるやうである。

## 南アメリカの蠻人

南アメリカには比較的純粹のアメリカ・インド人が住んでゐる。殊に、ペルー、チリー、ボリビヤ、コロンビヤ等の山地、卽ちアンデス山系の中やアマゾン河の上流地方には、昔ながらの生活を營んでゐるものが多い。

そのあるものは野蠻とはいひ得ぬにしても、極めて低級な未開人である。彼等の多くは殆んど裸體で暮してゐるが、裝飾品を身につけることだけは非常に好きで、鳥類の羽毛を用ひて、頸輪、帽子、腕輪、脚輪といつたものを作る。唇や耳に奇怪な裝飾品をつける部族も尠くない。ブラジルにゐるボートクードーはその代表的のものである。この部族の者は下唇と兩耳朶とに孔を穿けて、それに直徑二三インチもある木製の栓を嵌め込んでゐる。であるから彼等の下唇は宛も棚でも突き出したやうな形を呈してゐる。

住家は部族によつて一樣でないが、アマゾン河上流地方にゐる諸族のそれは、大抵人字形に樹木の枝葉を立てゝ、中に乾いた木の葉を敷くだけのことらしい。比較的開けてゐるアルゼンチンのチャコ地方の土人にすらかゝる原始的な家屋に住んでゐる者が尠くない。アンデス山脈の中に



ゐる蠻族中には、アフリカ土人のやうに岩窟内に住んでゐる者もあるとのことである。

要するにアンデス山系地方と、アマゾン河の上流にゐる諸族は、現存してゐるアメリカ・インド人中最も野蠻未開なもので、殆んど赤裸で、吹矢や弓矢を用ひて狩獵を行ひ、前述のやうな小屋の中に暮してゐるのである。彼等の中には、今なほ首狩りをやる者が尠くない。ムーンドルークー族とヒーウアーロース族とはその最も著名なもので、彼等は首を持ち歸つて、その顏面に彩色を施し、頭髪をといて羽飾りをつけ、原形のまゝ乾し固める。そして、それを麗々しく小屋に飾つて置くのである。奇習、迷信はまだいくらでもあるが、要するにアフリカの蠻族のそれと大差のないものであるから割愛する。

# 太平洋諸島の住民

## ハイカラな土人

太平洋諸島民の風俗は最近非常に變化した。

ハワイ、ニュージーランドのやうな歐米人の多數入込んだ土地はもとより、絶海の孤島にも西洋の文化が浸染して男にも女にも樹の皮で織つた荒妙(あらたへ)の代りに金巾やキャラコの洋服を纏ひ、パンの木の實やヤム芋を捨てゝ眞物(ほんもの)の小麥のパンを嚙るといつた輩が多くなつて來た。

クック群島のラロトンが島などでは、殆んど各家に馬と車とを備へ、自動車を驅るものも少くないといふことである。されば、彼等の生活現狀は決して一般に考へられてゐるほど原始的なものでもなければ、珍奇なものでもない。少くとも外觀はマライ人の生活と大差のないくらゐの程度にはなつてゐる。

だが、如何に外來の風習が流行ればとてその土地固有の習俗が全然跡形もなく消滅してしまふといふことはあり得ない。太平洋諸島にも、精細に調べて見れば隨分面白い風習が諸處に殘存してゐることを發見する。

## オーストラリヤ土人の習俗

所謂白人立國論を高唱して有色人種を排してゐるオーストラリヤにもまた夥しい有色人種が殘つてゐる。しかもそれはこの大陸生え抜きの土人である。

オーストラリヤ人は概して丈は高い。先づ成熟した男子は大抵五尺五寸以上ある。皮膚の色は一見黑色を帶びてゐるやうに思はれるが、實際は赤褐色或ひはチョコレート色とでもいふべき色合、頭髮は黑くて縮れてゐる。しかし、この縮れ工合はアフリカ黑人のそれのやうに細かく丸まつてゐるのではなくて、直徑一寸くらゐの大渦をまいてゐるのである。ちよつと生後間もない赤坊の頭といつたかたちで、大陸の南方へ寄るほどその縮れが甚だしい。また腕や上體の大部は普通、短くて渦を卷いた生毛で蔽はれてゐる。口髭や顎鬚を有するものが割合に多い。無論何れも頭髮と同樣波狀を呈してゐる。骨格は概してしつかりしてゐるが肉附きは餘りいゝ方ではない。

生活は極めて原始的で、狩獵と魚漁とが一般の主生業となつてゐる。農業を營むものはまだ殆んど絶無と云つていゝ。であるから、彼等は毎日山野を歩き廻つていろ〳〵の果實、茸、苔の類または植物の幼芽や根を採集する。また獸肉魚肉のほかに白蟻の蛹、甲蟲、芋蟻といふやうなも

のを集めて來て食料とする。

狩獵は前述の通り彼等の主生業であるが、その方法は恐ろしく幼稚なものである。大陸の東北端に位する地方の住民は弓矢を用ひるが、それ以外の者は投槍と棍棒――長さ二三尺の堅い棒で主として目的物に投げつける――とを使用する。彼等はまだ弓矢を用ひることを知らないのである。殊に未開な南部地方の土人の狩獵法は面白い。同地方のある部族は目的物に氣附かれぬやうにするため、全身に泥を塗りつけ、またある部族の者は葉の多い木の枝の束を携へて行く。

魚を捕へるには、水が深ければ網を用ひるが、背の立つ場合には、水中に突立つてゐて、近寄つて來る奴を手攫みにするか、または木製の盆のやうなもので手早く岸邊へすくひ上げるのが普通である。水中に泳いでゐる魚を手攫みにするなどはまるで嘘のやうな話であるが、子供の時から、否、先祖代々それをやつて來た彼等にして見れば、別に困難なことでないのである。尙、南部地方には釣る者も間々あるが、その釣針は大抵獸類の骨か木で作つたもので、金屬製の釣針を用ひてゐる者は殆んどない。

彼等の間には、まだ陶器を造る術が知られてゐない。釜や鍋の類も無論ない。從つて、食物を煮焚きすることは不可能であるから、生食できないものはすべて焚火に直接あてゝ燒くか、または熱灰の中へ埋めて蒸し燒きにするか、或ひはまた石を灼いてその上へのせて燒くかして用ひる。

家屋は何れも極めて簡粗なものであるが、その形は隨分まち〳〵で、柱も壁もなくて地面から直ぐ屋根になつてゐるものもあれば、また、適當の洞窟のある地方では家屋を造らないで洞窟の中に住んでゐる。

概して裸體であるが、氣候が變化する地方、即ち寒い時期のある地方に住む者は、カンガルーの毛皮、袋鼠の皮、獸毛のフェルトといふやうなものを身體に卷きつけて腰部に人間の毛髮や樹皮を繩のやうになつて帶にする。しかし、この帶は衣服に附屬したものではなくて、むしろ一種の裝身具といふべき性質のものである。刺靑または身體にいろ〳〵の染料を以て模樣を描くことは何れの部族でも普通に行はれてゐるが、刺靑は主として自己の屬する部族、階級または年齢を表示するために行ふのであつて、裝飾の目的で之を施すものは殆んどないと云つていゝ。頭髮は全く自然のまゝに放置してゐるものもあれば、獸類の脂肪でなでつけてゐるものもある。また、ある部屬の者は短く刈り込んでゐる。頸飾り――木の實、獸類の齒牙等を毛髮でつなぎ合せたも

のが多い――、鼻飾り――獸類の骨、羽毛等――は一般に用ひられてゐる。

金屬を加工することも知らなければ陶器を造る術も知らないのであるから、日用器具はすべて石、木、革等で作つたもので、何一つとして感心できるやうな代物はない。舟と稱し得るものは、全大陸を通じて、たゞニュー・サウス・ウエイルズ地方に之を見るだけで、その他の地方には漸く樹皮で造つた舟のやうなものがあるにすぎない。しかし、武器はなか〳〵種類が多い。弓矢を用ひるのは前述の通り大陸の東北端に位する僅かの地域に住む者だけであるが、――多分彼等はニュー・ギニヤ人の影響を受けたのであらう――棍棒は一般に用ひられてゐる。棍棒には手に持つて敵を打つものと、專ら手裏劍のやうに投げつけるものと二種あつて、その各々にまたいろ〳〵異つた形のものがある。クウインス・ランドの土人はそのほかに一種の投槍を使用する。それは長い棒の先端に固い石を附したものである。一般に楯を持つてゐるが、大抵木製で、しかもその幅は極めて狹い。

オーストラリヤ土人の間にも例の「トーテミズム」の思想が廣く深く浸み込んでゐる。彼等のトーテムは主として獸類で、すべて部族のトテームとなつてゐる獸物は、たとへそれが人間に害



を與へるものであつても、その部族の者は絶體に之を害することを許されない。各部族にそれ〴〵トーテムがあるばかりでなく、各家族にもトーテムがある。そして、トーテムを同じくする者同志の婚姻は許されない。例へば猫をトーテムとしてゐる者は必ずそれ以外のもの――鮫だとか犬だとかバナナだとかいふやうなものをトーテムとする者と結婚し、猫系同志は互に同族と見るといふあんばいである。從つて常に夫婦は互にトーテムを異にしてゐるので、その子供は母親のトーテムを受け繼ぐ定めになつてゐる。如何なる場合にも自家のトテームを殺生したり、食用に供したりはしないが、殊に植物のトーテムの場合にはそれが嚴重である。例へば、ニッパ椰子をトーテムとする者が屋根を葺く時には、ニッパを避けてサゴ椰子を使用する。蘭草をトーテムとする者が蓆を編む際にはバナナの葉を用ひるといふふうである。

## メラネシヤ人

オーストラリヤの北東、フイリッピン群島の南東に當る太平洋の諸島――ニュー・ギニヤ島、ビスマルク群島(ニュー・ブリテイン、ニュー・アイルランド、アドミラルテイー其他の諸島)、ソロモン島、フイジイ島其他の諸島にはメラネシヤ人と稱する黑色の人種が住んでゐる。

ヤの内地と、ニュー・ブリティンの一部――スルカ族、バイニン族等――とに住み、後者は代表的のメラネシヤ人であつて、殘餘の諸島に住んでゐる。尤も、フイジイ諸島とソロモン島の東南方に散在する諸小島の住民は、メラネシヤ人とはいふものゝ、餘ほどポリネシヤ人の血が混つてゐる。またその文化もポリネシヤ文化の影響を多分に受けてゐる。

〔第九十八圖〕 ニューギニヤ人

ネラネシヤ人は總體に羊毛のやうに細かく縮れた頭髮の持主であるが體格は大體に於て二種類に分れてゐる。丈が低くて、鼻が恐ろしく扁平なものと、痩せぎすで、額が狹く、且つ鼻が甚だしくしやくれてゐるものとである。前者は現今の多くの專門家によつてパプア人と呼ばるゝものであつて、主としてニュート・ギニ



## メラネシヤ人の生業

メラネシヤの住民は、メラネシヤ人もパプア人も大體に於て農業を營んでゐる。眞の野蠻未開の民は、今日ではたゞニュー・ギニヤの内地に殘つてゐるだけで、それ以外の地には殆んどゐないと云つていゝ。

メラネシヤ人の農耕法は、フイリツピンの麻栽培地やブラジルのゴム山で行はれてゐる方法と同一である。即ち先づ最初に生えてゐる樹木其他を伐り拂ふ。それには今日では鐵製の道具が用ひられてゐるが以前にはすべて石斧、貝殼製の小刀等でなされたものである。伐り倒した樹木はそのまゝ暫く放置して乾燥するのを待ち、適當の時期を見てすつかり燒き拂ふ。夥しい木材や柴が燒けるのであるから、うまく行けば地表二三寸くらゐは灰のやうになる。わが國の開墾地に於けるが如き煩瑣な手數はかゝらない。またかけもしないのである。伐り倒した木や柴を燒き拂つて仕舞ふとすぐ先の尖つた棒を以てその燒跡に淺い穴をあけて歩き、それに苗を植ゑるなり、種子を蒔くなりして實のるまで放置して置く。餘ほど氣が向かなければ除草すらもしないと云つた大まかな農耕法である。

作物は主としてタロ芋、ヤム芋及びココ椰子で、バナナやパンの實の木は比較的に少い。殊に